江戸名所圖會

四

丘氏之記

江戸名所圖會卷之二

天璇之部目録

東海寺　俳諧　谷風墓　開山沢庵和尚木牛　天王社　例祭礼の図

鈴ヶ森の松

光巖寺

貴布禰明神社

天龍寺

海晏寺　後河内神社　二王門　鈴ヶ森　磔場　鈴ヶ森の碑　小塚原　時雨塚　石塔　蓬莱山　延命水　明神森

上古海道

西光寺

來福寺　小塚原　時雨塚　石塔　境内梛樹　石比羅　山王社　子貴牡丹　八幡宮　洗池　當當松　地蔵堂　水月観音　二階堂山　目黒不動　子貴松　鈴ヶ森　磔柱　太鼓橋

海上人產湯井

蘆島明神

磯の清水

中の橋

品川驛　同海苔の圖

品川寺　水月観音

常行三昧寺

品川寺

長遠寺

寧來明神社　蛯島

本光寺　開山日什上人墓

同海苔の圖　浦漁舟の圖　猟舟の圖　鯨魚捕之圖　安政年間

同巻の圖

利益辨財天

大龍寺

妙國寺　本堂　六層塔

千疋荒神堂

敷須明神社

納經塚　磔柱　太鼓橋

武藏國多摩郡八王子千人町　内章

鈴森八幡宮 鈴石 笠島
鎧懸松 八景坂 俗やらん坂
木系山 相模往古ノ名木 桃雲寺
長榮山 本尊 寺 祖師堂 鬼子母神祠
宝物略記 檀木 祖師繪ノ事 祖師茶毘ノ所 擇薗流ノ井
坊舎 惣門 祖師略傳
馬迎八幡宮 梶系氏宅地
稻木村光明寺 功徳水 長導大師像 日蓮上人 親掛松 擇薗流ノ井
矢口村新田明神社 同所ニ同 親掛松ノ碑
古川藥師堂 浪客古樹 日蓮上人 親掛松
大森 名産海苔 神社 同麦藁細工
行方郡玉造明連宅地 本尊泉
妙安寺
長照寺

磯馴松 菖蒲塚
行慶寺 戸越八幡宮
蓮華寺 女塚 題目堂 七面堂
光明寺の池 十騎社 日本武尊ノ祠
玉畑村光明寺 蒲田梅林
蒲田八幡宮 雀立松
六郷八幡宮 八幡塚 古松

羽田弁天社 池ノ端 新吉原茶店
池ノ端 六字名号碑 河崎宮宅地
石除大師堂
鹽濱
海雲権現社
焼ノ森
養光寺
鶴見川 鶴見橋
成願寺
蛭眼堂

六郷渡
堀岡山正宮
池上氏所藏蟠龍盃 安中酒徒略傳
石観音堂
直ノ弁天洲 厩單勝塚
栗生九澤 厩忠良塚
佐々木明神社 勝福寺旧址
東吉不動堂 秋田城介義景旧館址
白旗八幡宮 子安観音堂
義家入道墓 観福寿寺 寺
浦島是洗井 同櫻掛石 浦島古墓 浦島ノ体 日高地藏
金毘羅祠 仮縄社 人穴社
休奈川 蛭貸食屋
北条上杉合戦場 松隱寺
浦島 浦島明神祠
神奈川 神奈川澤 同遠景 本覚寺
上杉川 珍焼松 浦島ノ墓 三宝寺 平尾掛見の松
熊野権現社 鉢満院
瀧の橋 瀧の川

宗興寺　観音山
雲松院　小机城跡
折本淡島明神社　梅樹　浄祠の碑
本覚寺切通　本覚禅寺
阪綱権現社　袖ヶ浦
姥島
帷子里
左神宮
蒔田城跡
青木明神社
神明宮
金澤　同塾ある　金沢貞顕墓　普賢象　文殊像
本牧十二天宮
帷子川
品野坂　一名権左坂
乗蓮寺
くく妙寺　天満宮　渡橋
杉田梅園
独見堂　美女石　一宝
鎌野権現山　古城
慶雲寺
泉谷寺
師岩鎌野権現宮
多目周防守宅地
西向寺
陽光院
道灌山
富士浅間祠
洲乾兵衛天祠
吾妻明神社　天神の森
杉山神社
程ヶ谷新町
神戸川
古町街道
界木　比企能本
二俣禅庵堂　鎌倉権祠　ヒツ石　麻耳山　二王門
仁吉明神社
同海鳥と製る図
擲筆松
稱名寺　塔頭　金沢顕時墓　採梅　寺宝略目
兼好法師閑居舊址
薬師堂　善應寺
洲崎
瀬戸明神社　摂社　三本杉
金龍院　飛石　九覧亭跡　日蓮上人石像
上行寺
瀬戸弁天　福石
瀬戸稲荷　旗亭有之
瀬戸橋
天然寺
野島　土人百軒島と云
瀬戸
泥牛菴　獅子殿　蛇混抱
岩松寺
油堤
三艘浦
界地蔵
崔ヶ浦　一名天狗ノ懸ル松
太寧寺　蒲冠者範頼墓
中島岩根付岩
猿島
榎戸湊
裸島
金澤文庫舊址　御所ヶ谷
薬王寺
浦の郷
野島の渡
照天松
圓通寺　御宮
称仁寺舊跡
六浦川
光傳寺
笠根権現社
烏帽子島
名産甲香

萬松山東海禪寺　品川北馬場にあり花洛大徳寺派の禪宗
江戸觸頭の一員にて當寺ハ輪番ゆゑ年々八月より交代也
寛永十五年戊寅　台命を奉りて澤庵和尚開創せり
所の禪園なり　塔頭十七宇あり
佛殿　釋尊の像を安置す　額　祈禱堂　天倫筆　二重家根額
世尊寺殿同筆　山門樓上ハ觀音を安置す　額　潮音閣　十境の一　大明院宮
公辨法親王真跡　中門額　東海禪寺　天倫筆
鐘樓　本堂の右にあり　數一百八　重
樓と別に十境の一
門へ行道の右にあり寛永の頃
十境の一に宝暦の頃暴風に吹折
方丈の庭の泉水をのぞみ十境の一なり
山下清泉流出師引之爲二池於室之北面一云云
此所古法問ありしゆゑ則十境の一なり　寺後
釣玄室　池の北の汀にあり　大樹寛永二十年仲秋の頃澤庵和尚と
台駕入東海既月於山亭台顏怡怡而出山亭猶乘月明倚池上小亭亦侍傍云云
釣玄室の東より並ぶ寛永の頃　大樹陵茶の水なり　是も十境の一
掬龍井　掬せむその水清冷甘美なり
一なり　寛永二十年癸未三月十四日　大樹當寺へ台駕を接せらるゝ所なり
其時遠州矣小堀政一に命せられよろしくせらるゝ所なり

萬年石之記

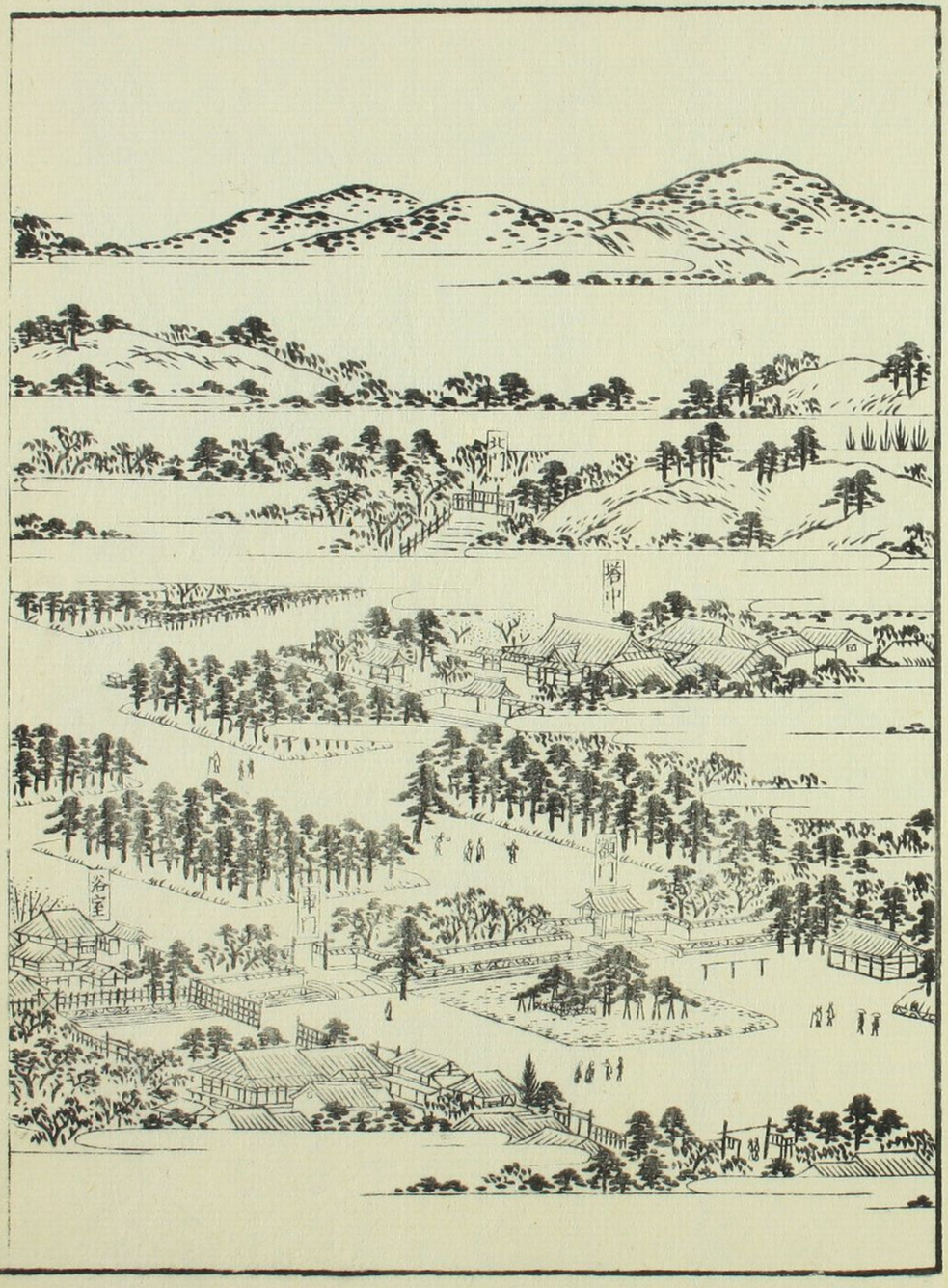
今茲寛永癸未三月十四日偶
左相府見移
台座於此池沼下池有島島有幽
石熟見之無奇形恠狀不端險拱立若由醉兮栗里
翁之石乎或由醒兮李悳裕之石乎皆不然彼防風
之朽骨乎或於菟之白額乎共不然唯突兀而在草
裡痴兀而合德容是世之求奇者未曾知此石之所
貴偏得怙淡虚無之趣而有谷神不死之體如至虚
極也似守靜篤也
相君命侍臣曰此石不可無
名各以所思聞焉於此諸子雖有所思非無所懼斟
敢相半也時小堀遠江守政一侍茶爐下
君有
肯政一即起向石三呼萬年石石三点頭矣
君下佳言曰不疑是萬年石也大度之一言以定天
下況於石乎鳴呼石乎哉石乎哉入于
台覽一
旦發光而陟變改其觀益為萬之言也未必可以十
千而限凡數者始一而窮十始十而窮百始百則窮
千始千則窮萬以萬算則不知幾十百千萬億兆年
以此無窮為石之壽量以石之壽量比
君壽山
則累華頂萬八千文猶在麓者耶以世計則復不知
其幾萬世矣村語以銘曰
重於九鼎萬年石
鈞命如驚豈可輕
和氣一圍無盡藏
以秋送復
以春迎

住山芒衲澤庵宗彭敬書

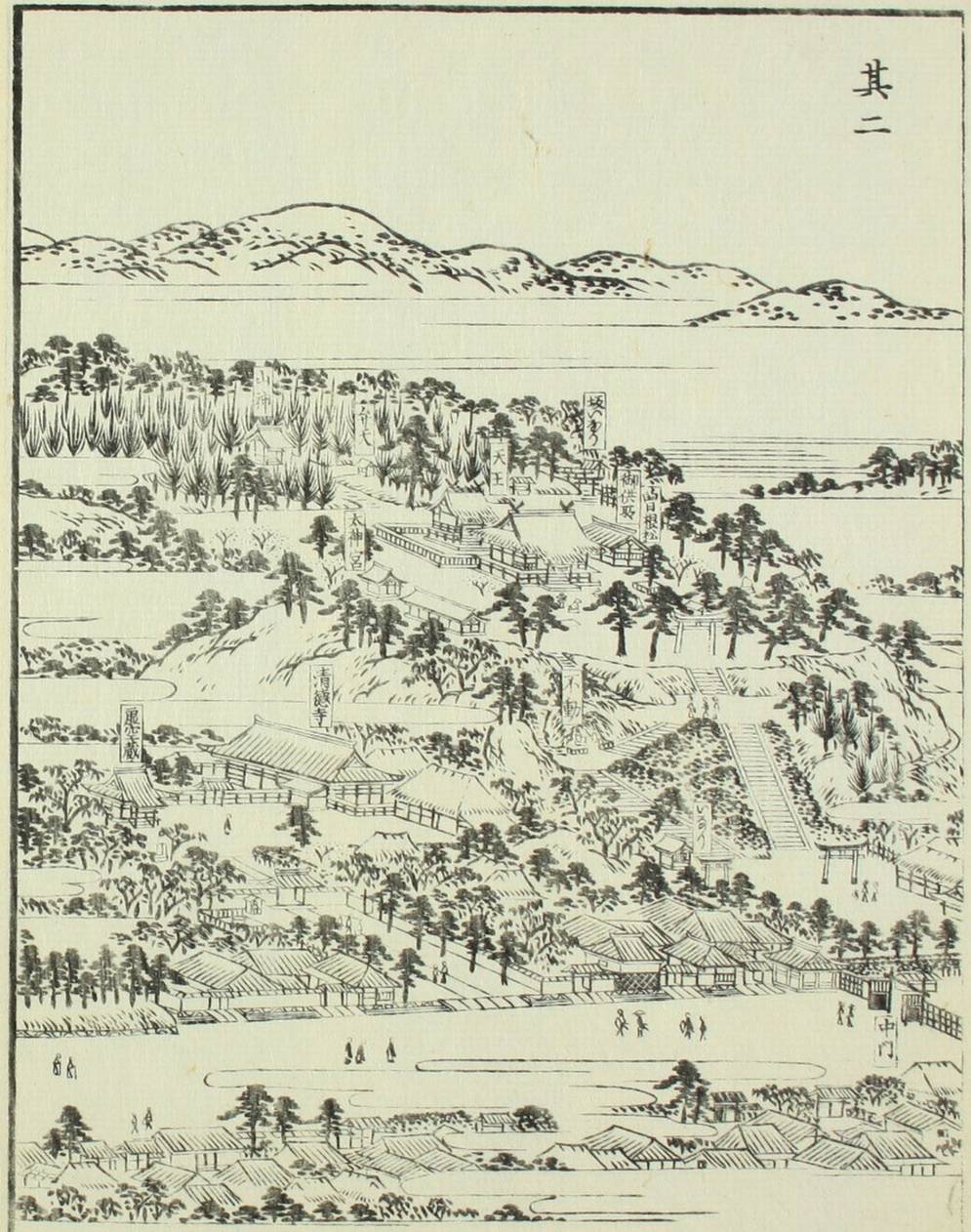
法寶堂 一切経を収蔵む池より北にあり当寺十境の其一なり

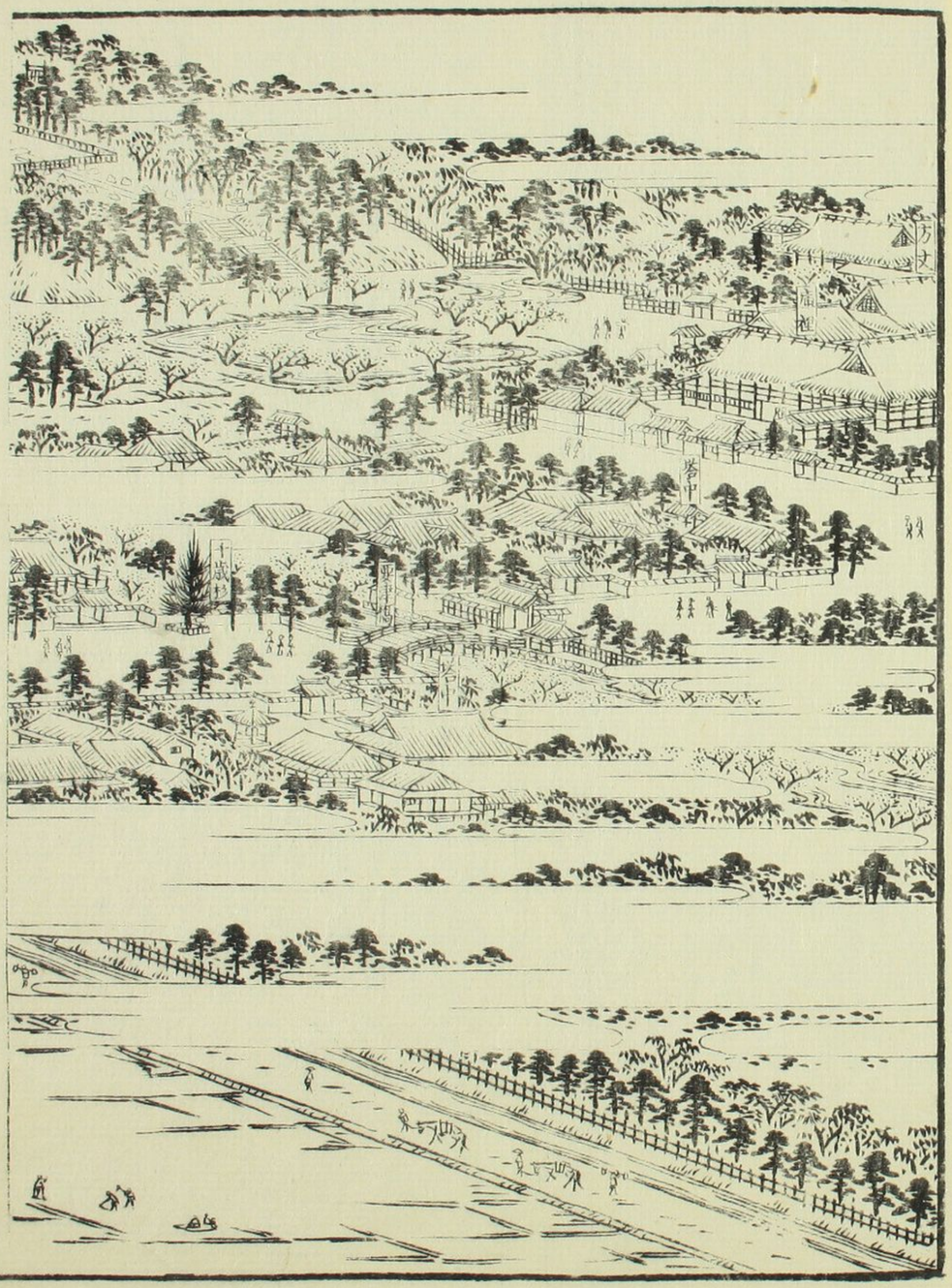
方丈 書院内佛殿廊下等の杉戸壁上の画ハ狩野探幽の筆なり加茂競馬南都焚木能其餘人物花鳥の類あり

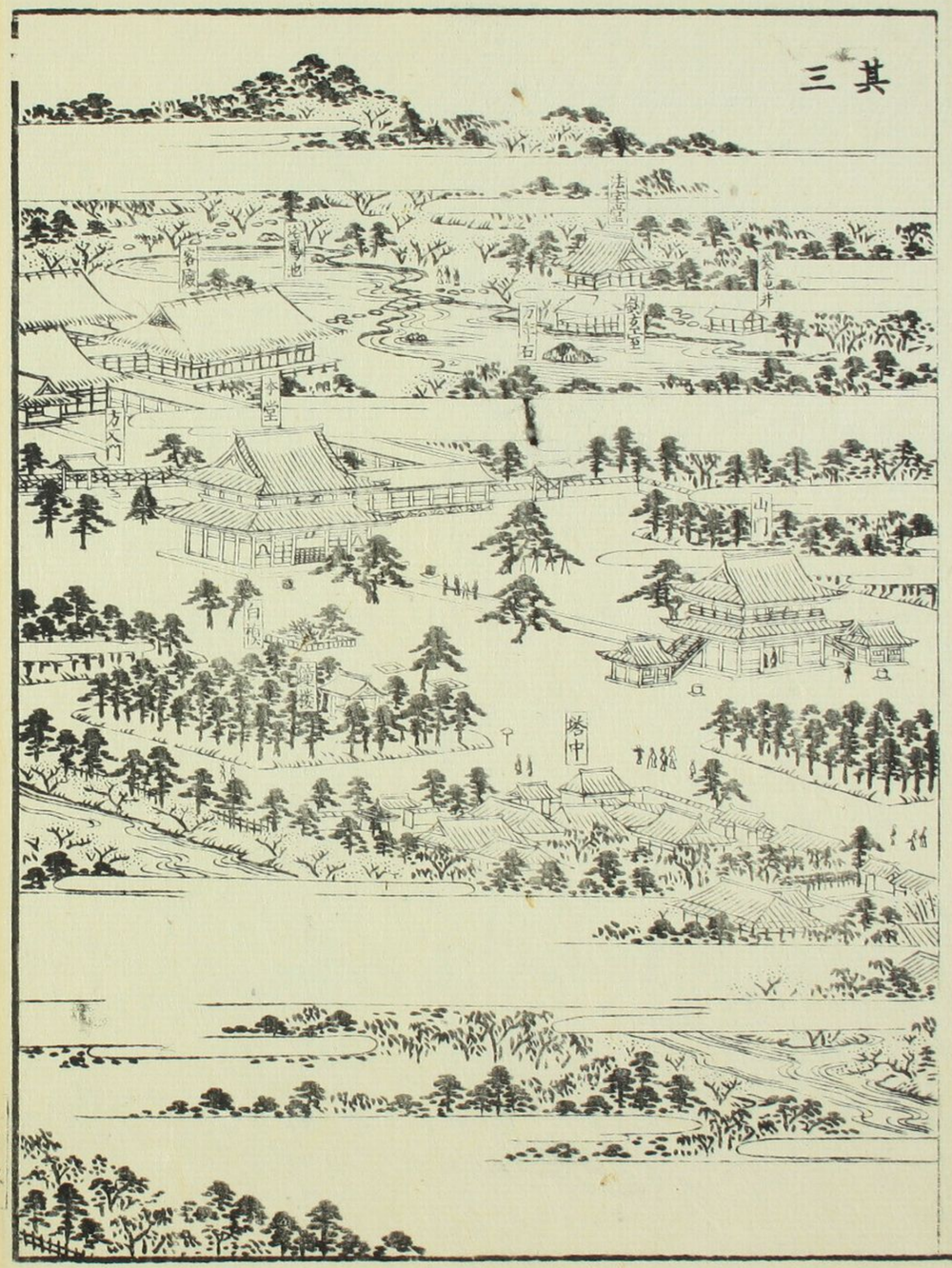
牛頭天王社
東海禅寺



其二






其三

開山澤庵和尚廟

方丈の西北の隅丘の上にあり開山和尚の遺志により石塔を建てしを世々自然の巨石を置左右よりさし三四尺程つゝみ石を數十立並べ〳〵是を羅漢石と号く廟地の趣ハ小堀遠州筆の指圖ありと〳〵和尚の行實を記せ〳〵石碑を建〳〵是を慈隱塔と号く當山十境の一なり銘文左のごとし〳〵

開山澤庵和尚塔銘並序

昔南浦明公正元間嚴南遊掉入大徽國偏歷諸老時虛堂祖翁主淨慈徃謁之參禪大悟天下學者入室者千有餘人也嗣其法者以十數計若興金炫今方盡不可思議之精進入萬緡十有五爐冶陶鞴以以降燈燈燈燈相傳于今矣其自謂平生也於師之寂滅後宗鏡禪寺董甫之創伽藍堂宇法堂僧堂庫院山門鐘樓鼎新之又建三門兩廊及方丈之西北隅丘上有巨石數十立並〳〵是羅漢石〳〵廟地趣小堀遠州筆指圖有〳〵和尚行實記〳〳石碑建〳〵是慈隱塔〳〵當山十境之一

其四

生下飢然鈎卓問大河号黑幕寺入之復之加疾受号月月身食弟
涯扁投爾淵永己行已折止已折脚陰之鐫之故里構一把茆於宗
後歸寬玉容玉室翁粟同貶給于日食而無遐事不易下鄉中鳴下降之有徵
子也於十不而道預一其舊聾山曰下不無　上法奏命師色寬知默可規固草東於日國　皇晏曰召知還其永己行二遇東二行己折止已折脚師係師有鐫之
武門東一痊烘俗知默可規固草東於日國　皇晏曰召知還其永己行二遇東二行己折止已折脚師係師有鐫之
野人海日一　予緣墨知之識水海金而師皇召聽檢還其永己行二遇東二行己折止已折脚師係師有鐫之
氏在之也日　賻盡書也　新生落城下号情入遇東二行己折止已折脚師係師有鐫之
安泉西世曉朝衆遺于正　筑輝成南誼也大　優暫翁止已折脚師係師有鐫之
齋南北壽天奏僧誠贊保鈎之師之品天願悅　渥寓師係師有鐫之
翁着岡七授莫着云詞乙命久奉日川應下師仙對止抵數有鐫之
徃祥唯十筆入衣塵於酉益昌　賊劍大　奏院望焉武不事内故
年雲種有書木喫全其夏是辛　賀草現綸我講愈　陵變昇不事内故
昇樹松三漫牌飯身上令依已鈞頌莞國旨山原高　第人戊幕城色室翁粟同貶給于日食而
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刹師　有使聾賊　二論寅下外壬翁粟同貶給于日食而
行名其臘字本平後爲師之降賊聾使　有　二論寅下外壬翁粟同貶給于日食而
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同貶給于日食而
求寂不十然之矣莫宻一願本歌厥住于皇徹瀾師師扌寸一之於宗鏡
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一營牛幕窮食而主
其曩塔九逝堂莫經年相有出首　山祖之唯起京師中鳴下卿而山
塔背益塵實云爲設仲相功世祈　曰若圭有如師中鳴下卿而山
因參依下十云求齊冬中于制國台萬此章禪懸時之降而無山之有
箱學遺全二彌誼莫示親本法基輿松也寶師江時地徵

物涕塵邑在寅禪峰延驊綿寺本歿于師襲彭界難命師驍亟之之
槩靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典
抱有視南門造問其爲如古二校師春室護予能平匝所鏡之就籍
烟時聲再蕃大道去閒見人年着眚聞師同藝殺素寫契移機明附
霞寓邑建乙仙詰留山點風而邈衆師之邑　予佛作鏡悟同辨堂師
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失着略壽投邑縱古初
痼京泡宗南拾馳其也同亡院德春辨對宗笑快入像印南撗鏡雲
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂麾索證宗應禪英
時芳有巫罹軒謝重鰡有告本同席驚捷着何子界贊語寺荅師偉
僑抹時不鸞師之陽法宗退寺年慶異而爲不突而鏡号師如一公
城菴在徐彼禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉曰孰譽東玉
州鞘泉尋之坐丑殿慶着于德八丁謨轉考起云降毫澤侍實滴甫
薪光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父麾書菴巾透公琮
之匿天舊師暇新信讚建南香主師真田緇平攘宗曰賦瓶綢住公
姒耀下觀告綸南尹之一泉爲龍年跨也侶天羊活麈秘日金邑以
勝有邑師邑大宗公于菴南古輿三竈此殊下隱機面夜夜麟之法
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器
守入愛名相年鐘夕南曰素供南有也鏡圓領底由描其究頼春期
空泊幽刹彼譜摟入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡遼菴師
寂巔邃右於北甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師招

未果今茲賷之不已講習道義於乃師者莫若余也
於翁亦然故不揣蕪陋聊記蔓乙遂爲之銘曰

虛堂正泒
眞子嫡孫
經過十世
師扣其室
道播四海
挈矩疊規
一圓相中
淵才泉湧
語而明矣
橫機峭峻
姑射山裡
塔日寂然
無去無來
天覆地載

流入日東
大燈大現
古鏡生輝
覿面相呈
眼空諸方
眞嚴實踐
爲筆頭默
笑語春溫
默而貝之
衲子一闡
對
既息幻景
作爲此銘

疏之鳴者
閑沍和門
圓陀陀地
衝樓跨窟
技濟群有
竪抹横該
英姿逸群
老拳謹握
員荷大法
萬松嶺上
御談玄
呼喚不回
惠愧庸昧

大應圓通
且要鐵鍊
路絕人稀
盛大光明
東海舟航
粟棘金圖
纖塵不涂
大窒當軒
扶顛持危
誰敢窺攀
祥雲覆蔭
如如正體
德業長存

右泉南祥雲禪寺寂然塔銘並序五山之上瑞龍山
大平興國南禪禪寺住持僧錄司最岳元良和尚所
撰
寶曆三年癸酉冬十二月十一日謄寫以立於萬松
山東海禪寺慈蔭塔下　現住閑田義問併拜書

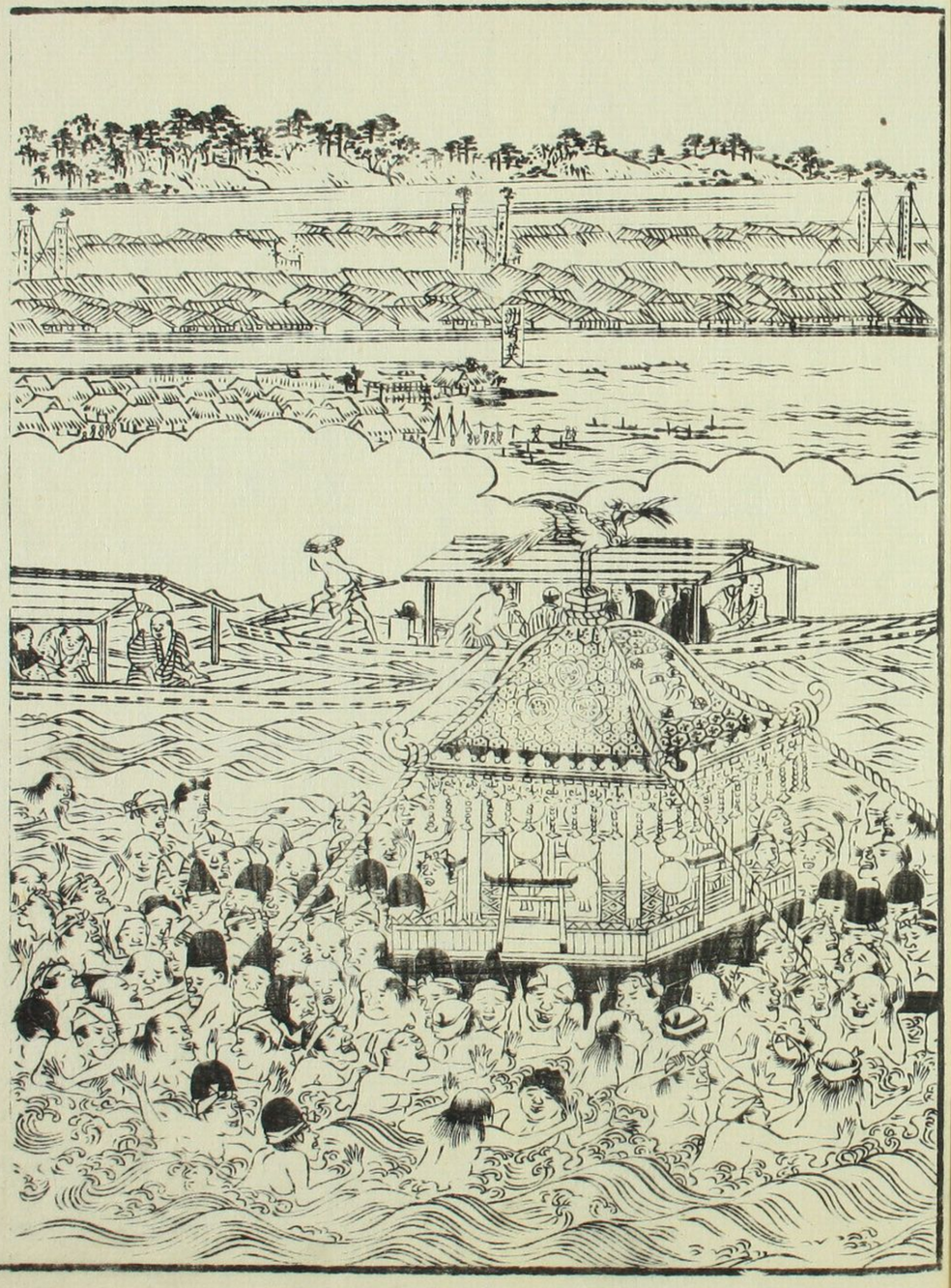
開山澤庵和尚影像一幅 正保二年乙酉師歳七十三畫工に命じ一圓相を作らしめ親ら一點を其中に加へ讃語を上に書して以て壽容と爲すかくのごときの二軸一は則當寺に置一は則泉南の南宗精舍に藏せり讃に云く

無名子告予曰邀得和尚之眞展見則一圓相也山
野點一點郎書曰肯日仰僑已燒六代圓相能抓蒼
海重錄九十九箇蛙蟆泥沙南泉曾劃一圓相歸宗
坐其中麻谷作女人拜趙壁元無戰類相如漫涉纂
家今此圓相包天地無外窮塵利無涯無邊世界如
麥似旦此裡衆生似粟如麻九流分列門戶六藝起
修離邑彼諍麟風此决龍蛇人物是太紋俊又亦不
些十方薩埋列星宿五百羅漢出雲霞我爲其主張
法王法身全體顯諸人見我廢時雖中開不待後進
彌勤不慕前來釋迦阿難摧實蓋迦葉抱袈裟宗彰
杜多却增聲價阿闍世王妄起嘆嗟不尊文殊師頻
呼衣浦童子課湯菓不窺雖孼詰急引金衆如來役
餝荼下方聲聞侍我嚴四果聖着御我車有意氣時
添意氣請看闇羅老斫頌以望我冥官等踊躍如得
爹我猶衆勞縛獄卒播拙械提憤鬼負鉄枷五逆衆
生抃野喜奈落罪人得時誇快然快然我遣裡今日
萬般已治藥病相瘥佳衲子只莫所取無好底法莫
所捨無嫌底法若住選順境家山路猶賒噫此法從
前絶等差求中正首落邊邪佛經祖傳錄方語點撿
將來空裡花
正保第二乙酉閏五月七日
前住大德見東海比丘基老齡七十三

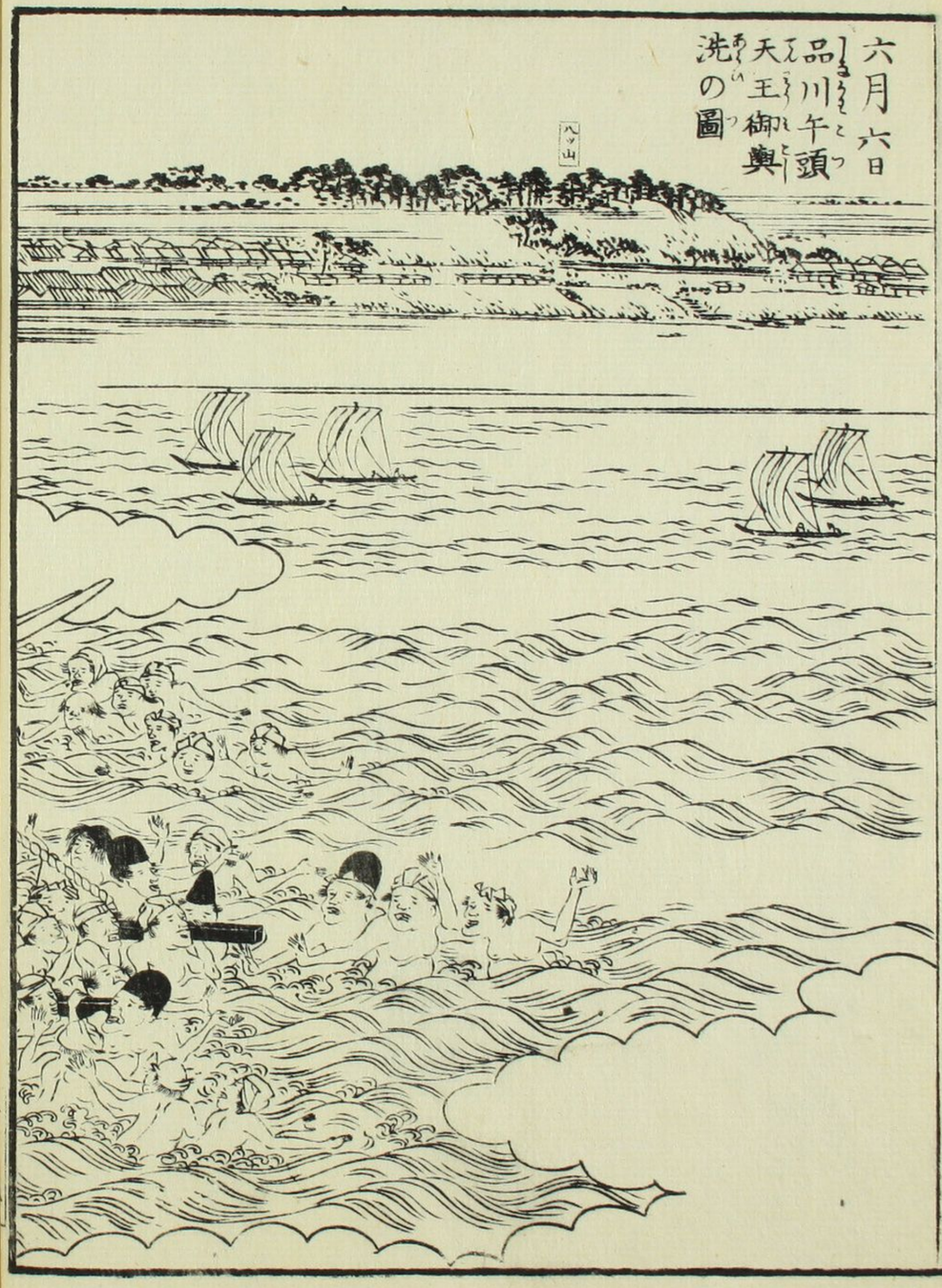
ある人この影を拜しく
澤庵法影を見る一天下東海不隱れなきぞ

縣居大人墓　塔中火林院の後山よあり當院過去帳ゟ玄珠院眞開義龍居士
とあり　明和六年己丑十月晦日歳七十三ゟて身まろまり　狂斧壹
巻ゟ詳
なり

南郭先生之墓　同一卵塔よあり一家の墳墓並び建り　先生姓ハ服部氏諱ハ
島七黨の一ゆゑく曾祖父默越中國高島ゟ徙る父の諱を元喬字子遷俗称小右衛門南郭ハ其号
安八山本氏なりて天和三年癸亥生る歳十四江戸ゟ来りく徂徠先生ゟ業ゟ受凌三年
柳澤矣ゟ仕へ後十八年致仕し宝暦九年己卯夏六月廿一日卒ひ壽七十七と
墓碑の銘文ハこゝゟ見ゟ其碑陰ゟ徙四位下侍従源頼順撰臣島元禎謹書とあり
鎌倉權五郎景政靈祠　同所春雨庵の後の山よあり　土岐家累世の祖廟ゆゑく
己巳より同九年壬申ゟ至る近江羽州上ノ山ゟ藩命ゟて来由知へ
頃の草藎春雨庵ゟ移さるゟ庵ハ
此寺ハ品川の勝區ゆゑく門前の緑水ゟ湛淺とゝく品川乃
流海口ゟ通ゟ屋後青山崔嵬とゝく祇植の栂松間ゟ聳ゆ
茂林脩竹風帆沙鳥の眺覧筆の及ふ所ゟあゝ殊更方
丈の林泉ゟ小堀遠州矣の差図ゆゑく庭作の規範とゝ都て
滿地青松丹楓枝葉ゟ交へ晩秋の奇觀錦繍ゟ晒うゆゑ常に
寂ゝ寥ゝとゝく實ゟ禪心ゟそゝるゟむるの一巨藍ゝゝ



六月六日
品川沖へ
天王御輿
洗の圖



牛頭天王社　東海寺柵門の外左の山ぢ上にあり　神明宮を勸請を北品川の産土神にして東海寺の鎮守とせり　宮造の宮社にして社領等あり　神主は小泉氏にて江戸名勝志に牛頭天王は永享中太田道真品川の城より勸請祭礼は例歳六月七日より修行を南品川の洲崎明神或は品川明神ともいふとあり　祭礼の日は両社の神輿南北の驛中當社とは由緒あれは　あり此橋を彩合の橋と号く同十九日まで品川驛中往還の中央より旅所の假家を　儲けて神輿を　うつしまつる

坂稲荷　同社の右の方にあり　詣人常に絶せず崇信す

柳本神詠之碑　同所本社の前石階の上左の崖より臨みてあり石面は明石の浦の神詠を彫付たり　神祇伯卜部兼雄卿の真筆なり

御殿山　同所北の山續なり　慶長元和の間此地より省耕の御殿あるを土人相傳へて此地を太田道真居住の旧趾なりとぞ　此所は海より臨める丘山にして數千歩の芝生なり　殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植させられし頃より春時爛熳として尤荘観なり　弥生の花盛りは雲とまがひ雪と乱れて

花香は遠く浦風は吹送るに磯菜摘海人の袂を襲ふ　山樽の前は酔を進むる春風は枝を鳴さゝを鶯の轉るも大平を奏るに似たり

寛永十七年九月十六日　大樹此地より遊猟あらせられし頃御殿ゆく澤庵和尚和哥一首を詠をへる旨命せしときゝ

夕くれを惜をまもむ木の間よりそさらの湯殿の月の光哉

澤庵

此哥は其日は止く空晴もしもふらは一首と　上意あり前の日雨の降りしかは

降るも今日の時雨を享保の頃檻を多く植しむ晩秋の紅葉し又一奇観なり

鑄鐘松　増上寺の鯨鐘を鑄る地あり其跡の印に植る松なり北の方畠の中に存せり

谷河岸　又御船雁木ともいへり　新宿の東の海岸なり相傳へ寛永の頃大樹東海寺へ至らせられし頃汐干の時澤庵和尚汐後を見送りまゐり此所迄来りしとなり故に此唱あるとぞ

かんま山
有花

磯の清水

磯の清水　海殿山の麓清水横町と云よあり往古ハ此辺まで磯辺なりしとなり此井清泉ゆゝく旱魃ある事なし或人云く昔砂利を堀とりし跡なりとそ

品川驛　江府の喉口ゆゝく東海道五十三驛の首なり日本橋より二里南北と分つ東海寺の南の傍ゝく貴船の社の側を流る川を堺とし或人云く是則品川と称する所の水流なりと云く旅舎数百戸軒端を連ね常ゝ賑ゝく往来の旅客絡繹として絶を

梅花無盡藏曰　品川　注云隔五十町有江戸城多

法華宗云云　問宗旨答法華僧

双塔五層兼一層　子細看来満口氷

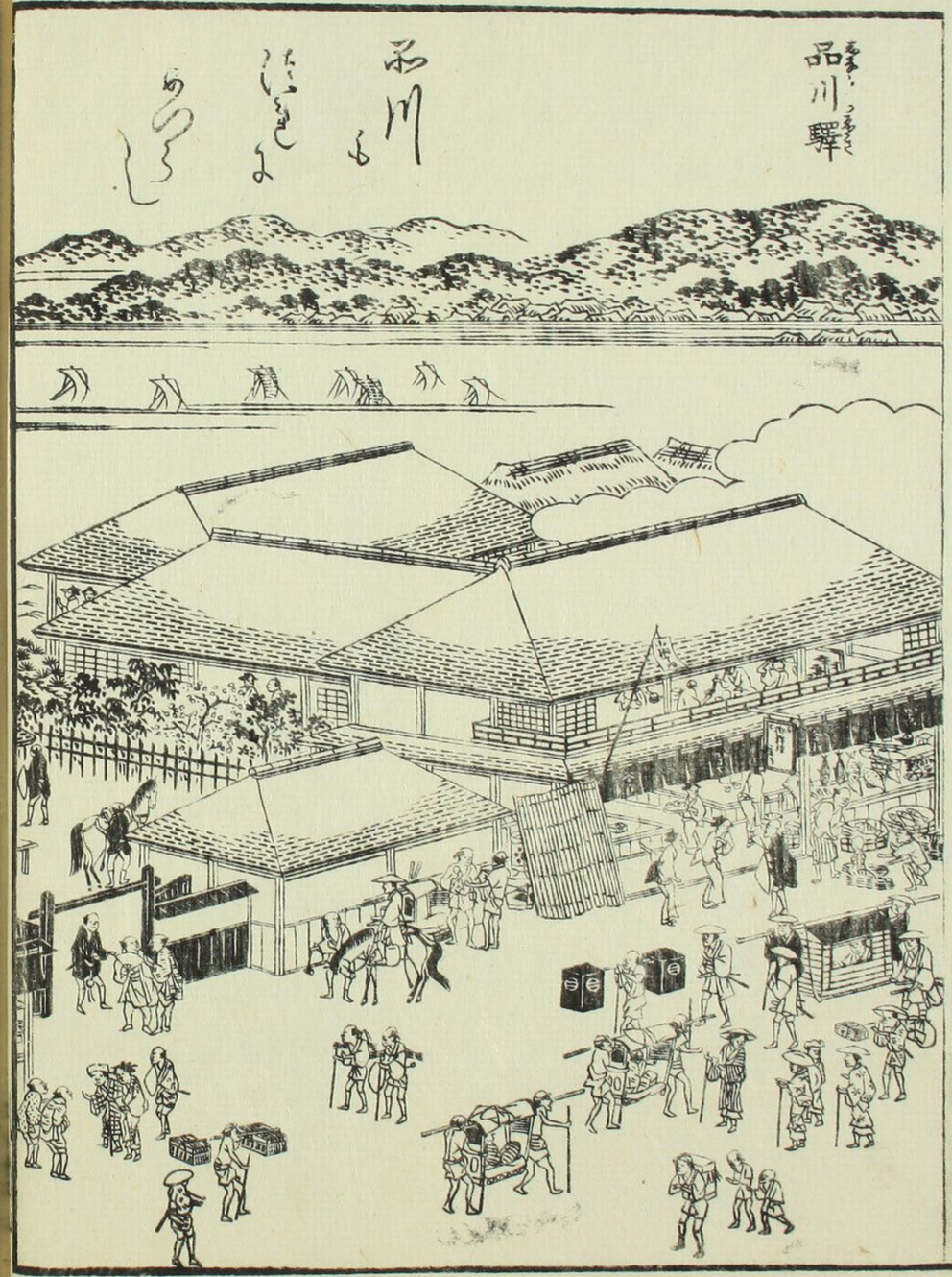
蓮紅二十八差別　同書曰　長亨丁未小春二十又二日扣品河之岐軒途中之濱而見六七小舟搬品河之土蓋爲塗江戸之城壁也數屑之餘殃及舟楫嘆无情作是詩

潮氣呑濱萬頃連　触蛮無地不紛然

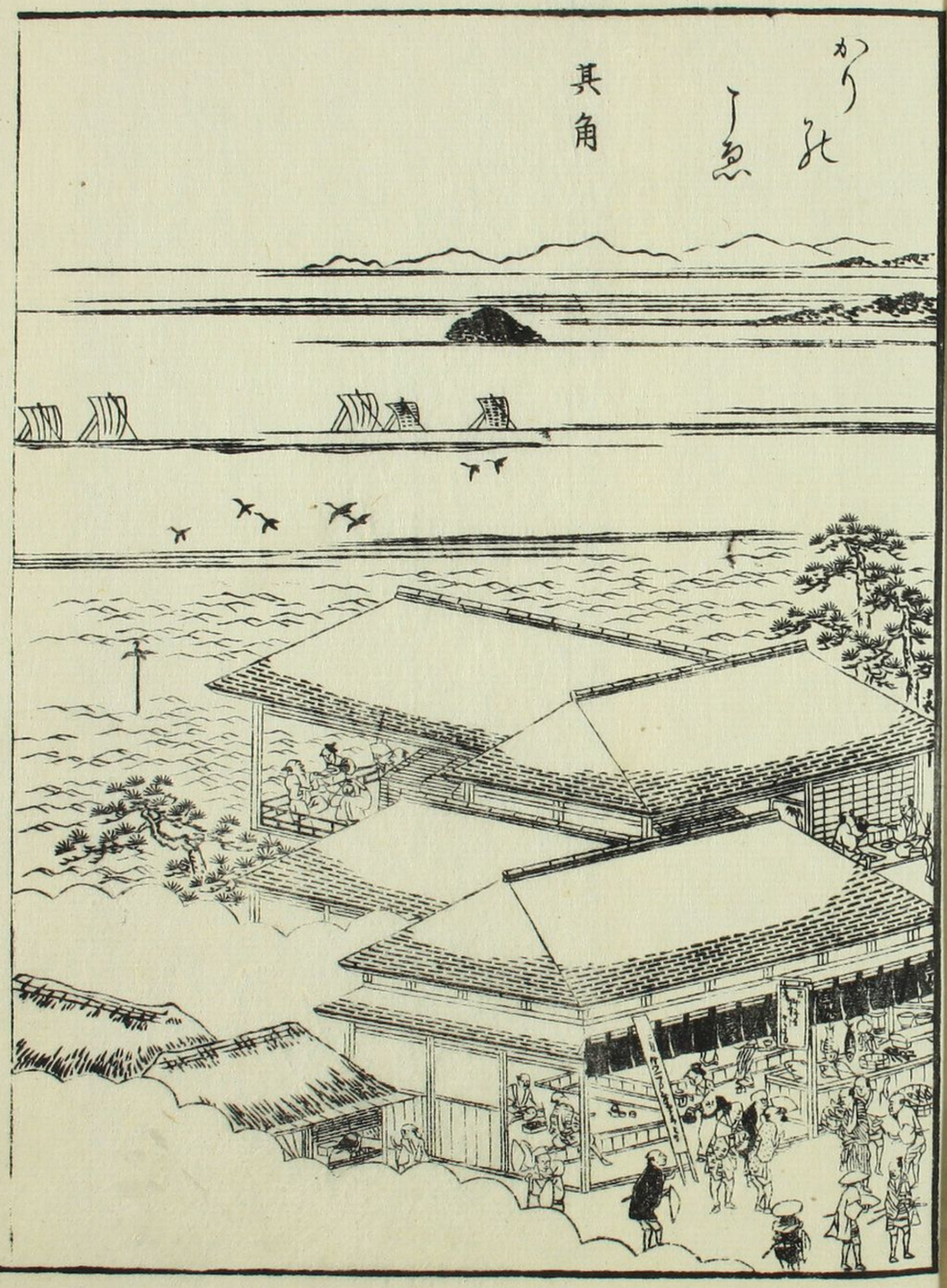
重城日ゝ勤塗壁　馬上吟看搬土舩

〽敬僧都記　ゝゝの品川とゝゝ

品川驛



其角



旅宿のゆめそ吾妻の奥まても猶しくありぬれハ秋もたゝ浪を
見ひわたらぬ磯に鷹ぬの茶の屋をむすひ見知らぬ磐に浪の
枕をうちきて何事の夢の中にか夢をみてたゝよひきくる

こゝは津の品川しらき葉このかし　心敬僧都

東土産

品川といふ浦にしはらくありて和泉堺より来りし或六七年
住りしとうや五六日休息しくある夕浦に海の辺にありきて海りて

夕なきにうきねの入江に舟このまゝみ　宗長

江春入舊年といふ事を思ひ出て浮る夕の影ゆくと見え渡る
さまかな安房上總下總目の前のところ／＼なるへし　下略
按に宗長ハ心敬と同時の人なり心敬ハ和泉堺の人ゆへしくこゝに来たりし
事ハ先にしるせる紀行に詳なりされハ東土産に和泉堺より来りしと
あるも此心敬僧都の事をいふなるへし

澤庵和尚京都記行　過品川

橋邊品川倚旅亭　智音携酒好叮嚀
又相別去問前路　吾此生涯水上萍

世をいとふ心ハ残りの身さけひかすにはりやあらま　澤庵

品川もつまにめつらし春の影　其角

按に品川の地名の發る事近きにあらす東鑑義久記等の書に品川太郎同次郎同三郎同四郎同六郎太郎同小三郎實貞同右馬允同四郎太郎拆衣あり又鎌倉大草紙にも品川左京亮同下総守なとの名を載らるて何れも此国の住人なり小田原の北条家所領役帳に葛西様御領とありて中にも品川南北とあり其頃も二つに分れてありしと覚えてあり　南向亭云く品川旧下無川といひし此川海に近く下流直に海に入の故に志かなつくると云云かく云へるも今は南北の宿の中間中の橋の下を流れて海に入る所の河流をいふ是則品河なるへし　又事跡合考に往古品川高縄よりつゝきて二疋並ひく通るやあとハさる程の狭き瀬路なりしを天正十八年の後東邦乗馬台鏡ありて八山の下より本芝のあたり迄道中三十五丈を切開かしむかしてありし附くと云といへることの中に武蔵國大渡莊にて往古此奈草を染るをあらそ　詞花集　又海の増補の江戸砂子の中に此地にて製する草なりと伊勢家の説を考ふ中も此訓閲集にいつしき由記せり以て證としるしと　偽書考るゝに品草ハ齒朶草の誤なるへしと源平盛衰記に此奈草をいつき藍草に徴よ齒朶草を付くりるとあるのにても志るへしとのゝ文志くと云くるにて優美のなるへき名に志るにも志るへしと云くたるハ通音なり

瑠璃山光巌寺　北馬場にあり禪宗にして東海寺中清德寺に属せり本尊薬師如来ハ佛工春日の作なり當寺ハ太田持資の建立にしてその影像もあり

恭敬山長德寺　四丁目にあり時宗にして相州藤澤の清浄光寺に属す一遍上人第二代真教房の草創なりと　佗阿弥陀 本尊阿弥陀如来ハ定朝の作なり 佛とそ　或人云く當寺の創立ハ寛文四年甲辰にして始東海寺の地にありしを寛永十四年丁丑東海寺建立の時より今の地へ移ると云

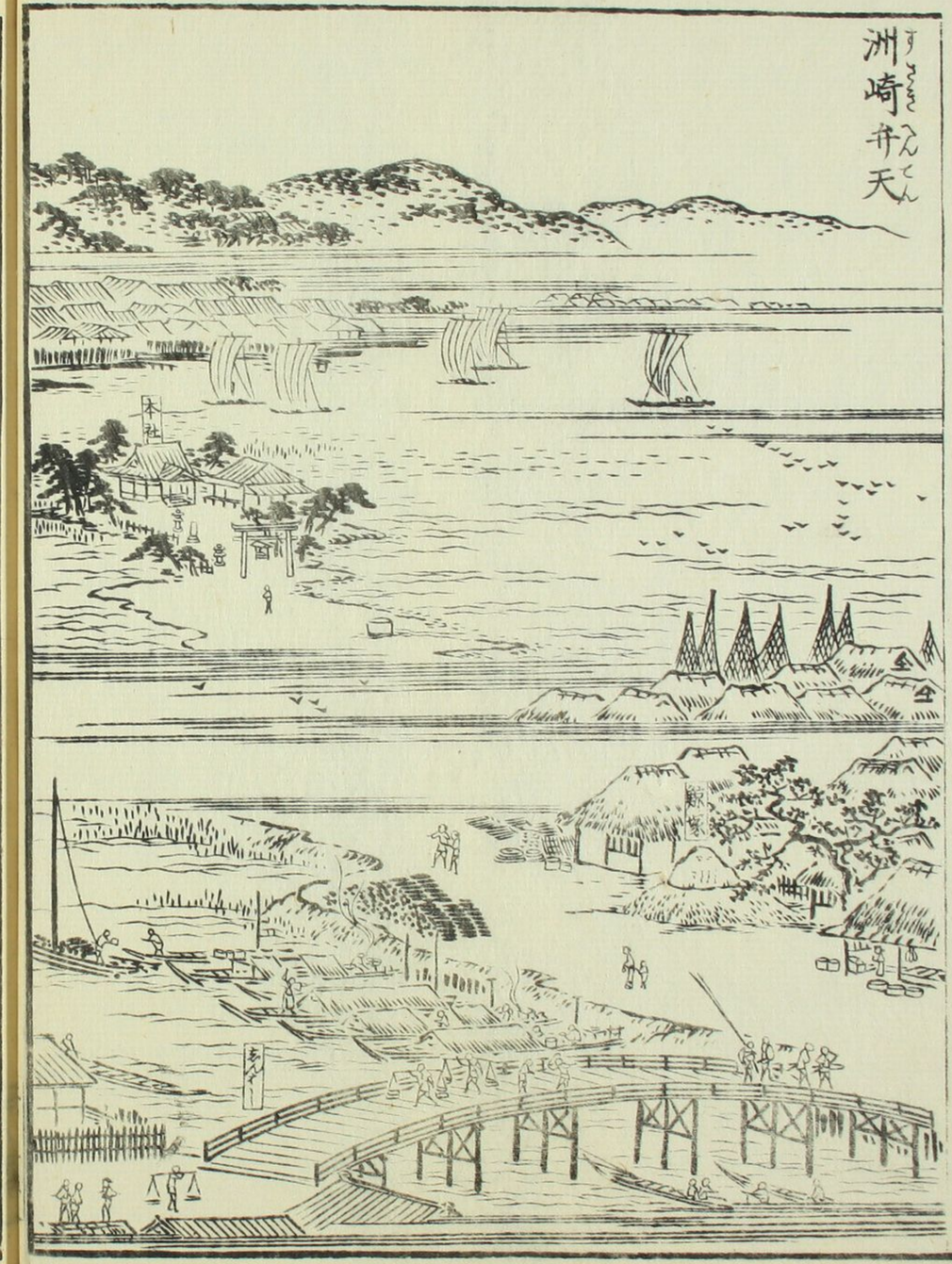
中の橋　品川驛舎の中間にあり　南北とうつり此橋をさかひて品川故に号とも此橋下を

品川
汐干

永平十三年六月
浅草良院市撰
謎合もふ

海のそこ
十里ふかさくらんぼ
蛤

洲崎弁天



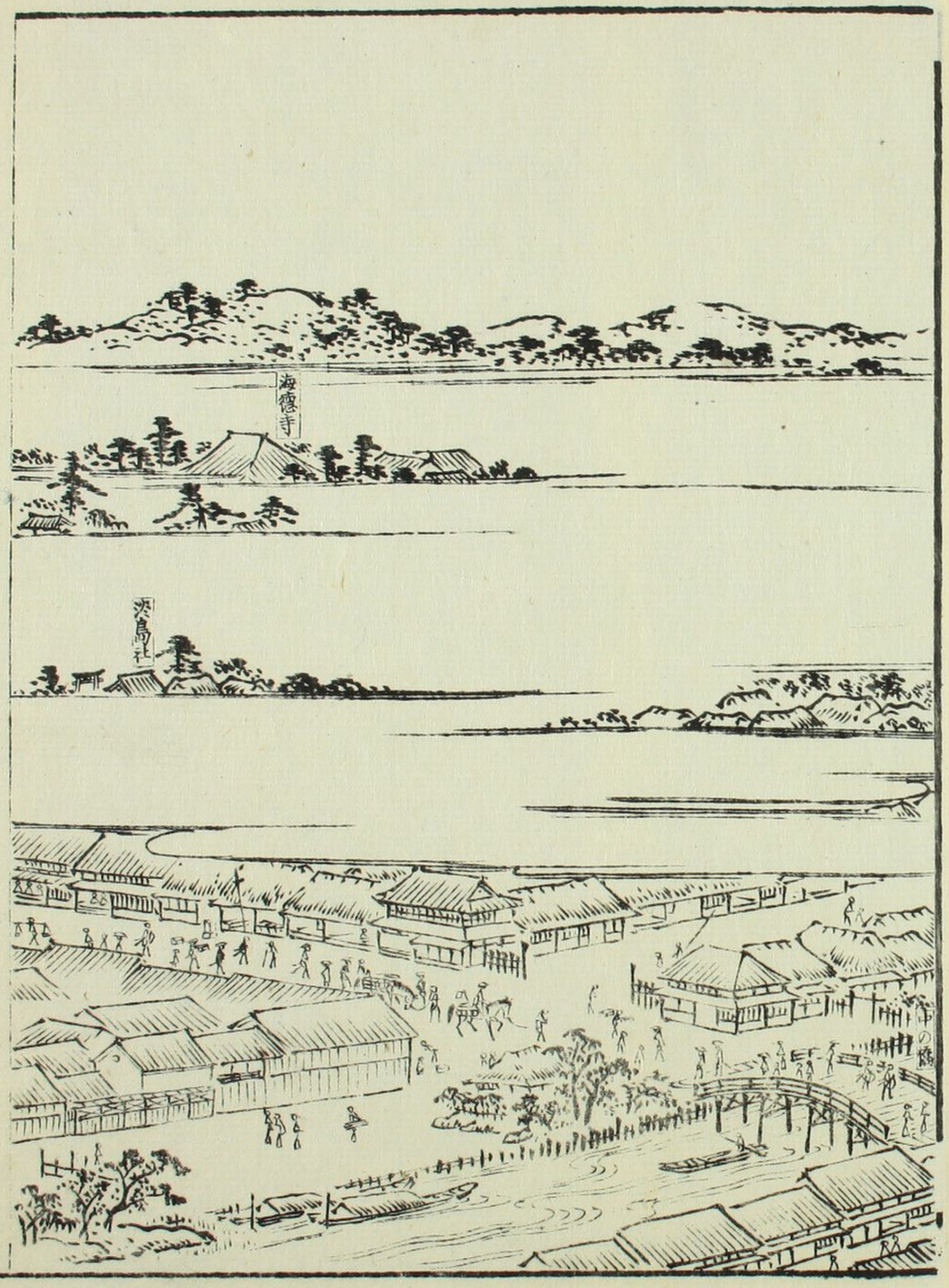
東流するを則品川なる毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭天王弁神輿此橋上を経達まゐる依て又里俗呼て橋も唱へり

貴船明神社　駅舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右ゝ

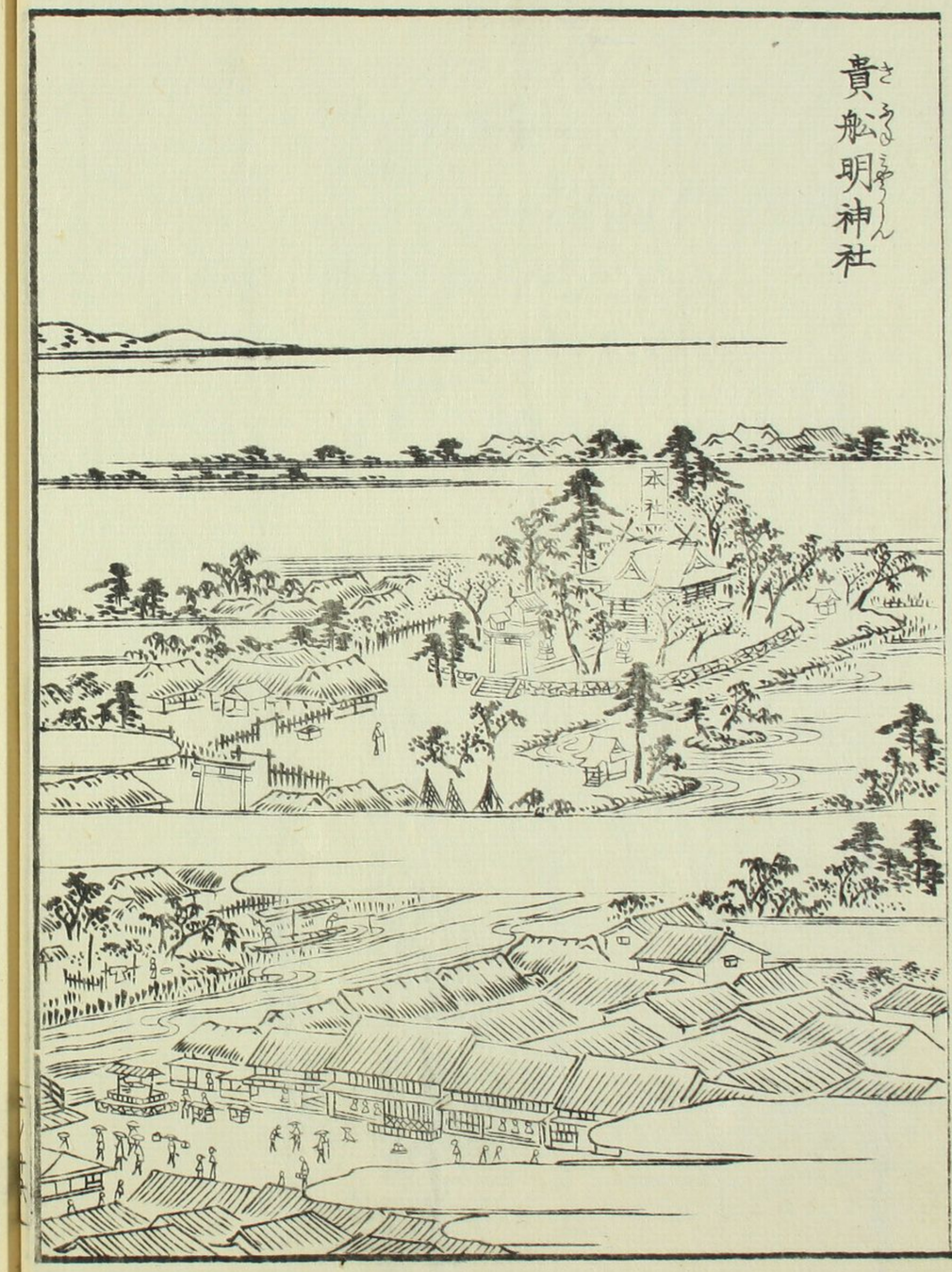
あり相殿ハ神明と牛頭天王を合祭も南品川の産土神なり

毎歳六月七日ハ天王の祭礼中ハ其前日神輿を海中ハ舁入まゐり後駅中ハ假屋を假けかくふ神幸ありて貴布祢の祭例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり神主鈴木氏奉祀を

寄木明神社　南品川の洲崎にあり相伝ふ神代の昔弟橘媛日本武尊と共ハ王船ハ乗しハ此海上を渡るまゐる頃霞ゝたりしその船村所ゝの浦ハ漂泊しハ此地ハも流ゝよりくりくりハ土人一社ハ奉斎く弟橘媛の霊を祭るまゐく寄木明神と号なる又寄来ハ作遥の後船魂西宮大神を合殿とも往古源義家朝臣奥州征伐の為東國發向の時此地ハ馬を止め漁人ハ當社の来由を



貴船明神社



寄木明神社

向ひ給ふ漁人先の神傳を荅へまつりしハ義家朝臣自親奉幣あるべく軍の勝利あらん事を祈てのみ奥羽の逆乱平治の後歸路の日再び當社へ詣てられ兜を収めのみ故よ此地を兜島と号くるとを

社古ハ今の伊勢山の麓より南北宿の辺ハ一面の洲おそ漁家のをる川の流如くく今のくく南北とぬくの名あり又橋幾の山衣の幼の流よりくるかホ名付とも件の塊の秘を神幹とを一説ゆを山の崎より細く海中へ出る洲崎の形幼ふ似くるゆ共よくくも一社ハ洲の崎よりくく洲の崎の神と号けしくら後よ至つくくハ洲の明神と唱へ又ハ諏方明神とのひ誤る此社ハ今引くく弥国寺の鎮守とのまらて當社の外よ寄末の社と称するとの品川河崎等の間よ往くこれあれ共来由ハ詳ならぬ又山内上杉ホの家くの制札数箇の條目を注せり今も猶此地何某う家よ傳へくり

経王山本光寺　南番場よあり日蓮の宗流やくく京師妙満寺派の

觸頭江戸三箇寺の一室くり永徳二年壬戌二位権僧都日什上人草創の佛刹やくく則上人を以くく開山祖と称を中興ハ日鏡上人なり本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ日蓮大士の作なりとぬを

母神の像ハ作者詳ならす又境内鬼子

本光寺
大竜寺
天竜寺
海竜寺

開山日什上人墓　當寺累代住持の卵塔の内に並び建り日什上人ハ正和三年甲寅三月十七日に生る旧天台宗の徒なりしく叡岳の慈遍僧正の法弟たりしも奥州會津羽黒山東光寺に入其徳十方に徧し玄妙法印との後思惟の志趣ありて末法相應の宗ハ蓮師の弘法にありとて永徳元年辛酉舊宗を棄て一流を開き名を日什と改む同年の夏關東を出く花洛に至る其徳行叡聞に達るを以て鳳闕に朝し昇殿を鷹司中将の傳奏により謹て宗門の利益を奏せ帝叡感ありて二条摂政源義満公をしく宝祚延長の御祈精誠を抽づべき旨を命せし洛内弘宗の勅免を給ふ其年關東に寺境を賜ふ同二年當國に至り此塚に本光寺を草建せ同三年癸亥京師妙満寺を創し衆人を導き大に法義を弘通せり又京師在住年月を経て明徳三年壬申再び關東に赴き奥州會津の妙法寺に入同年二月廿八日化寂あり歳七十九と云々以上法華霊場記に出る

當寺往古ハ真言の古刹なりけるが日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ今の宗風に轉して法華道場とし則上人創建の體用六箇寺之一員（六箇寺とハ所謂奥州會津の妙法寺遠州見付の玄妙寺同國吉美の妙立寺相州鎌倉の本興寺京師の妙満寺及び當寺を云）なりしく當寺を用の長と稱せる是なり　慶安の頃大樹此地に遊獵の頃當寺に憩ハせたまひ松の寺と上意ありしとなり境内青く古松多かりし故にかく名つけたまひしとなり

熊野山常行三昧寺　同所にあり天台宗にして東叡山に属せり相傳ふ仁明天皇の嘉祥元年戊辰慈覚大師常行三昧を修行しましし旧跡にして則當寺の開祖と稱せり本尊阿弥陀如来ハ同大師の彫造なりといへり

鳳凰山天妙國寺　常行寺の南海道の右にあり日蓮大士の弘法にしく京師妙満寺の觸頭江戸三箇寺の随一なり

本堂日蓮大士像　天目上人授与の霊佛なりとく每歳十月十三日諸人に拝せしむ

多寶塔　縁記に日教造営せしとあり　五層塔　文安年間建立せしと云

諏訪明神祠　當寺の護法神なり此祠ハ先に記す洲の崎明神と同神なりとく寄木明神と称せしを後世誤て諏訪明神と唱へ又諏訪明神と覚ゆ昔ハ社領の地にて海の面へうけく霊験掲焉なりとぞ

二王門　左右に金剛力士の像を置此二王ハ始め山王宮の二王なりしとあり山王宮東叡山へ遷座なしまひし頃二王ハ當寺へ附しあたふと云十八丁四方ありしと云俗傳へく來由を失ふ

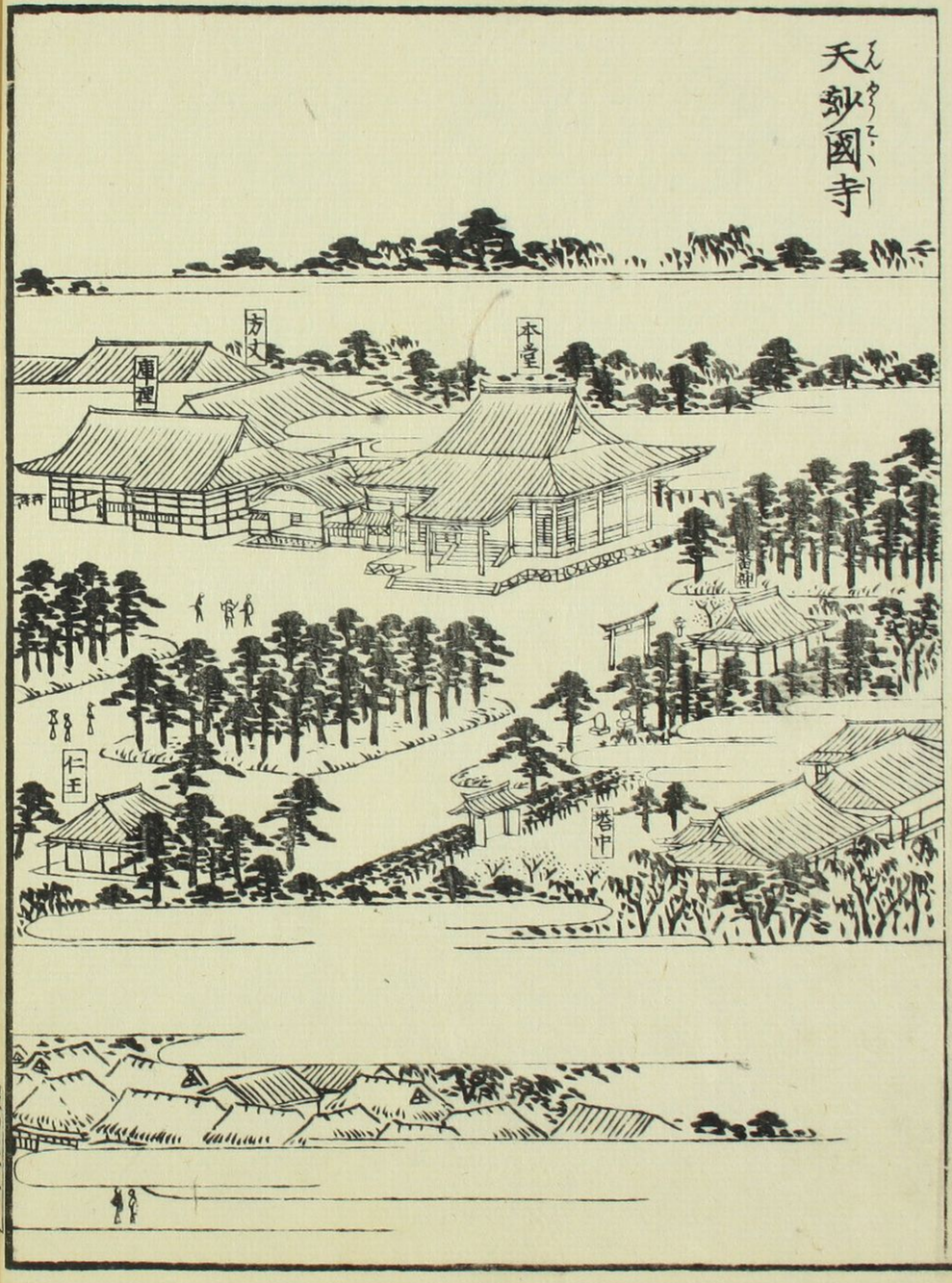
總門　東海道名所記に云く紅葉山妙國寺此寺の門ハ駿河大納言殿の屋敷の御成門を引て建らるとなり總門とも云ふ法華寺あり

鯨鐘　旧鐘ハ文安中鋳冶せしものなり寛永十八年鋳改しとぞ旧鐘の銘文に再造の人の名并に年号等を鐫たり

社代鐘銘曰

倩以聖衆之影向究如華散風結縁之得脱亦似

天王寺



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄
一口鐘祈三身之果善根廣無限功德遍有幾
大日本國武州荏原郡品川鄉妙國寺住持法印日
歟
文安三年丙寅季冬中旬第三天
大檀那汐弥道胤
鑄師和泉權守貞吉

寛永十八年辛巳八月下旬
洛陽妙満寺三十三祖日延再興之
當山十三代目
施主當寺一結諸檀那
江戸住冶工
長谷川豊前守藤原重次

相傳ふ當寺八弘安八年乙酉天目上人一貫し中老僧の草創あるし佛
場ゆゑく至徳二年乙丑寺主日歟師東國の乱を避んう為且
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京よ赴くれし頃或夜乃
夢よ洛中いつくとなくれと路傍柳の大樹ホ鳳凰の栖るそこゝる
覚く後自思らく此瑞や正よ我道場を開くへき前兆るくんと
直よ夜の明るを待く急き洛中を廻り西洞院三条の辺ホ至るに
黒しく大樹の柳の茂るあり則夢ホ應なりとく其地を開き
一宇を営ミ鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士よりも天目上人へ附属
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む 其旧跡八花洛西洞院
三条の南よりも今凡七
名井の中柳の水と
いふ八則其旧跡あり 嘉慶元年丁
詔あり師をくく此災を除らむ依奇驗の料として康應元年南北四丁
東西二丁ホ地を賜ふ然といへとも其寺院ハ応徳の大乱よ廢せる
故よ寺を妙満寺よ摂ミ 彼大曼陀羅并よ蓮師親筆の 一部
其後旧里を
慕ひ又武州よ至りも天目上人の靈蹟を興起し舊買よ復さんとも
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鐘銘道胤 品川領主鈴木光純
等歳師の誦演よ信伏しく七堂建立の財をとなる歳師ホ力を
をあらせ文安年間彼旧地を象ミ則鳳凰山妙國寺と号け
當寺を開創を 地境寄附あり 文安永享の年号前後
先立る凡十有餘 永享六年既よ妙國寺へ
朝不審とも 上杉憲泰の證状ありしより上杉憲
泰公の執ミ前の將軍義教公の

先境の由緒を挙此地の四至を定められ其外数通の判形の書あるを後天正十八年當國御打入の時大神君當寺へ入らせられ止宿あそばされ後寺領を賜はるに朱章を添らる江戸寺社領を附しめらるゝ始なりとぞ又寛永十一年伊奈半左衛門を奉行として諸堂を営建おさしめあひ院主日延を以て中興開山たるべき旨命せられ此時より紫衣を免さるゝ以て永規とす

上杉憲秦

宛行武州荏原郡南品川之端芝原地之事

右依佛地之称望永代八郎三郎に所補任之状如件

東南八大道堺西八田堺北荒居道ヲ陽堀堺

以之竹木可調植者也仍宛状如件

永享六年甲戌五月十三日

妙國寺別當浄坊

憲秦在判

同

寄進武州荏原郡南品川妙國寺地之事

右彼地此間七八字不分明南着四波堀堺西着大々道堺北着塔中堺彼内畠同勢阿弥作畠一段并四郎三郎寄進地之寺家之門在之此外常金有作畠一段同東着海堺南着観音堂垣堺西着大々道堺北着大堀堺為金澤智光院勧請菩提并為南小路雲光院菩提永代彼寺令寄進處之然間至子孫々於此寄進不者不可有異儀仍寄附之状如件

永享十年戊午七月十八日

憲秦在判

足利持氏将軍

武藏國荏原郡南品川妙國寺之内相預申状如件

享徳二年五月八日

從四位下在判

當寺別當

制札 妙國寺

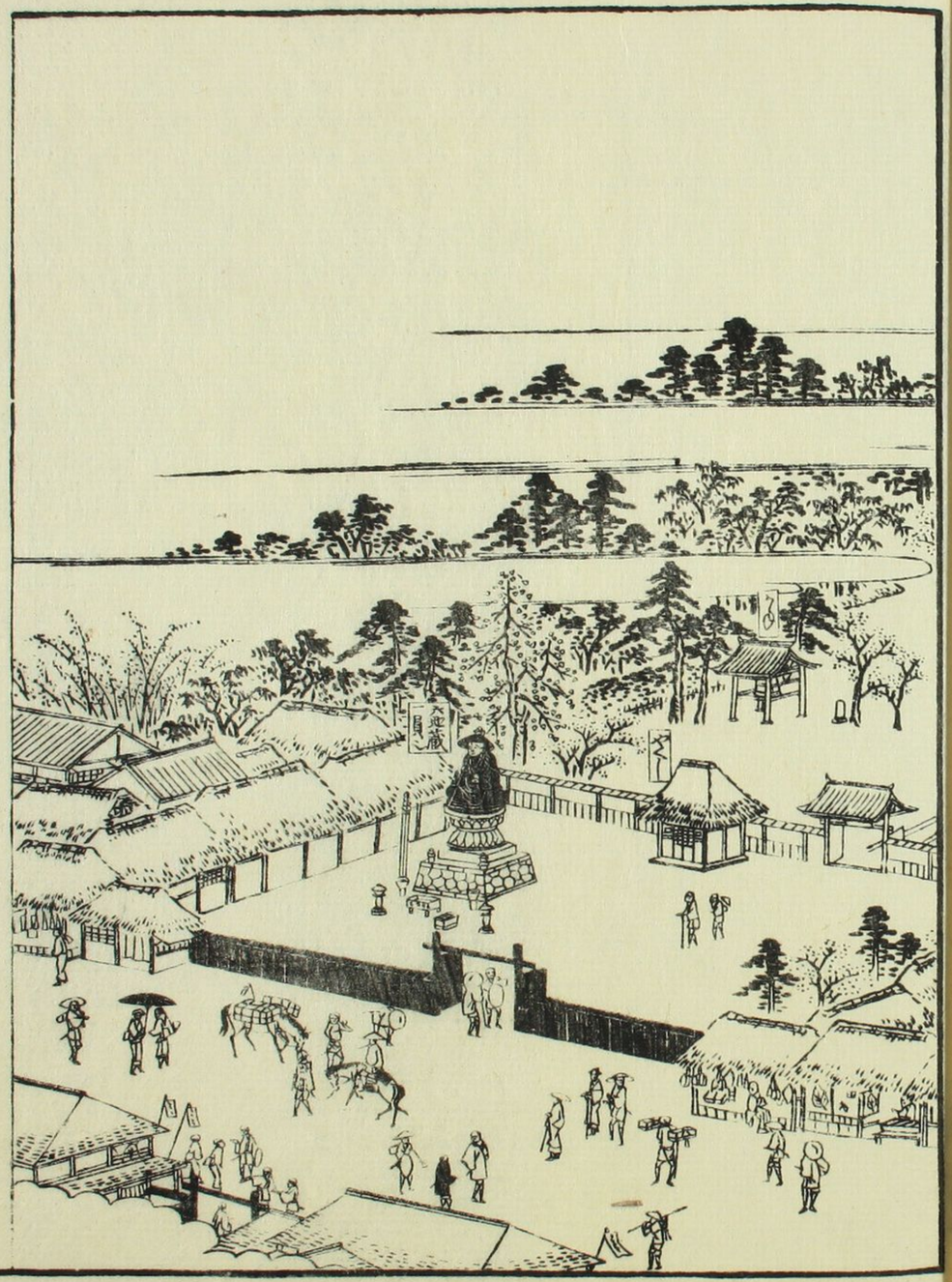
右於為寺手軍勢甲乙人等濫妨狼藉之事

停止之若至于違犯輩者可處罪科状如件

大永四年四月十二日

氏綱在判

品川寺（せんし）



其餘氏康氏照等の燈牌おゝひ前上総介定景中務少輔持助開基[illegible]
禪西左第つ植草新次郎等の判形の書ある太田資正大草加賀入道山中
修理亮伊東右馬允石巻勘解由左衛門尉南条駿河入道等の連判状遠山
惣景判形の書ホ数通あり毎年六月廿八日虫拂の頃緒人〻參詣
三寶院ょ屬を開山ハ權大僧都弘圓法印と号せり
本堂　本尊聖觀世音菩薩　海中ょり出現あらせ給ふ國淨檀金の靈像
世ょ水月觀音と称へ奉る此靈像の利益感応のまゝなるハあさらも
月の水ょ影をやとすうことく給ふとぞ
藥師堂　中門の左にあり本尊藥師瑠璃光如來
將の像を安置せり弘法大師作なり
墓座を儀く室永五年戊子沙門正元坊
建立せる所やゝく江戸六地蔵の一數なり
本尊緣起云く　往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川
氏何某此人〻ょり附屬せられ同左京亮迎其家ょ住へくする信
せる左京亮の名ハ淺倉大草紙ょり見えたり　遠の後應永ょ至り鎌倉の公方足利左兵衛
權督持氏と上杉禪秀合戰ょ及ひ一頃品川の一族悉く討死す
其時かゝるハ深く草堂の内ょ秘め置しを重後太田左金吾道灌
品川の地を領せし頃深く此本尊を崇信し一宇を建立しく
大圓寺と号け夫ょり後又徳倉管領上杉の両家不和ゆへ
関東大ゐ乱る依く諸の寺社破滅せしょ少かゝり永禄九年十二
小田原の北条氏政今川家へ加勢ありく信玄と戦ふ時信玄武
蔵の北の方ょり不意ょ押寄せ江戸城ひゝ品川を追補し民
家を焼拂ふ此時甲州方の中ょ竹森蔭村とのへる二人の侍品
川観音の御堂を焼く本尊を奪ひ甲州へ歸るゐ其者大ゐ
狂乱し本尊元の地へ迁へき旨威靈の示ありしと武蔵ハ
獣地なれハ其便を的を一人の乞食の聖を頼ゝ元の地ょ還
座なりとゐへとも御堂も焼亡しかりしかれハ其礎石の
地を求めく形ばかりの草堂を営ゝ造りく安置なりしを
遥ょ年月開ゝく後兼應元年壬辰法印弘圓堂宇を建立
しを海照山品川寺普門院と号け今来ょ降普門示現の

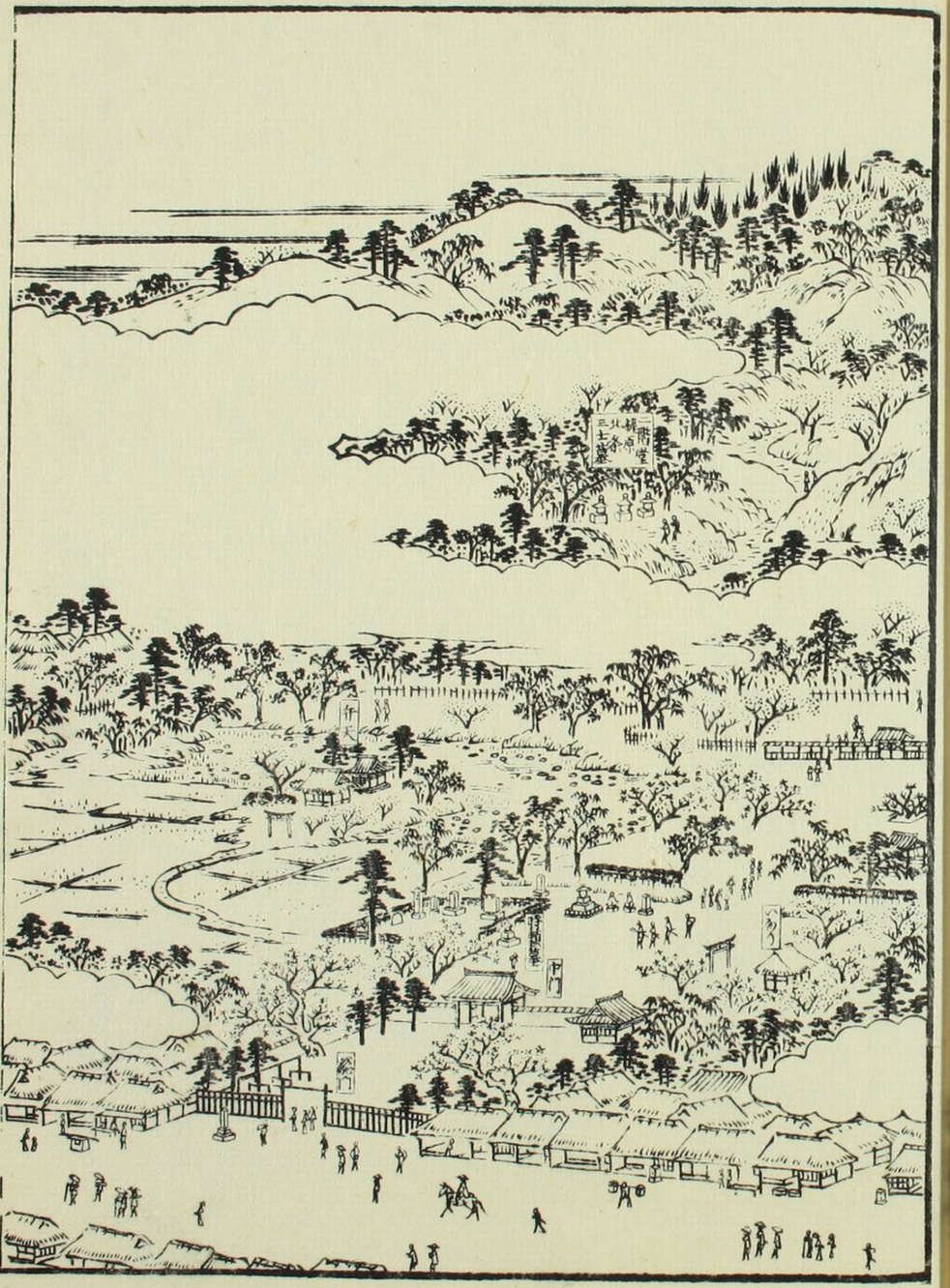
千躰荒神堂

威力著く恵日の光煩悩の闇霧を破る感應の水月八長夜を照し給ふ

按ずるに妙國寺什宝に存する所の永享十一年上杉憲泰寺境寄附の證文ゐ南ハ觀音堂坂を界とあるを則當寺の觀音のことを云なるべし

千體荒神堂　同所半町ばかり南同し海道の右の方海雲寺内にある禅林ふもとある荒神の靈像ハ毘首羯磨天の真作ゆゑ昔九州肥後國天草荒神の原といふよりこの方ありしを邪宗門一揆の頃邪徒等社を破却せし故ありて當寺へ勧請せしといへども靈驗ありとて衆人常ゐ来詣す毎月廿八日を以て縁日とし祭礼ハ三月十一月共ゐ廿八日なり

補陀山海晏寺　同所一町ばかり南海道の右にあり曹洞派の禅宗ゐて三田の功運寺より属せ北條相模守平時頼朝臣の開基とて大覺禅師を開山と称し古山和尚を第二世とし天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺を再興し中興せ



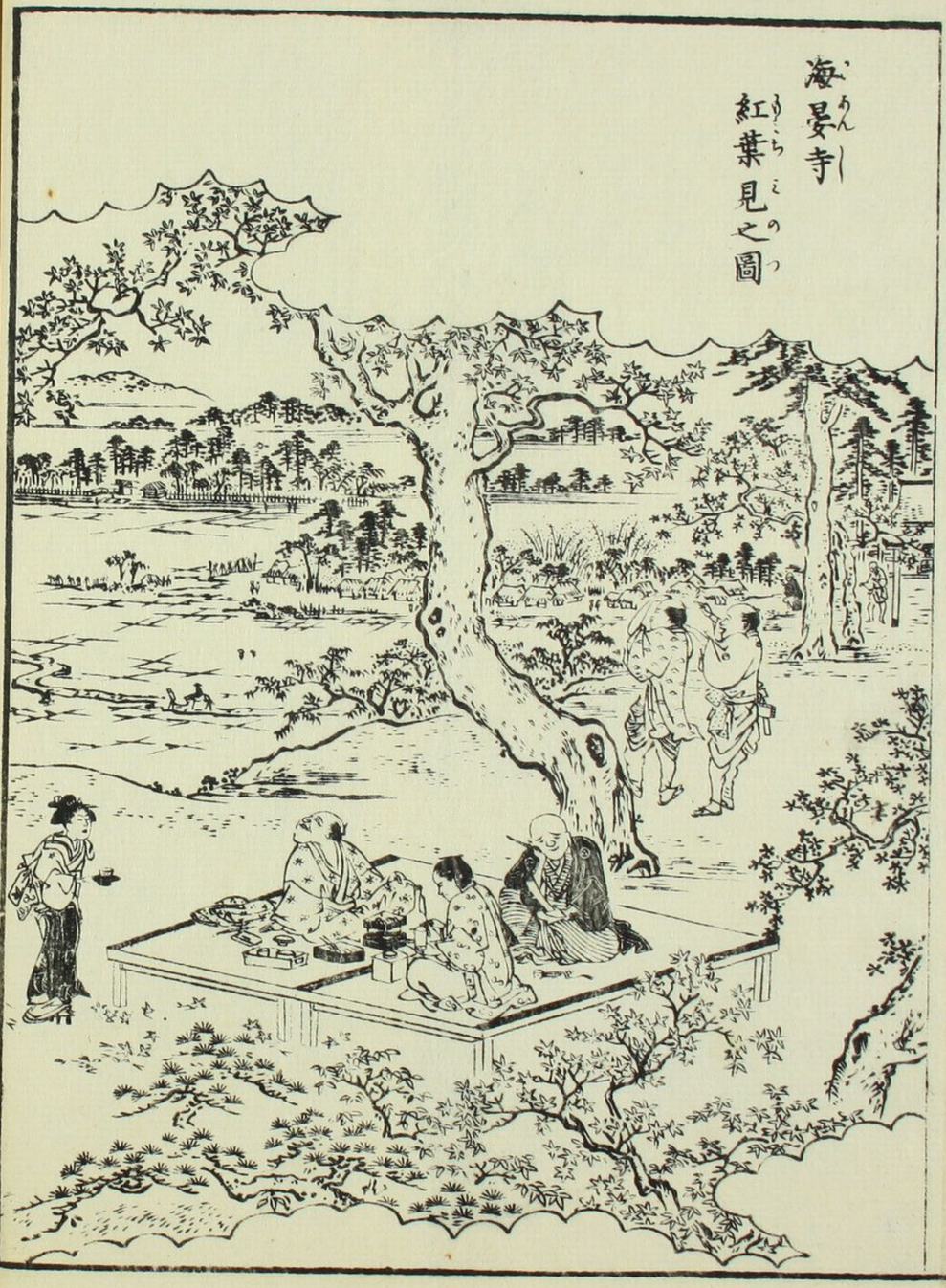
海晏寺

題海晏寺紅樹

古刹楓林簇晩霞
深深庭院駐年華
那知秋後風霜色
却勝江南二月花

春臺

海晏寺紅葉見之圖



なる慶長和尚ハ松平図書頭宗康元の子なり天正年中入國の頃三州より召ると當寺を賜ふ旧を改られし

本堂本尊鮫頭観世音

鐘樓

本堂の前左の方にあり元禄十五年當寺由緒の災ヲ罹と舊鐘焼損も依て宝永七年改鑄し往古の銘を其侭よ則せり

南贍部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷
補陀山海曼禪寺爰十方施主屢捨祥財衆銅金專
命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落々洪
音斯晒見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈
願此鐘声超法界銭囲幽暗悲皆開間塵清淨證圓
通一切衆生成正覺是以虎溪老拙厥銘曰

鳴氏炉鞴四海九振　當陽掛起法音千鈞
声透碧落響徹刹塵　暮破睡夢忽性真
弘済群類普結良臣　法輪常轉佛日尚新
寶徳三辛未仲夏下澣　鑄師定吉

且越道琳現住

再銘

寶永七中夏上旬

存紹代

雲版一口

高一尺四寸八分
横一尺二寸三分　面

蓮花大廿
二寸四分

背

広永廿二〇〇〇記文工数〇〇〇

北條相模守時頼朝臣石塔

廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり本堂の前右の方にあり碑面ハ最明寺殿
廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり本堂の前右の方にあり碑面ハ最明寺殿
按ニ東鑑ニ弘長三年十一月二十
按ニ東鑑ニ弘長三年十一月二十
平朝臣時頼三十七最明寺の北亭ニて卒去ありて今鎌倉山内ニある所ハ
平朝臣時頼三十七最明寺の北亭ニて卒去ありて今鎌倉山内ニある所ハ
禪興寺となりし寺院ハ往古最明寺の旧地なる由鎌倉志ニもそうり當寺ニ
禪興寺となりし寺院ハ往古最明寺の旧地なる由鎌倉志ニもそうり當寺ニ
ある所の石塔ハ其模しなるん石碑の形状世のものと

二階堂出羽守石塔

本堂の後の山服ニあり往古より當寺の門前ハ鎌倉海道やぐら地なりと依く頼朝卿より
北条家迄ハ執権の中より開門の守護として大森の辺ニ屋形を建く官人を
置れしなれバ故ニ此出羽守も其頃品川の守護とし此地ニありしなれバ
當寺ニ香花院とて二階堂出羽守三人をあり一ハ左衛門尉正五位下出羽守行義入道道空

と号し文永五年癸丑四月二十五日歳六十六にて卒ス二八同從五位上出羽守
行藤氏安三年八月出家して道暁と号し乾元元年八月二十七日辛歳五十
七三八同從五位下出羽守入道蘊吉野戒沈の大将なり父上二階堂出羽守
三人ありて何もこの是なり惣門の額は海曼寺と書せしを行氏の筆なりと
寺僧相傳へ二階堂出羽守行氏ハ後五位下隠岐
守と仕へ弘長三年十一月出家して法名道智と号し文永八年六月七日五十
一歳にて人なり

梶原平三景時石塔　同所より建つ　文永元年より特宗
甲乙人等と一戦して竟に景時誅死せしなり
東鑑に委しく見えたり是もこの一人なり
北条左京権大夫平時宗石塔　執権宝光寺と号す三十四歳鎌倉を
宝光寺殿道果大禅定門と号す　将軍執権次第に弘安七年甲申正五位下相摸守平時宗
三月廿日所労四月四日出家法名道果同日酉時死三十四云

楓樹江戸丹楓の名勝ゆゑく一奇観なり晩秋の頃は満庭錦
繍を晒すがごとく海越の山くは上洛せんとせし途中駿河國清見ヶ關の
映ゑくも又紅を曜うめく書院僧房も其色よかゝやきく此地遊賞
の人酔色なくくはなし
千貫牡丹　佛殿の前よあり四方八間に栄えそう　江戸別
又は幡影向の牡丹ともに号くるとぞ　菲梅紅
千貫松　頼朝松とも又は龍燈松とも号くるとぞ

今は枯れて
龍淵　庭前の池をいふ　両溪橋　手洗池より架せし橋下の池を蛇の
淵とも蛇の淵ともいふ　建久の昔近里の女身を投へ
身より憂を二世古山和尚教化して蓬莱山
蟲鼠を驅除せしむといふ
梶原屋敷　梶原氏の
南よ當る
梶原塚
権現御手洗池　延命水
明神森　弘法大師の作
山王社　八幡宮

海曼寺

總門額
二階堂出羽守
行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地の海
中より戦一口漁夫の網よかゝる所を揚れを腹中より正觀音の
靈像を得たる此る鎌倉へ聞えしかば時頼朝臣希代の
ことゝ是祥瑞なくしとて佛閣を開き観音の
浄土なれとて補陀山と号し四海安平の義よりて海曼
寺とせる瑞林瑞應廣正東悦等の四院をも造営あり同
六年の春堵堂落成して翌る七年入佛供養を修行を

地を鮫濱とのひ又鮫頭崎ともいふ海の方（百八廿間余）
南北一八町の洲崎なり依て鮫洲崎といふ江戸砂子ふもと
町東西十町の地を寄捨ありて五箇の僧坊ゟ百八十貫文を附せ
らる八十宇の房舎ハ巍然とし堂塔を又天竺の靈鷲
山ゟ準へ南紀の高野山ゟ擬しつゝひしかハ有信の輩ハ月牌を置石
塔を建弘安五年ゟハ北条時宗願主として堂塔重修
せられ月牌料として二十貫文寄附ありしとなり殊更重罪の輩なり
とも當寺ゟ入着ハ其罪を免許ゟ往古當寺開創の頃松榎各二千
株を植洲崎ゟ八幡三社を營こと方十里の間頭陀の免許あもし
建る其松の枝葉引路を覆ひて繁茂せしとなり
海晏寺前のまつも松神代もさることくやそくよと親しきとも
いふくともおもふくふ渡りものこ

鮫頭明神祠

砂水の海濱ゟあり祭神詳なゝ土俗傳へ云往古
此地へ丈餘の鮫の揚るゟありしゟ其頃此地大ゟ疫疾流行せし
うハ此鮫の祟なゝんと恐怖して漁人其頭を一社の神ゟ祀るゟ
按ゟ此祭神を鮫の頭とするゟ恐らくハ海晏寺本尊の縁起ゟ混しく附會
せしなるへし或人云く砂水背ハ鮫洲ゟ作りなると然くハ鮫洲の明神と祚へて
佳なゝんゟ或冊子ゟ云く此所ゟ佐美津川とく細き流の潮と交らもして佐美津
もとなりとく名付しとのことあり訂正すへきのこ

上古海道

品川ゟ池上へ行道大井ゟ北の方東海寺南門ゟ
句の岱往古の品川の驛路なるへし其道筋大井荒蒔池上
矢口とはくきしかを今も八景坂ゟ西南池上へ行道ゟ背の一里塚の擾一株
残りり又其辺の藪中ゟ標の石今も存せりとなり延喜
式大井驛傳馬のゟ證とすへし
延喜式曰
諸國驛傳馬 中略 武藏國驛馬 店屋 小高
大井 豊嶋 各十 足 下略

海賞山来福寺

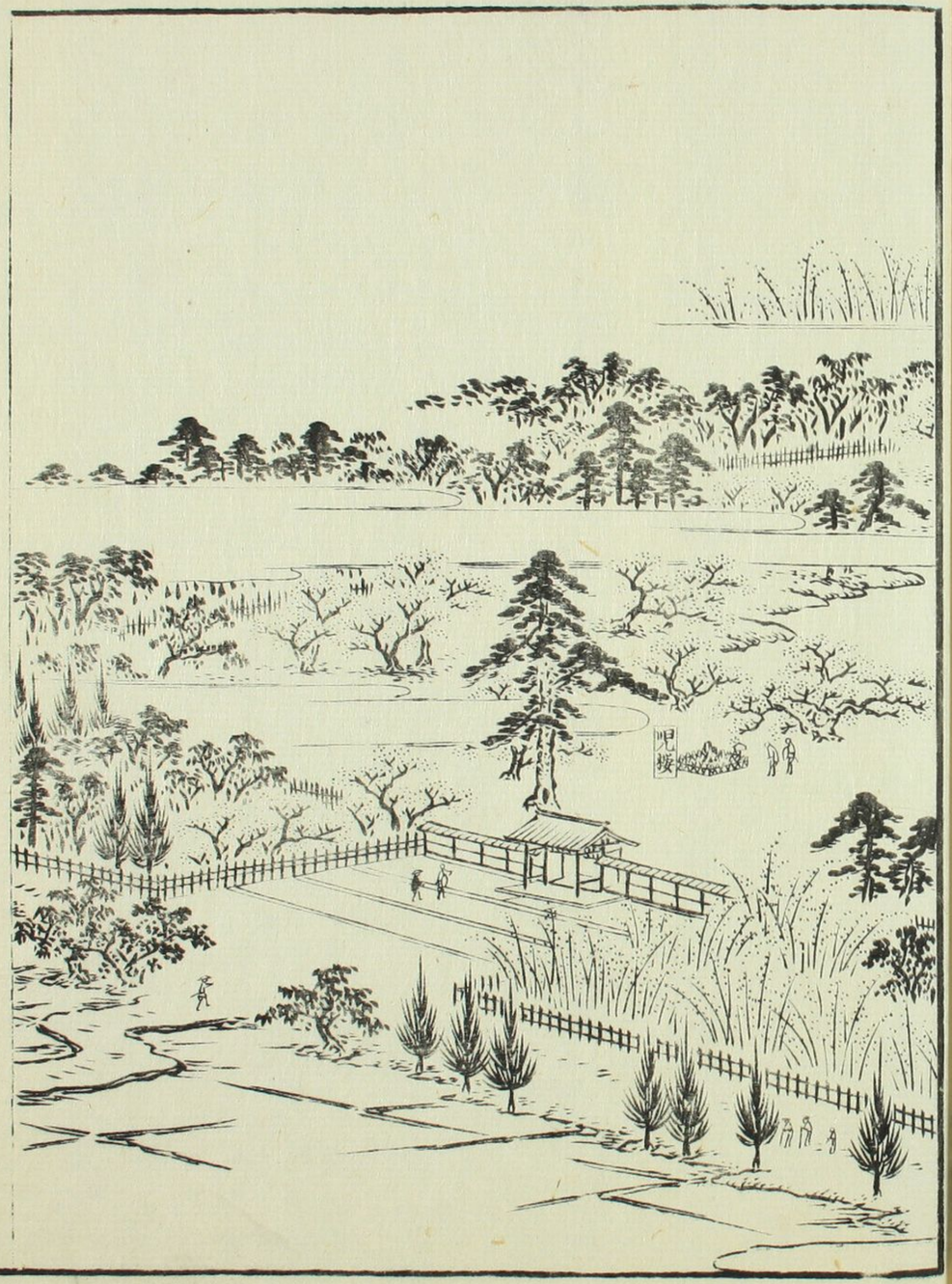
砂水御林町ゟ寸八分なり掘原氏の草創ゟ
菩薩を安置を弘法大師の作 丈九
則此地ハ其宅地なりしとゝゟ縁起云此本尊ハ掘原氏代く其家ゟ
相伝へしゟ尤靈威なり然ゟ元享の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ
此本尊ゟ祈念しゟ不日ゟ本快を得しゟ其後世の中大ゟ乱るゝ尓
本尊の所在ゟれさりしゟ文亀年間梅巖阿闍梨當寺ゟ四五町
西の方経塚といふ地やくこれを感得せしとなり 往來の来由ハ次ゟ詳なり

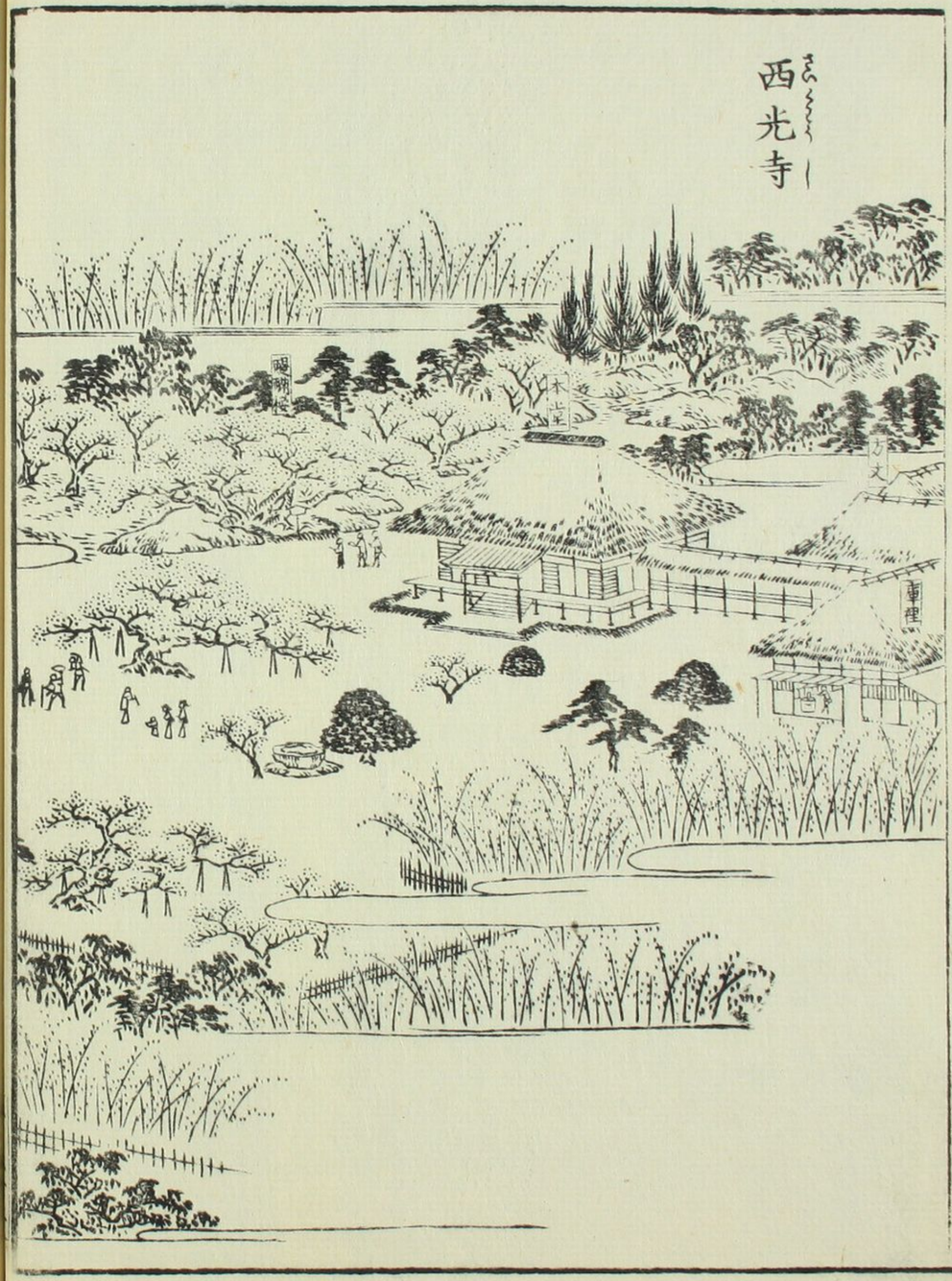
来福寺

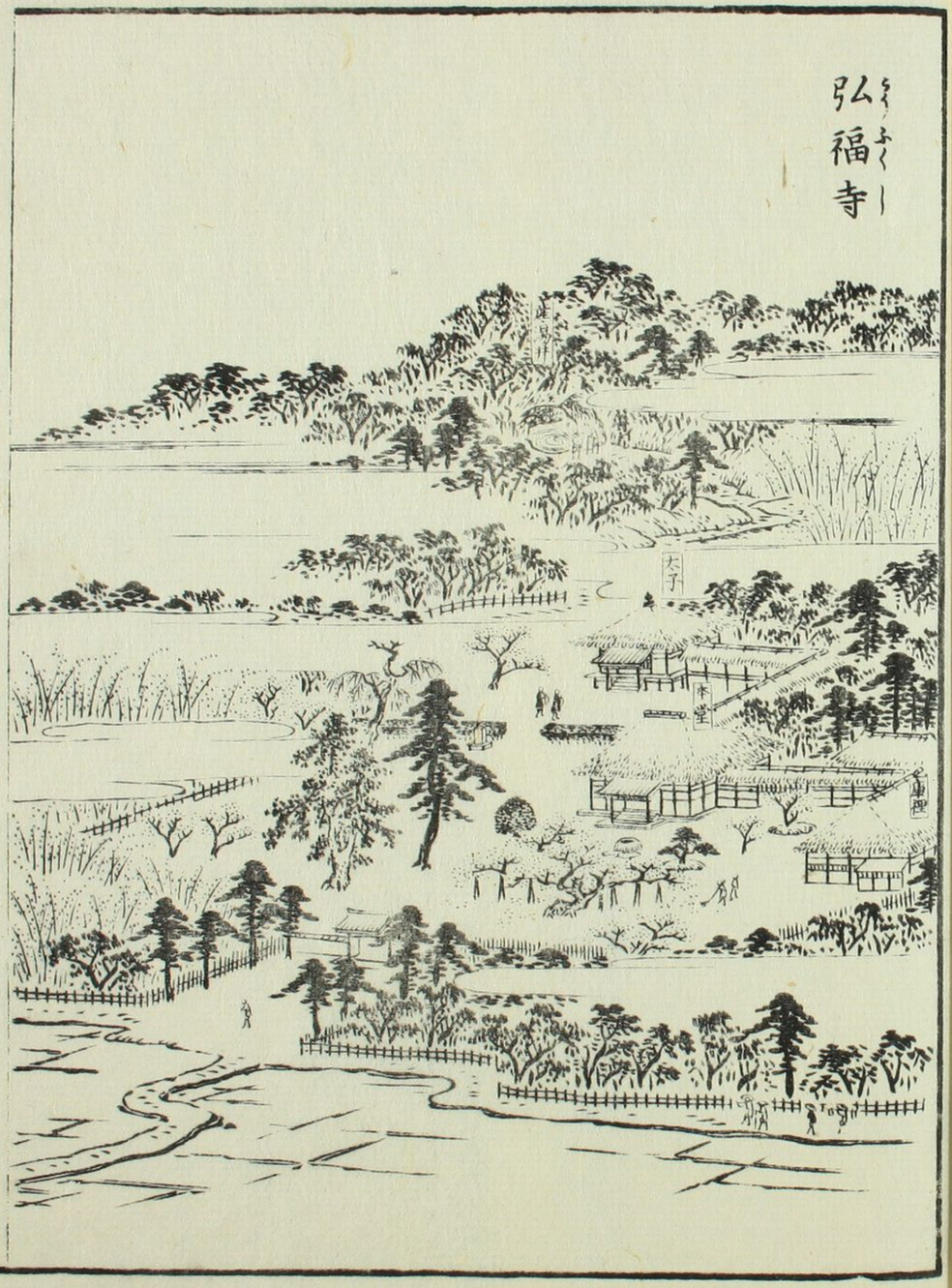
世の中を
うき
うぬ
ぬ

雪中菴
蓼太

さゝら
ゝ




西光寺



弘福寺

拠よ當寺開基梶原氏と称するものハ小田原北条家の幕下なりし梶原日向守なるべし永禄二年の頃六郷内新井宿の地を領せる北条家所領役帳よりも是よりよく考へ此所ハ日向守の采邑の地ゆゑ又其宅も此所よりありしと思それを土民おほく其宅の旧跡ハ来福寺ありひハ砂水松平土佐矣の別荘の地なりともいへり

延命櫻　本堂の左の方の庭前よりあり　梶原松　同所よりあり　梶原氏手親栽るとなるべし　梶原塚　寺の後畑の中ゟ其氏族の墓所なるべし其余一族の石塔當寺よりあり

當寺境内櫻樹数株ありて毎年遅く悉く品を頒ち弥生の花盛おハ遠近遊賞をる人火のごとし

納経塚　来福寺より六町ばかり西よりあり相伝ふ往古右大将頼朝卿佛経を書写なしめ此地ゟ収らるとぞ来福寺ゟ尊地蔵菩薩此所より出現しひ一頃土中ゆゑ夜なく読経しひとぞ故ゟ来福寺ゟ経読地蔵尊と称せり

松榮山西光寺　同所二町ばかり南よりあり弘安九年の開創なりとぞ往古ハ天台宗ゆゑ栄順律師開山なりしひとぞ其後

大井

親鸞上人弘法の道場とも當寺十五世を空善と号ス芳賀入道禪可よりも十四世芳賀伯耆守俊五位上清原真人元則の長子小して俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯王丸と呼へるを今當寺を西光寺と号すも此西光の名を摘ミ号けたるへし寺寶に武田信玄の陣羽織と称するものを収む庭前醍醐櫻と名くる老樹あり花ハ單辨ゆゑく立春より七十日目の頃より開もむ其余初とへの櫻の老樹數株ありく滿花の節ハ奇觀あり此地第一の花の名所なり

大井山弘福寺　西光寺より一丁ほかり西南よあり當寺も鴛師の弘法ゆゑく本尊阿弥陀如来の像ハ聖徳太子の作なりやうと此地ハ麻布山善福寺の中興了海上人誕生の旧跡ありて第三巻麻布善福寺の下よ詳なり當寺ゆも櫻の老樹ありて春時奇觀ありく了海上人産生湯井寺の後園なる横穴の泉ありく横穴の内へ入ると深くそこをもとりみ又當寺よ大井と

もあり邑名を大井といふも此井より起れる同三郎等の名あるも何れも此地より発くる人

鹿島大明神社　同所一丁そなた西南よあり社記よ云く當社ハ安和二年己巳九月十九日常陸國鹿島の郷神を迂し奉ると云く別當を尓現山常林寺と号し天台宗やして東叡山よ属せり本尊ハ薬師如来慈覚大師作開基ハ尊栄法印なり貞和三年丁亥再興すと覚阿闍梨を中興と称せり境内櫻多く春時一奇観たり

本地堂　智證大師の作ありと云ふ十一面観世音やく

古鰐口　別當常林寺よ収むる松女敬白とある上の文字ハ福と云文字を鐫損ぜるものあり按よ

奉寄進武州荏原郡大井郷鹿島宮鰐口
寛正二年辛癸未十一月日　揚松女敬白

銘

鈴森八幡宮　同南の方縄手を隔てく十町あまり不入斗村よあり按よてハ不入斗と号せしも此頃ハ和名抄よ所謂餘戸とあるの則是ありくし

祭神中殿應神天皇　左殿仲哀天皇　右殿神功皇后

神社とも稱せり　別當ハ真言宗やく八幡山密嚴院と号し

神主ハ森田氏なり

武蔵國風土記残編云

武蔵國荏原郡磐井神社　圭田三十六東二字
田敏達天皇二年癸巳八月所祭大已貴命也社
邊有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變盛
味事正直則如清水近國奇之祈病者取之服之
其功驗如神土俗曰藥水云云

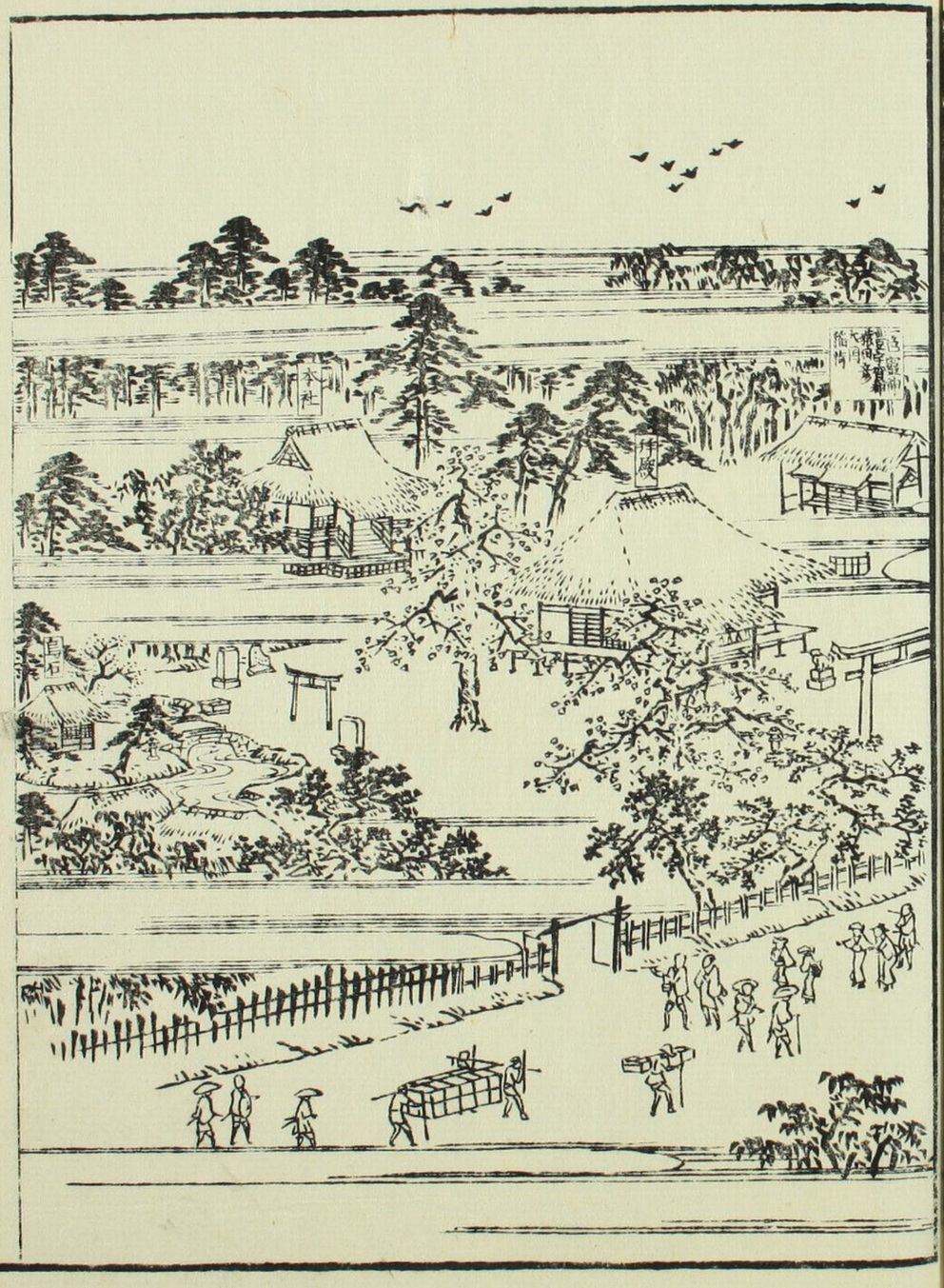
三代實録云

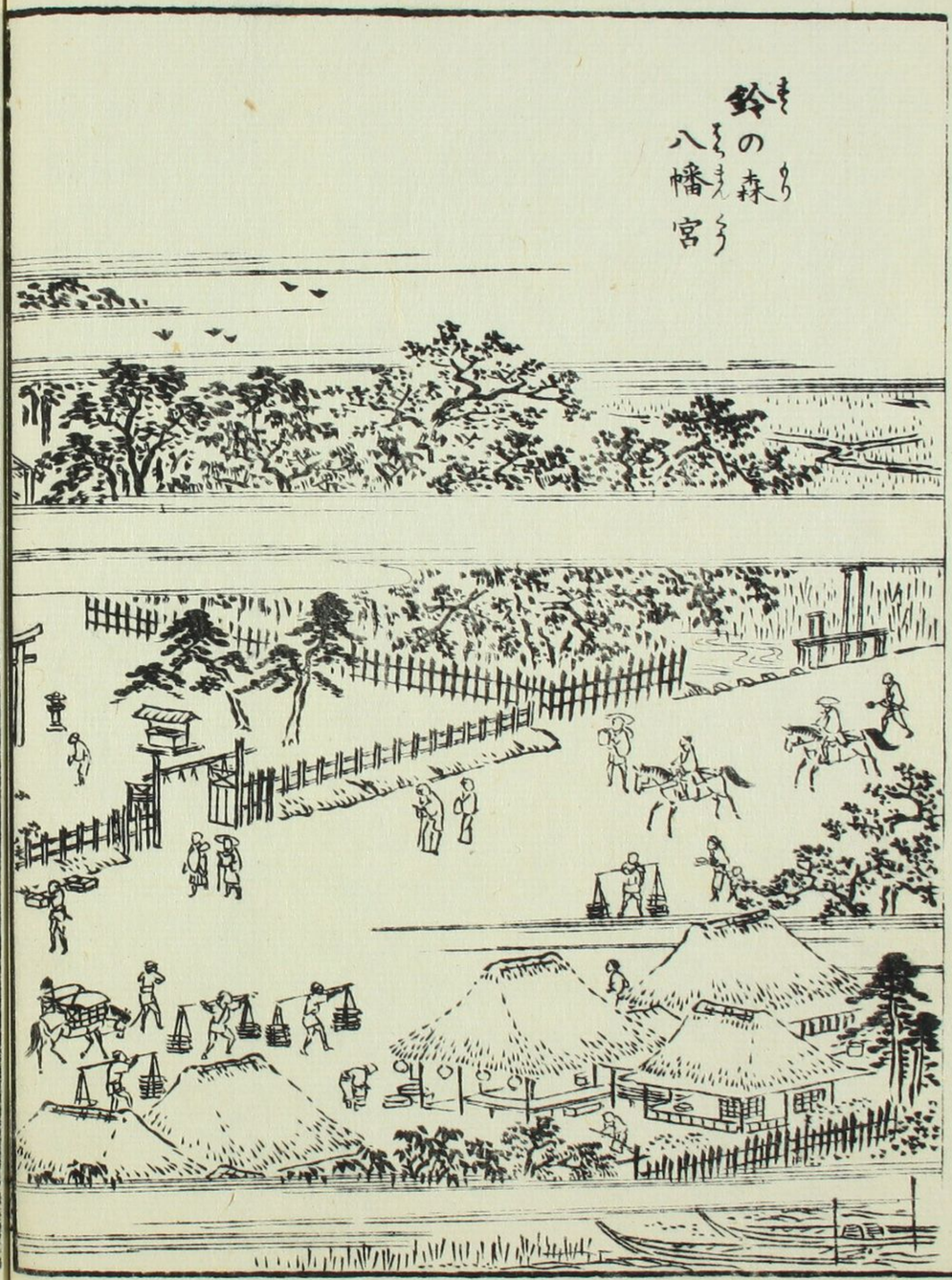
貞觀元年冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使
班幣於天神地祇去九月祈雨之災誠有感
激威以有年仍賽之武蔵國從五位下磐井神列
於宮社云云

按よ當社ハ延喜式ニ所載ハ磐井神社是ありくし當國風土記殘編等ハ後世よ至りて祭る所の神も定ありくさるよ因りて石清水正八幡宮を勧請せしありくし

鈴石　當社よあり相傳ふ他の石を撃ハ其石鈴の音ありと當社傳記よ此靈石ありよりく此地の名を鈴石森とハ云とも詳ありくし遠遊記行よ此社よ舊有一石轉之則其聲如鈴とあり或ハ云ふ昔の石ハ賊の為よ奪ハれたりと云

烏石　社地の左の方よあり四五尺そなたよ烏の形を頭ハせり石の左の肩よ黒き漆を以て畫くが如く天然の物よ南郭先生の銘あり烏石葛辰是を鐫もし記せり葛辰自ら烏石と号するも此石を愛せしよりて發ふるよ江戸砂子云此石詹麻布の古川町より三田の方へ移ハるの三辻よありくし古蹟なり


本社
拝殿


鈴の森
八幡宮

額　鳥石　阿野公繩卿筆　鳥居額　鳥石祠　吉田二位兼隆卿筆

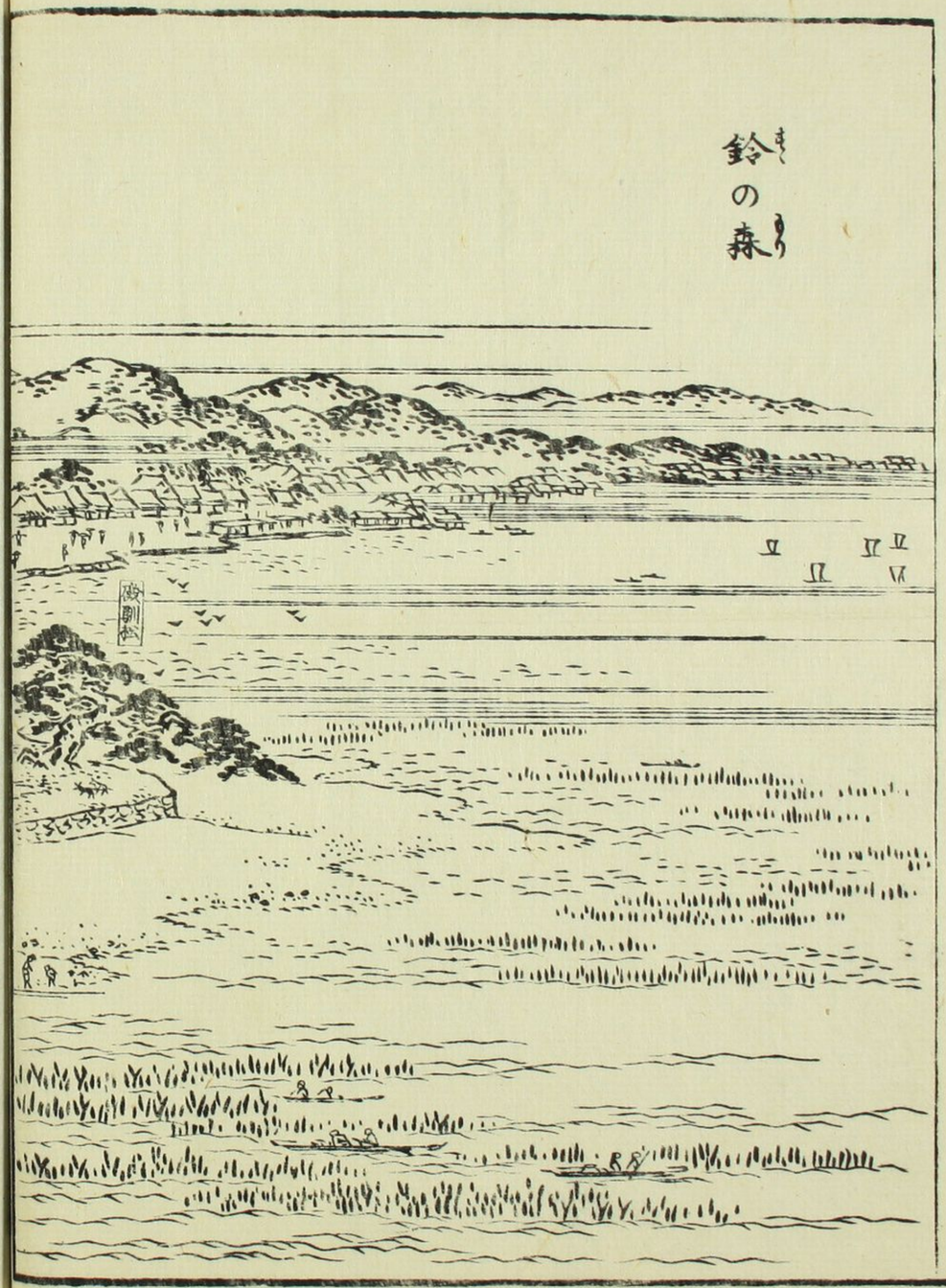
聯　左右の掛よ　拔小路二位參議定福卿

乾鉄の珠笠を両　海自詠七首献備の中の一首なり

僊隼蒼海於来風　揭う

石華表　六七町東の方今ハ海面となりて水面よ顕れゆく　中昔の頃迫ハ石の鳥居の柱の殘よ作の鳥居のあり當社の境内ありしと覚文の頃迫海道度くよ甘晉と今ハ社地の中を往還の道路ともなりぬ　後潮波よ欠損して元亀より万治社記曰往古神功皇后三韓征伐の時長門國豊浦の津より汐船よやをれんとす其海邊ゆ一石中鈴の音ありく雞卵のやゝ錆たるを故よ鈴石と称せ異賊征伐の後香椎の宮小蔵ゆひろ欽明天皇御宇八幡大神始て筑前宇佐宮よ鎮座の日靈示あるふよりて此寶石を宇佐宮ゆ遷さゝる其後聖武天皇御宇文章博士淸史大夫正二位文部ゆ神祇伯勲十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たりし時ハ八幡大神再ひ靈告あり依之此靈石を年足の家よ移し崇信ゝゝ奈ゝ嫡孫中宮太夫従四位中納言豊人卿桓武天皇の延暦年中武蔵守よ任せゝるも當國よ下向ゝ荏原郡よ在せし頃終よ此地を封ゝて當社を経営ゝ神石を鎮座なゝ孝淡當社是之故よ宮地を鈴石森と云其後　清和天皇御宇貞觀年間八幡宮宇佐宮より山城國石清水よ鎮座在とき六十餘州國毎よ總社八幡宮を當社を以て總社とをとゝめ笠島　鈴森の地をゆつて八幡宮の境内左の方よ笠島神社と称ゝ定あゝ祭る神六前豊宇賀姫猿田彦等なゝ奥州笠島の神と等き欤未これを考へを

万葉
草陰之荒簡之埼乃笠島乎見乍可君之山道将越


鈴の森

秋の野もあるねの後の雪をそふる月ハそのけもの　為家

磯馴松　鈴の森の社前海道よりも左の方海濱人家の前にあり

當社の神木と称せ

荒蘭崎　同く鈴森の邊ともに或ハ云木原山ハ景坂とも藻汐草に

荒蘭磯　とあり　北条家の所領役帳に梶原日向守六郷内新井宿を領

此地も古の　もとあるも荒蘭を新井と作る今も此文字を用ゆ

海道なり

續後撰　白波のあるねの後も秋列松かそふぬきの人をこそ見め　家長

大水　沖津風あるねの後も秋列松かそふぬきの人をこそ見め　家長

あるねとはいふなるへし

四國雜記　若ましもあるねの後も秋列松かそふぬきの人をこそ見め　道與唯后

千五百番　沖津風あるねの後も秋列松かそふぬきの人をこそ見め　今出川院近衛

鎧懸松　八景坂にあり往古八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松に鎧を懸られしと云傳ふ高さ六七丈大さ牛をかくす

枝葉柳條のごとく垂下りて其間より四五尺に過ぎ

尤比類なき古松なり一本に荒磯松磯馴松とも呼び或ハ震松とも

号く枝葉共に動搖をとゆるハ此地より望めハ海上眼下にありて美

景の地なり土俗此景を誤りてやえ坂と唱へしならん

八幡山行慶寺　大崎より東海寺裏の方戸越村にあり文禄元年起

立浄土宗にして岡山念誉上人戸越八幡并帶なを願成院と号ける

梶原氏什宝

戸越八幡　戸越村鎮守なり天文年間の鎮座ありとのみ御正躰を

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社

八景坂
鐙掛松

境内の小石を疱瘡の守と定め靈驗ありとて土人是を拾ひ取り歸る九月廿八日相撲あり　分限帳太田新六郎所領の中六郷内戸越八幡原と云云

木原山　同後の丘山をいふ　木原氏の領地なり　木原氏の系圖を披觀せ云く木原氏姓ハ穗積祖先を鈴木靫部介吉行といふ四代の後同苗平兵衛吉頼　御當家へ仕へまつり遠州山名郡木原を賜る其子を七郎兵衛吉次と号ふ其采邑木原より住しまつり普請方を勤む然る天正三年二月十八日　台命あるをもつて鈴木氏を改め木原と号せ同十八年江戸打入の時武州荏原郡　此山頂ハ上古の相模街道おそ新井宿村より四百四十石をたまふと云云

荒蘭宿といふ　地なりとそ古哥よめるの濱は笠島をいふ

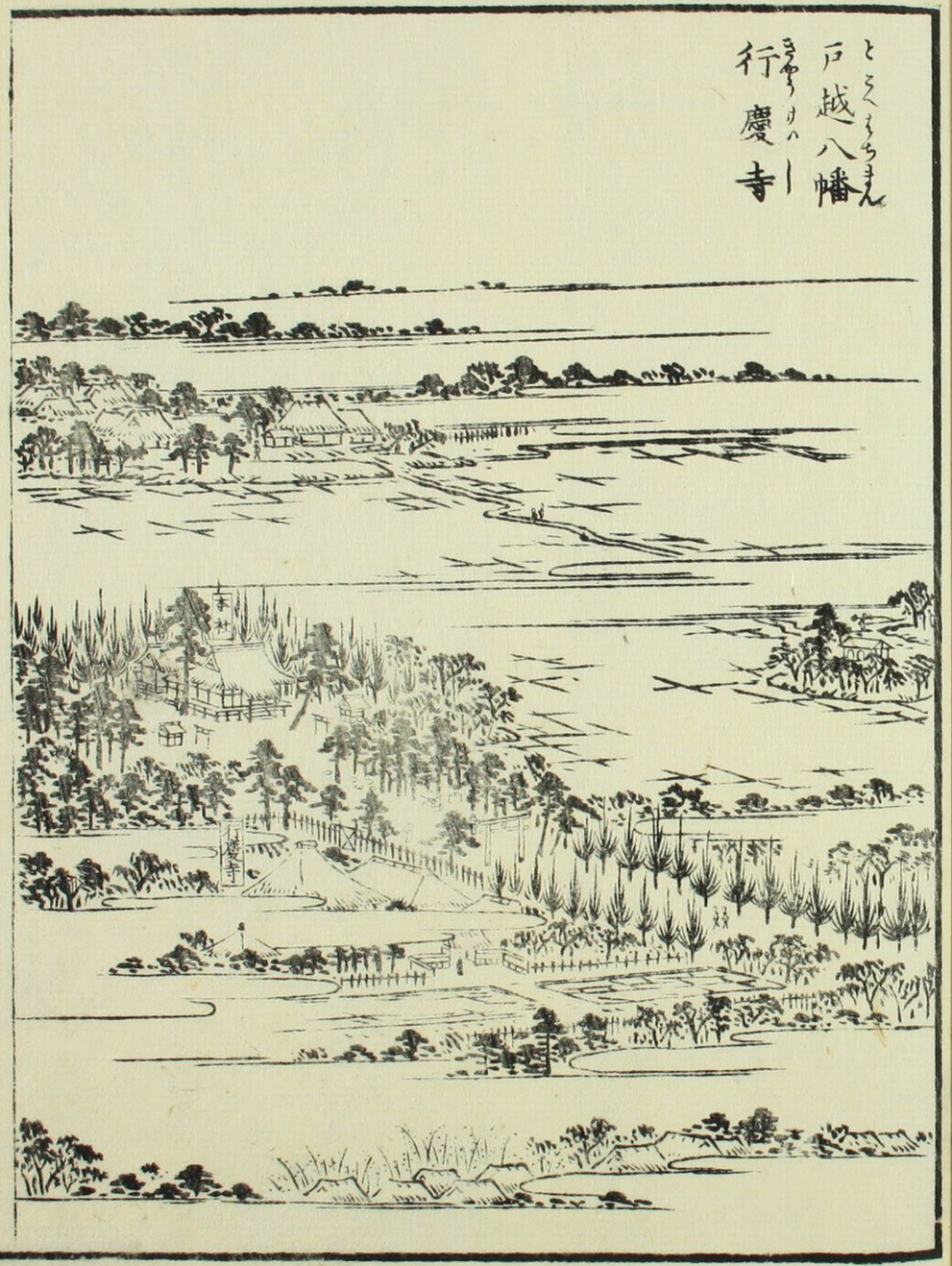
君ゐ山越ら葉　越ら葉なる　熊野社　此宮を土民小野小町の宮なりといふ其地

又池の中島ハ辨財天の叢祠なとそ

醫福山桃雲寺　同所山際よりあり　德門ハ東向やうく海よ相對す

眺望八景坂ふ同　此寺前崖下の耕田背ハ海ふうく此崖下迫浪を打寄其頃ハ上の道を往來せ　なり

當寺ハ曹洞汎の禪林やうく中古此地の領主木原氏の祖　木原十郎左衛門吉次



慶長十五年庚戌極月十一日卒ス 桃雲浄見居士中興セシ境内ノ墳墓ア

（此地ハ六郷ノ北條家ノ所領役帳ニモ真言新三郎領ストアリ）

福田山蓮花寺 蓮沼村ニアリ 林羅山先生撰ナリ 當寺昔ハ滝泉寺ト云

宗ノ古刹ニシテ荏原郡ノ地頭荏原兵部有治ト云ヒシ人出家シテ蓮沼坊ト號シ當寺ヲ創立セシ本尊十一面觀世音菩薩ノ像ハ行基大士ノ作ナリ往古ハ巍々タリシ巨藍ありしが地頭行方彈正忠日蓮ノ弘法ヲ崇信シテ他宗ノ寺院ヲ滅却スル行方彈正ノ宅地ハ六郷八幡塚ノ辺ヨリ同巷次ノ中延八幡宮ノ条下ニモ荏原左衛門尉義宗ト云ヒシ人ノ名アリ何レモ此地ヨリ住セシトナリ今本門寺ニ存セル木像ハ池上本門寺ニ有成ナルヘシ

（按ニ泉鏡著久三年六月十四日宇治川戰死ノ人ノ中ニ荏原弥三郎同六郎太郎又嘉禎四年二月十七日將軍入洛供奉ノ人ノ中ニモ荏原七郎三郎自政ト云名ヲ註セリ同巷次ノ中延八幡宮ノ条下ニモ荏原左衛門尉義宗ト云ヒシ人ノ名アリ何レモ此地ヨリ住セシ人ノ名ナルヘシ此爭亂ノ時ハ當寺ノ二王ノ像ハ池上本門寺ニ存セルヤ是ナルヘシ）

藍なく！

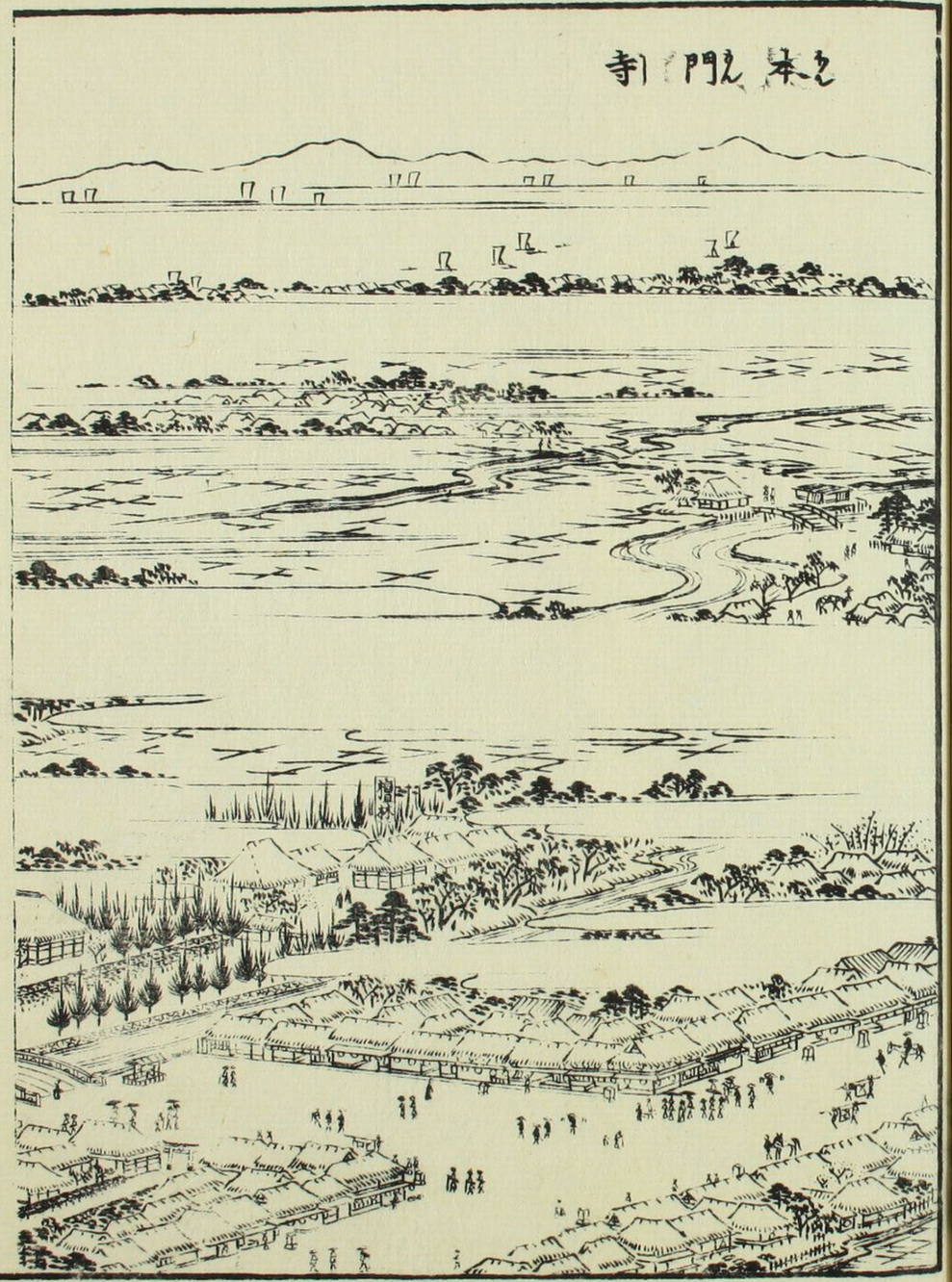
女塚 女塚村農民太左衛門ノ地ニアリ 相傳往昔竹澤右京亮新田義興ヲ害セン為都ヨリ宮方ノ御所ノ少將殿ト申上臈ノ女房年十六七計ナル美女ヲ呼下シ義興ニ與ヘント謀シニ彼女凶兆アリトテ是ヲ辞ム因テ竹澤其事ヲ怒リ良等ヨ余シ一件ノ女ヲ此所迄透シ出シ殺害セシ故ニ土民アハレンテ亡骸ヲ隠シ一堆ノ塚ヲ築キシトモ其名ノミヲ傳ヘテ女塚トノミ唱ヘ来ル

とのへも

長榮山本門寺 大國院ト号ス 池上邑ニアリ日蓮大士弘法ノ一本寺ナリ三頭ト称スル一員ナリ

當寺日蓮大士終焉ノ古跡ナリ弘安年間ノ開創ナリ（件両所云々甲州身延山總州正中山當山以上三頭トイヘリ）

（按ニ四所アルヲ明ルヨシヲ云ヒ又身延山図経ニ云ク高祖ノ應世ヤ生所ハ小湊ナリ得道ハ清澄ナリ檢法輪ハ身延ナリ入滅繫ハ池上ナリト云ヘリ）



大士を以て開山祖とし文保元年丁巳六老僧第二位日朗上人
當寺を修造して大剎とせあるに於て諸門徒推て開基と称せ
日朗上人ハ筑後公正法院大國阿闍梨と云姓ハ源父ハ新羅三郎義光の子南條
平賀の住人次郎成義四世の孫平賀有國の子なり一族ゐゝ出家文永八年大士ゟ
後竜の口の土牢より竜口同九年佐州より至弘安元年上足の第二となる文保
二年北条時宗の命を受日昭と共ゟ諸宗の徒と法義を論ずる事あり元應元年
正月廿一日池上より武州へ入門とゐゝ意ゐゝ立しなり古老の人の物語なり今池上本門寺
獲宗ゐゝく玄妙ゟ入門とゐゝ意ゐゝ立しなり古老の人の物語なり今池上本門寺
あつりぬ近く京都ゆく皆もろゐゝと古老の人の物語なり今池上本門寺
やくの古風のこうこう云
祖師堂 惣鹿子宝永七年寅十月十三日炎上をと云ゝ正徳三年渡辺幸庵光人對話
記ゟ此炎上を十日炎刻とも江源武鑑ゟ弘治元年十月北条家蔵下加地
右馬頭顕季一挨を起をの時此本寺諸堂弘安五年十月十三日
町録ゟ及ふうゝ日洞上人再建す大士化寂の後七ヶ
ゐゝく日同年十一月廿九日日法上人影像を刻とも云ゝ
宗祖大士の木像ハ大士存命の日日法上人其側ゟゐりゝ是を作るやと云ゝ
額 祖師堂 太虚庵光悦筆
本尊釋迦如来坐の一四菩薩の
像ハ共ゟ運慶の作なりとゐゝ
祖師堂の後ゟあり一切経を安置を
鬼子母神 妙見堂 樓門 右階の上ゟあり下の左右ゟ金剛蜜跡の一像を置
行基菩薩の作なりとゐゝ古川某師ゟ迄もそゝ

釋迦堂 當山第二十五世日巔上人の建立なり祖師堂の左ゟ並ふ
額 釋王殿 伏見親王真蹟 輪蔵
額 題目堂 同樓門の左ゟあり常ゟ法華
の首題を唱へゐゝ怠慢なし

其二

身延記行
万治二年
深草隠士
元政法師
人世火智音追師新再尋
今宵池上月 依舊照天心

其三

額 長榮山 光悦筆 五層塔 七面堂 宝蔵 客殿の後にあり

檀所 南谷にあり 南谷檀林と云ひて学黌あり此後の坂を朗師坂といふ

日蓮大士茶毘所 同所の山際にあり 今其旧跡に一宇の草堂を建てあり

狩野探幽法印の墓碑 同所にあり 狩野家歴世の墓碑 本堂より西の方にあり 碑文は羅山先生なり

日蓮大士終焉旧跡 此地は往古池上右衛門大夫志宗仲の宅地にして 大士入寂の後宗仲居宅を九老僧日澄上人に附属して一宇とし 長崇山本行寺と号す 今故ありて六坊と改む 本朝三大坊の一員なりとぞ

日蓮大士鏡御影 当院に安置せり 弘安五年九月宗祖大士宗仲が宅に在して寂に臨み給ふ頃 如是未曾有の大導師我家に入りて誠に盲亀の浮木にあへるに似たりとく一度はまみえ一度は別離の涙止りなく悲歎のあまり尊影を遺さむる事を求む 上人夫婦の深信黙止がたく終に託して自姿を鏡にうつし彫刻ありて宗仲に与へらる 故に世人鏡の御影と称す

同臨滅度時尭柱 浄影堂の拝殿にあり 大士宗仲が宅に寂を示し給ふ頃寄かゝりてありし柱なり

硯井 同庭前絶壁の下にあり 冷泉中にして甘美なり 弘安五年九月大士宗仲が宅に入り給ひ同廿五日諸弟子を集め立正安国論を講ぜし畢 我臨終の期既に三七日の中にありとて 佛像経巻等を弟子にわかち与へ給ふ 此井の水を汲みて硯の水とし 臨滅度時の年紀を図し(鎌倉比企谷本寺に在り) 又此水を汲みて祖師へ一代の妙符の秘記を書くためなりとぞ

旅立御影 同所にあり 弘安五年壬午九月八日延山を出で此池上に入り給ふ 十月十三日此地に寂を示したまふ 其頃宗仲此尊像を造立せんとも 六老僧等に嘱へ 寂光の都へ旅立ありし体相なり 則日法上人是を作る

宗祖日蓮大士石塔 本坊の左の方松山の頂にあり

池上右衛門大夫志宗仲墳墓 同所右の側に建つ 石の玉垣をめぐらし碑面に朗院日崇聖人弘安

其四

六年癸未九月十三日とあり同一房ゟ妻女の墳も並び立て法号八日明上人授ゟ
所なりと
世上右傳ふ夫宗仲一ゟ宗長ゟ作る姓ハ藤原氏禁闕四部官の一
鎌倉ゟ仕へ邑を武州池上の地ゟ食む嘗て鎌元
親王ゟ宗尊親王ゟ後ひ来ゟく鎌倉ゟ建長
元年丙辰八月鎌倉ゟ檀越となる信力堂々たり父これを
き怒ゟく逐ふ然しく宗仲弟某と相謀りく父を諫む遂ゟ父も又共ゟ大士の
宗化ゟ帰ゟ宗仲毎歳供を身延山ゟ送ゟ正應元年十月
十三日旗曼荼羅記をはる其孫阿闍梨大師河原村ゟ今ゟ至りく二十四世子孫
連綿として茂せり一説ゟ云く宗仲ハ世の工匠を業とし鎌倉ゟ仕ふると

坊舎三十六宇

大坊ハ九老僧日澄上人住せる照栄院ハ六老僧日朗上人ゟ学蔵坊ハ九老
僧日像上人在せり是をあらせく惣門
當寺古跡の四院やいく

寺寶註法華經四巻

宗祖日蓮六十弘安元年戊寅徒弟の望ゟはりく撰ぜる入滅の
淺日昭へ賜ふ由傳記ゟ云く當寺ゟ四巻の残四巻ハ豆州玉澤ゟあり肉筆ゟ云々
引汲ゟ下ゟれしゟ當寺ゟ最要文と題ぜる祖師の
頂當山日慳ゟ若此書ゟ宗祖日蓮大士遺物目録簿一冊
上ゟ末ゟく十类ゟ徒弟ゟ擔那等へ贈ゟ弘安六年癸未正月
遺物の目録ゟ則大士の真筆ゟり
輪番の次第帳ゟり

宗祖大士親筆消息數通同大士所持念珠一連肉付歯骨一枚

深草元政法師ゟ是を草山艇ゟ撰ゟ
滑堂ゟあり万治二年深草元政法師身延山宗祖廟當輪番次弟弘安五年十月大士入寂の頃
堂を構む肉つきの歯も此内ゟあり此歯ゟん所ハ我生身常ゟ

ありと聴へとゟんのこゝゟを著く日既ゟ異中ゟ
對面たまそゟんともゟすありしゟり見かちゟく
貞宗太刀一振

勧化簿一冊

修池上本門寺知識文代

蓋聞時運長久佛刹隨世興廃
眞諦由俗諦顯佛法藉良有以也
國王大臣及有力之名人而重之
祖大薩捶草創之蘭若今玆
興廢屢變方風四海不既帝屬
樹林交遷婆羅僧遇春蓋
輪木奥寂寞獨不能祀如
花法依寂滅爲樂之處
夫獨在住人興況人
依人則一成一住日地光且
人即身修最勝也寺自其付
可一本佛日諸居則嚴
造宜修諸莊經故寺之
伽藍意以中欲發
修故有餘禍之也
歲仰財又以范文
其惠貧正杯渡不處
福非者公當遇
造唯故云荒
救攘災

紫石靈鷲山より

撰ゟ

建長五年四月廿八日
日蓮上人房州清澄寺
の旭に向ひ初めて
題目の七字を唱へ給
ふ本文の如し

民況是長久之世昇平之時乎因茲乃今普叩擅門
廣募樂施正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠
萬方致志一振鵬翮寥落重興祇林衰微人々入此
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清京
之日者也

宗祖日蓮大士姓ハ藤原父ハ貫名次郎重忠始三國氏ヲ重忠ハ遠州刺史貫名五郎重實の二男ニ
母ハ清原氏あり一ハ島山の氏族とも山崎左近徳五位兼長の女とも其母常ニ旭日を拜ミ或夜日輪蓮華ヲ乘し其
房州長狹郡小湊ニ生る胎ニ託まと夢ミて後孕む故ニ善日麿と名つく
創立も所謂小湊の誕生寺是なり十二歳清澄寺ニ入て真言の業を道善ホ
学び名を藥王麿と云宗要抄ハ太士初發心の旧跡ゆゑ虚空藏菩薩の霊場ニ
嘉禎三年丁酉歳十六落飾深衣受戒し蓮長と号し是生と唱ふ命まる
所の名なり宗要抄ニ十月八日出家もとあり又靈夢の應ニ依て改む
八日蓮と改む後自日蓮と
求聞持の法を修し靈應を感ゼ於て一聞千悟し普く諸宗ヲ
濟ゑ大ニ經書ニ通す竟ホ諸經中王最為第一金言ニ至ル大道
利生の志を發建長五年癸丑歳三十二四月清澄の室ゆて七日三昧ホ

入同廿八日旭日ニ對ひ掌を合せ始て法華題目の七字を唱ふ是
化迹日弘法の權輿なり
故ニ道善忽て清澄を逐ふ同五月
ニ移ル住ス同七年乙卯歳三十四註法華經を著し
ホ意を著ふ又文應元年庚申歳三十九立正安國論を編ゑ後記ニ云く
正嘉ニ始りて文應ニ終ること云云七月十六日宿屋左衛門光則ニ就て是を前相州平
時賴ニ捧く然といへども其書諸宗を謗ル憍慢の文あるをもて
是をとらも却て大士をして豆州伊東ニ謫せしむ時ニ弘長元年
辛酉五月十二日なり

中山法華經寺最初撥法編の道場ニして今ホ
同二年壬戌歳四十時賴悵然として感ゼる所あるをもて翌年
癸亥五月廿二日牒を下して大士を赦ゼ依て復鎌倉ニ歸る
十三八月大士房州ニ下向安公妙蓮尼同十月三日死師ニ祈誓あり蘇活
同十一月十一日同國小松原ニ移ル大士ニ化を悪おて
小松原をかこむ大士ニけて市ノ坂の宮中ニ入又同六年己巳
手書の妙法一本を冨士の嶺の半腹ニ埋む今經の峯ニ
鎌倉ニ至ル雨を祈らんがため
經文を護校ニ書して感應あり官議して云く日蓮事を
佛

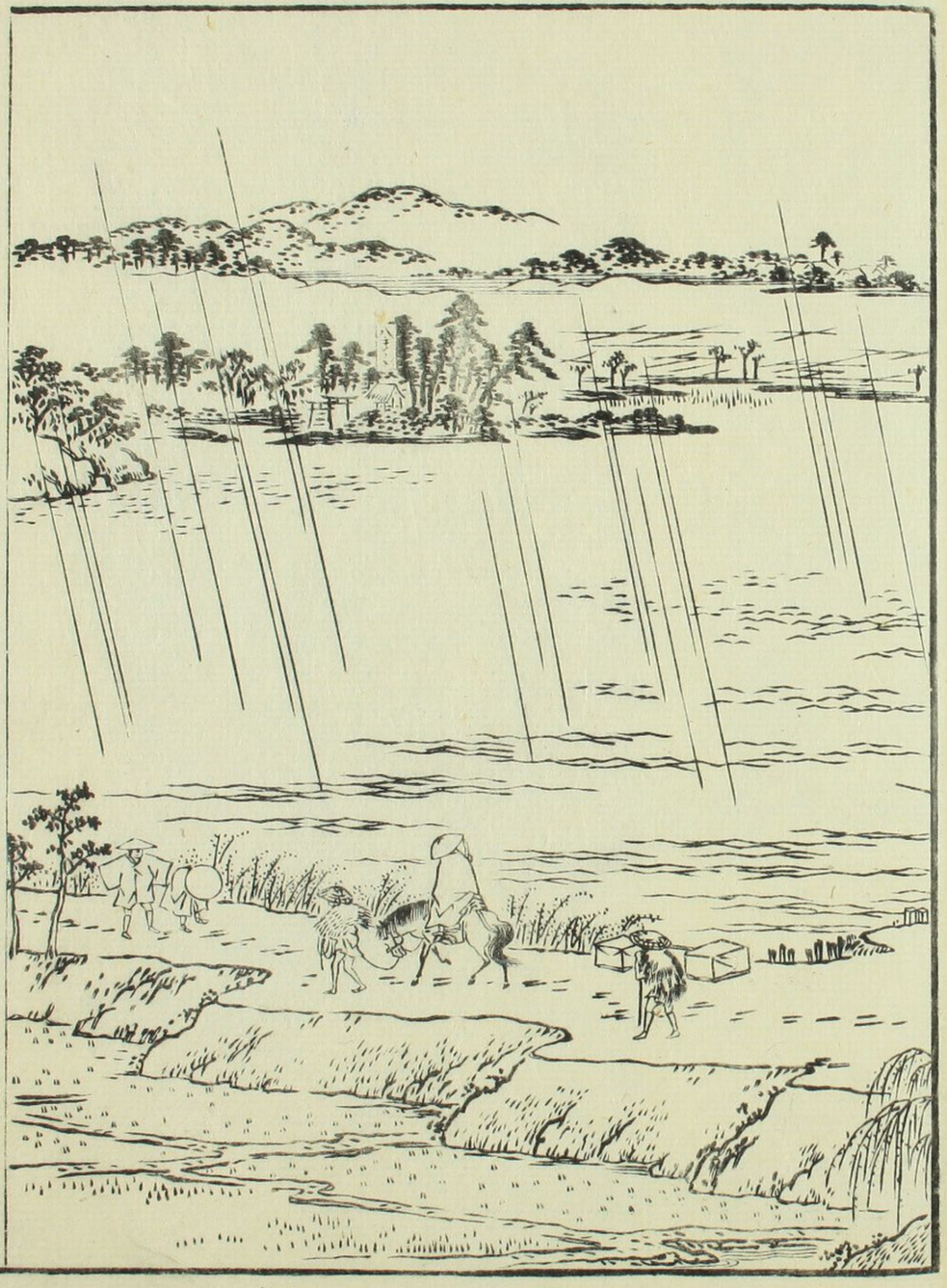
法よ托して國家を乱さんとも罪まふ死よ中まりと依て同年
九月十二日執権時宗頼綱よ数百の兵士を添く松葉谷へ發向せしめ
大士をかこめ捕ゑ又日朗等をもくく六人の輩を地牢よ入其夜龍口よ於て
大士の頸を刎んともれとも回祿村家光山龍口寺其旧跡なり此時一光三昧あり餅を盛よ盛来るを悲こ世俗の口碑よ傳へるのこと説よ此老嫗ハ稲荷の神化せりと云
霊威あるを以く執権時宗大よ驚死を宥め
佐州よ謫を鎌倉より高祖を免もの使者と龍の口より怪異を告んともる使者七里濱やして行逢こう依て其所の水流を後人名つけく active 蓬川と唱ふ
又同十三日本間重連う依智の家よ至りるよ其夜辰星庭前の梅樹の上よ降光を放つ其霊巌をくく梅山妙興寺と云同十月二十八日佐州れう崎よ着舟あり其海上角田の水面やく高祖棹をめぐし経題を書しめふよ文字の象波間よ徹しく自ら龍蛇と動もるの瑞しあるを入呼んて波の題目と云ふ又同年十一月朔日大士佐州大野の塚原の小堂よ入くく霜雪を犯し穏る壬申年正月十六日信越の人奥羽の僧等と大よ向巻をつらねるおり遂よ執権時宗大士を赦を依三月二十六日鎌倉よ入
同五月十二日甲州身延山よ隠栖せんと鎌倉を發し同十七日かこ
移を草庵よ入るよ（其頃七面の神一女と化して来て大士石和川（先同年五月二日王府より護法の牒を下しめふ又其頃経石を水底よ投し鵜飼の息を化して道を守護せんとの誓ふ）
其地幽邃なりとそとも四方歓ひ慕ひくく来を集る者雲の如し

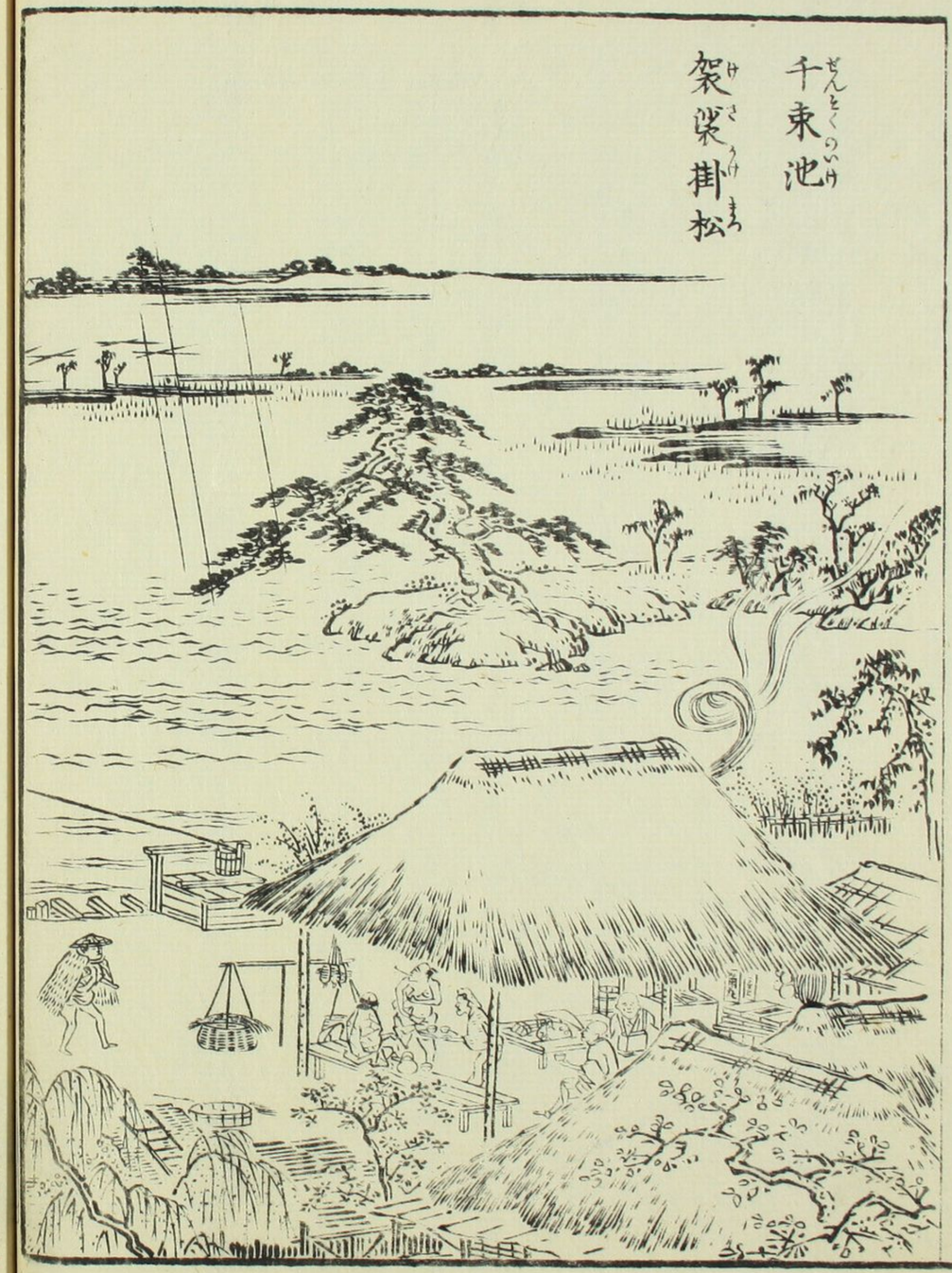
故よ其室狭くして衆を容るるよあらを依別よ一堂を建て身延
山久遠寺と云誦経観念十年一日のこと
弘安五年壬午宗祖齢六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありとそく
同九月八日身延澤を出くく同十八日此池上の地よ移り右衛門太夫
宗仲が宅よ入（宗仲後よ家を捨し寺ともふ今の大坊是なり）同北五日より安國論を講しもふ
講畢るの後衆よ告て云く吾三七日の中よ化せんとを悲達太子も
捨提河の辺ゆく八十歳の時涅槃よ入もふ我も又當國田波河の辺
ゆくく滅をへし若地震せハ是其期ありとあるくく又日朗よ語て曰く
吾入滅の後墓所ハ必身延山よ擬へしと云ふ嘗て十月三日親ら
本迹大要を書しく立像佛（弘長元年大士豆州（頃日伊東八郎左衛門尉朝高大士よ
附属る所の釈迦立像の佛世よ随身佛と称せり今海中より出現のこと門扈書注釈よ詳あり）居るの頃の頂田旁室
併をもちく日朗よ授与あり
同八日上行附属の法門を弘めん為よ六萬恒沙の眷属よ像り正しく

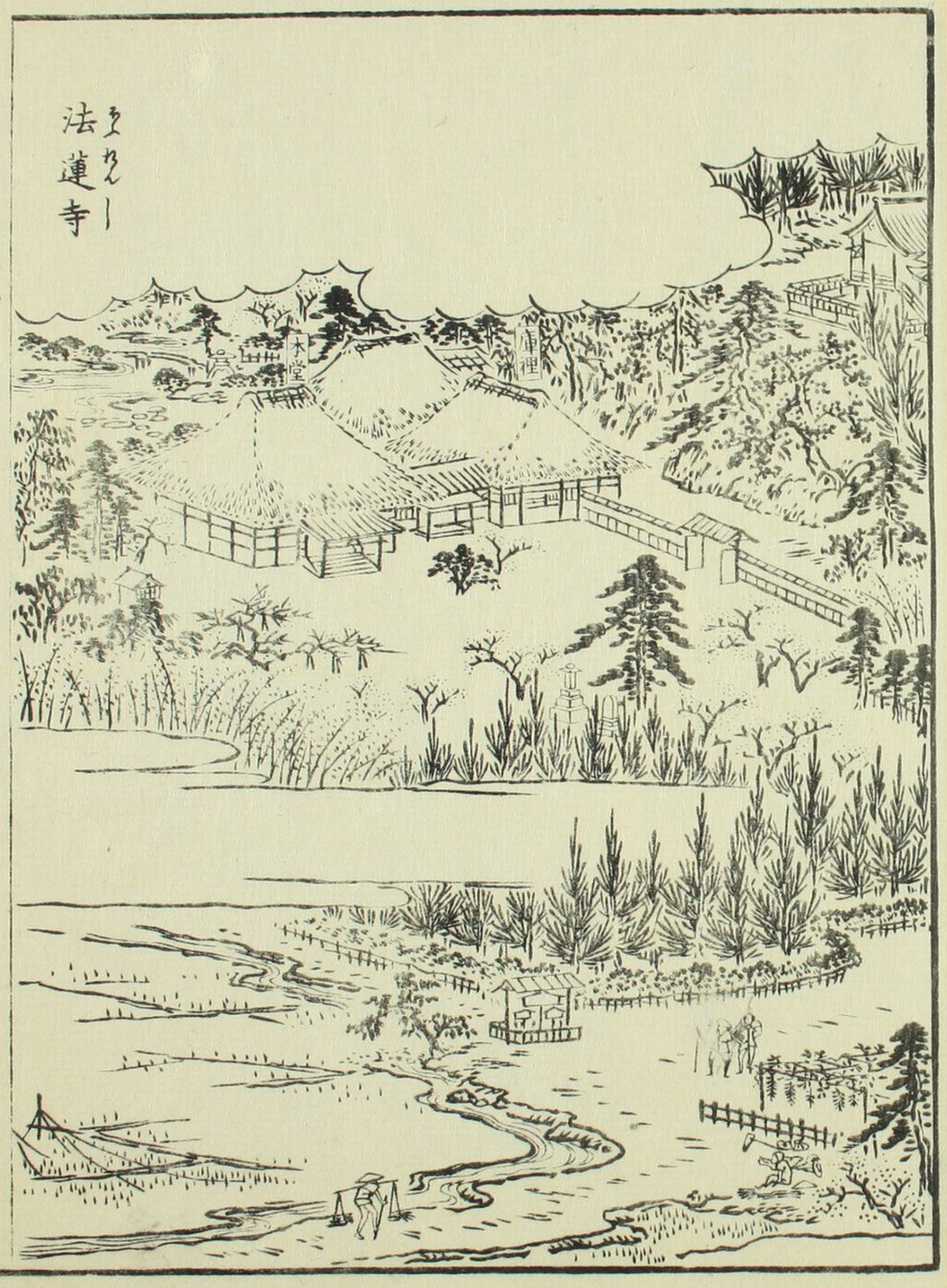
上足六人を定めぶ（所謂日持日頂日昭日興日朗日照等の六老僧なり）且衆に命じて云く吾没後六子を見るが猶吾を見るがごとくせよとなり同十二日諸子問訊を遺訓淳々然として既にして侍者をして自ら筆をとる所の大曼荼羅を懸しめ焚香散花持誦愈つとむ十二日黎明に地震ふ諸弟子皆来り集る大士衆と供に方便品を誦し入佛知見道故の句に至り睡りをもよほし寂を示しぬ（其日地やはく往古の宗仲の宅地なり）世壽六十一法臘四十六葬儀禮に遵ひ山中に閣維を林樹憂哀しく人をして鶴林の想あらしむ同十六日又十一月廿五日とも云遺骨を収め身延山に送ると云云（以上宗祖傳の要を採る記載大士編述の書凡そ四十有余部）

千束池　本門寺の西一里余を隔てゝある長東西へ三丁ばかり巾南北へ五十歩ばかりあり土人云往古此池に毒蛇住を後七面に祭るとぶ又池の側に日蓮上人の腰を懸しと称する古松一株あり

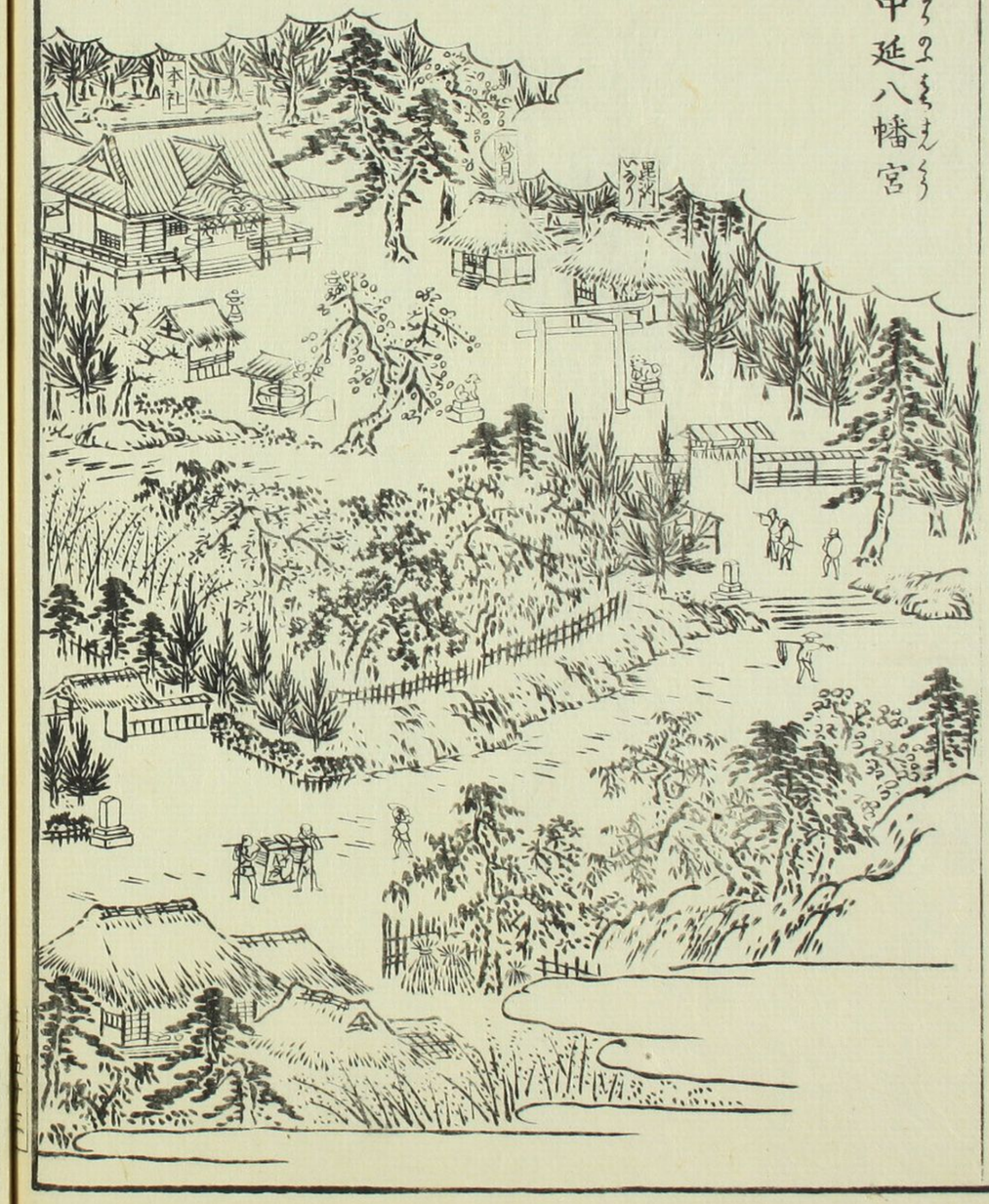
中延八幡宮　中延邑に在るを故に号とも別當八日蓮宗やて八幡山法蓮寺と云開山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相伝ふ當社の神像ハ源頼信朝臣覚仁年間霊夢によりて感得ありしとぶ長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義朝臣陣中に移しまゐり敵を亡しの其後永承六年奥州安部頼時乱を發し又清原武衡家衡叉逆の時も共に頼義朝臣義家朝臣鎮守府将軍として奥州へ發向し亡しの此御神の衛護による所やらん崇信浅からず累世源家に相伝をふ荘原郡の領主荘原左衛門尉義宗と云人あり（姓ハ源ヤて則ち八幡太郎義家朝臣の遠裔なり）代々此地を禄を依て中延を氏とし又此所に館せり康元元年丙辰鎌倉に於て日蓮大士の宗化を聴直に擅越とある其家に此神像を蔵む嘗て霊夢を感るの後文永年間日蓮大士を請じ奉法華経并に法味を以て一社に勧請し自記を作りて其子左衛門尉




千束池
袈裟掛松



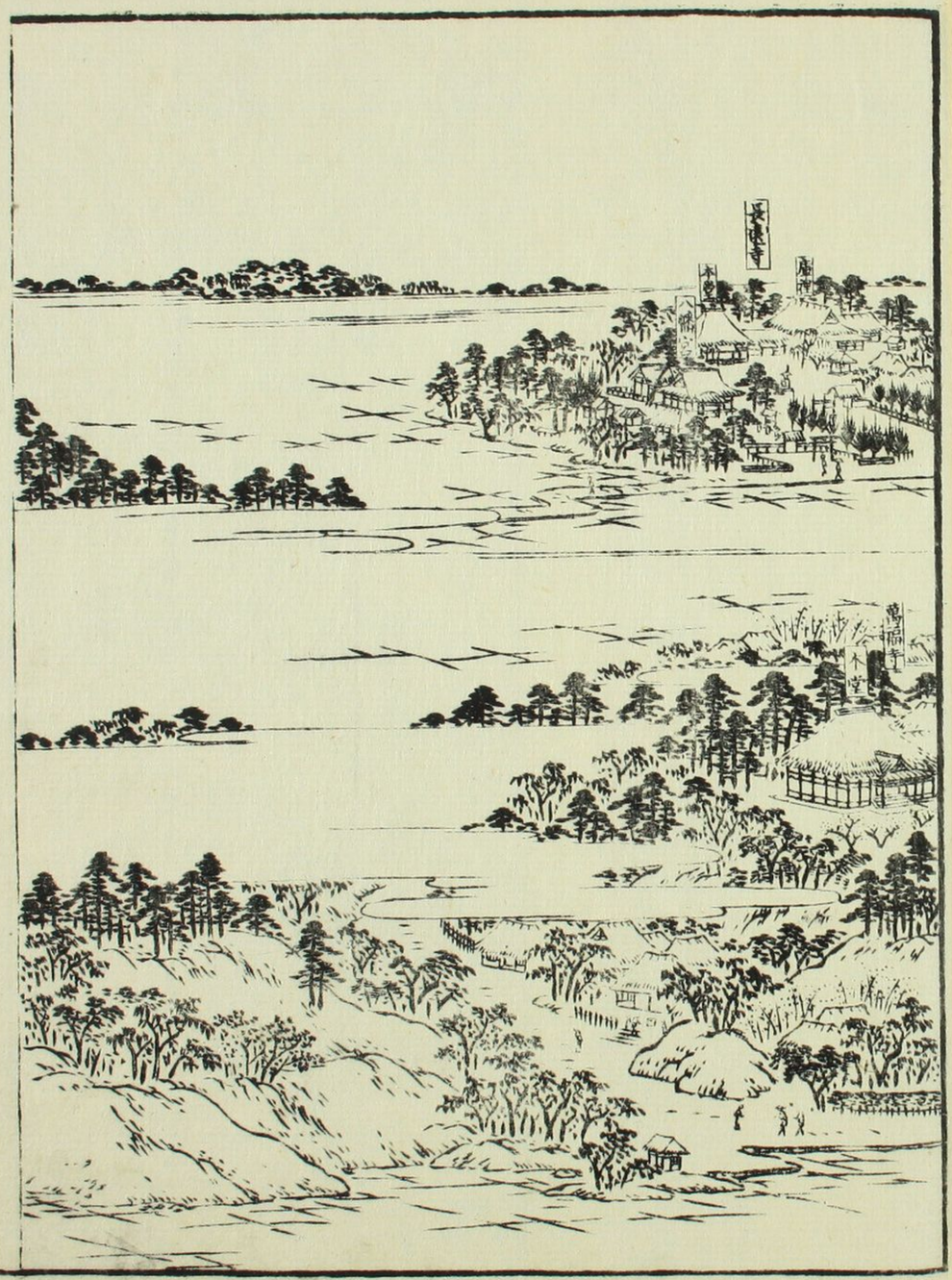
法蓮寺



中延八幡宮

有成次男徳次郎義滅して朗慶と号し九老僧の一員と
化を則當寺の開祖
ゆゑ〳〵墳塔もあり
寺寶 賴義朝臣譲状 義家朝臣へ八幡宮の神像を
譲状一通 是も同し神像を越中
附属の證書ゆゑ〳〵真書なり 荏原左衛門尉
慈眼山萬福寺 馬込村にあり
寺は属を本尊は自然銅の弥陀観音勢至一光三尊なる 中まる長二尺余左
右八一尺そろ
と云 相伝ふ當寺は梶原平蔵景時創立の梵宇なりと云靈
と云
牌并墳墓あり
按ふに靈牌の表は萬福寺殿前三州大守香山不捻大居士正治二年正月二十日とあり
是疑ふらくは後世造る所あるべし 鎌倉時世かゝる法名あるをあやしむ大居士と云を
附もするは遠〳〵ぬ世より起りしにや小田原北条家の幕下の士は梶原
三河守と云あり又梶原出五郎尉景 江戸馬込の地を領せし北条家の所領役帳に
と也是も又三河守 寺僧ありて其名の委くるをもて
の像なるべし 寺僧あり誤り伝へるならん景時
よ平村吉平家次等の太刀を賜ふその 古書よ所見なし
古文書なりとも真疑ひ 寺寶 布袋鞍 梶原氏所持の
鐙 形を蒔繪とも角々文 今世よところ〴〵と云 鐙のごとく小形ゆゑ
〳〵ものゆゑ至て軽く鎌倉時世の物とえそらく

馬込八幡宮 同所より三丁ところ坤の方池上道よあり
梶原氏宅地 同所通りを隔て向ひあり 今農民の園中よ入る土俗
景時の舘とも是も三河守邸の一助五郎等の宅地なるべし
鳳来寺 峯村よりひろし 鳳来寺
峯の薬師 峯村よりひろし 峯照山正善寺の持ゆゑ鳳来寺
峯の薬師をうつせりといふ
大金山光明寺 宝幢院と号せ新田明神より五丁許北方
鵜木村よあり 西山派の浄刹なり 上古八鳥話説 寛喜年間の草創
わづかに開山八善慧上人弟二世八記主禅師良忠なり 良忠八鎌倉光時寺
仁治の間四箇年當寺よ住せ の開山なり延暦
是より後鎮西四流相續せむ 當寺八関東浄教勧寺の権輿念佛弘通


長楽寺
萬福寺

萬福寺
馬込八幡宮
梶原屋敷

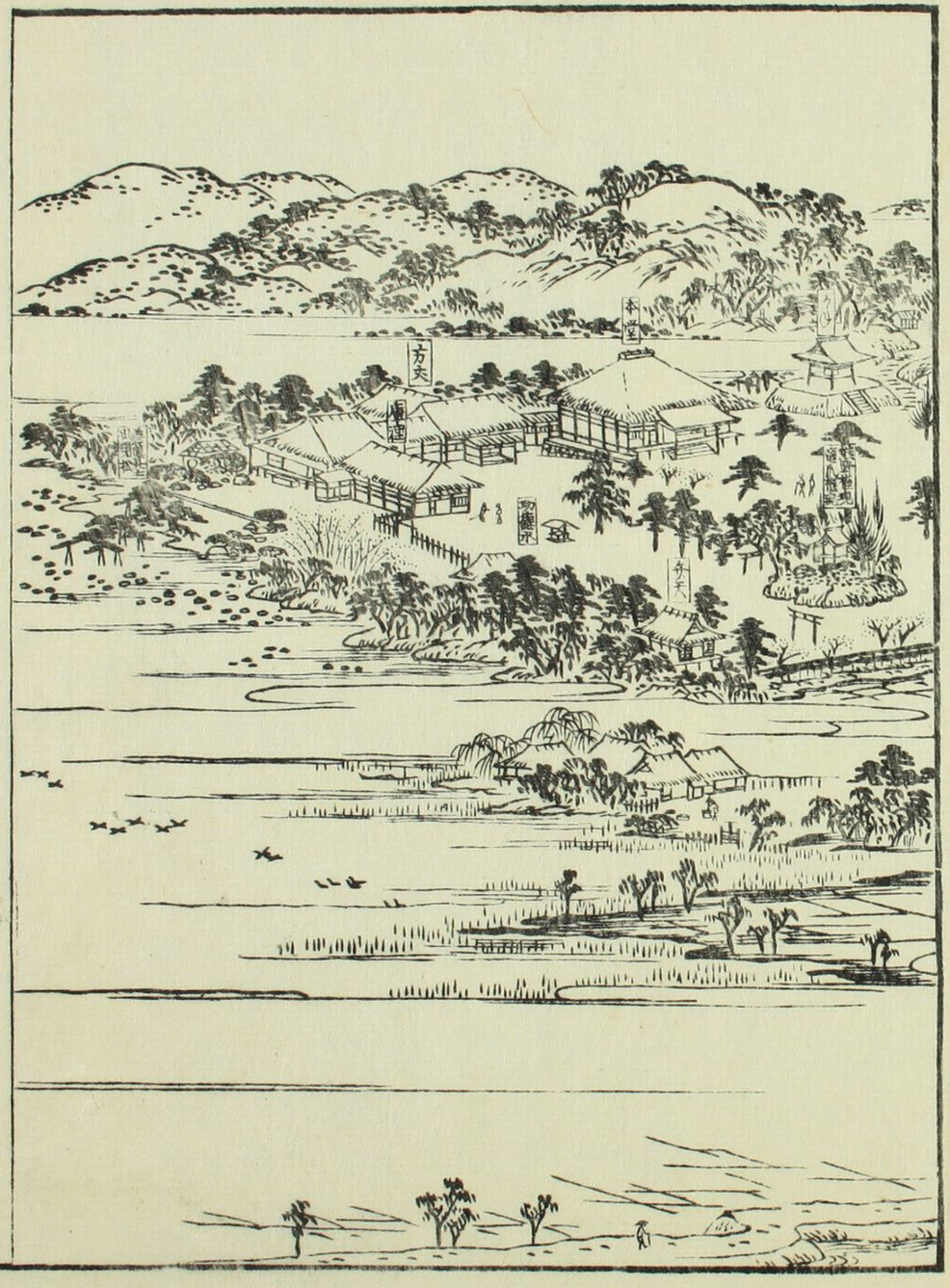
最初の道場
本堂本尊阿弥陀如来 立像 三尺 山城國八幡村ゟ住ける康尚と
いふ人の作なり 康尚ハ美濃守康信といひし人の一子にして八幡大菩薩の仏像を作る事を覚し故ゟ此人の作ゟし仏像を八幡の作と云傳ふ
額 大宝王 弘法大師 真跡なるよ
本尊縁起云開山上人五十三歳此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ
一七日の間参篭あり然ゟ同十五日の夜社檀ゟ僧形の弥陀如来出
現しまひ上人へ十念を相承しまひぬ上人歓喜ありて翌朝下向の
時社外ゟ至られまゟ異僧傍ゟ
あり依て武州鶏木村へ迁しまゐらせ
額 光明寶林 縁山大僧正満空筆
功徳水 同本堂の前左の方の井をいふ八幡鎮座の霊地ゟハ必名水あり 當寺の鎮守
も八幡宮なり開山上人鶴岡八幡宮へ詣給ふ事数度に及ぶ然ゟ此
霊像を當寺の本地阿弥陀如来と仰きまゐらせ給ふ功徳池 弥陀の心水なり
よ此霊水を以て衆生の濁心を洗へハ一切の病苦諸難あるゝ事なしと
荒塚 本堂の前左の方にあり相伝ふ江戸遠江守雷火ゟ撃れて死せしを塚ゟ築きたる
となり新田明神の下ゟ詳ゟなり

観音堂 同境内堂の右ゟあり縁起云善恵上人津國四天王寺の聖霊院ゟ
不断念佛の浄業を創ゟ時ゟ此霊像を感得あり又霊ゟ住せ
善恵上人宇都宮實信坊ゟ命して此本尊を當寺へ遷ゟ寺ゟ一宇此草
堂を構営しまひ安置を北朝の延文四年新田左兵衛佐義興竹澤右京亮
遠江守ゟの館中ゟして一族良宰と共ゟ水中に溺死せしを
かゝる義烈忿て火雷神となり竹澤江戸ゟ一族を悉く撃殺を殊ゟ矢口の渡の
の跡なゟハ雷火堕るよ屢ゟ寺院民屋も悉く焼亡せしゟハ浄心と
興を免まんよを此本尊よ祈念し雷火の難を逃るよの奇特を蒙ると
御衣のさゝら焦ゟ今ゟ然ゟ
故ゟ上俗當留觀音と称す

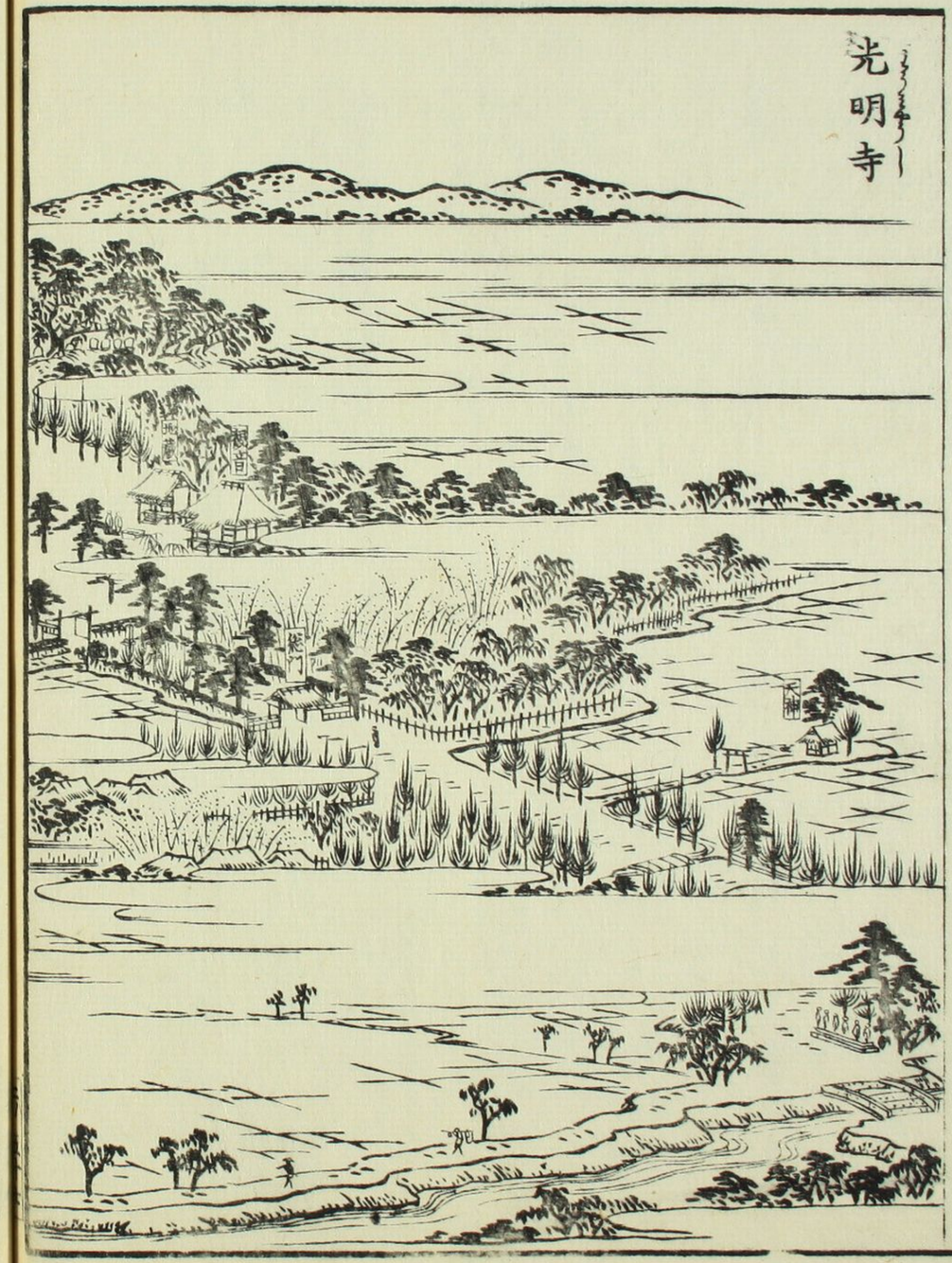
當麻曼荼羅 本堂の後の壁上ゟ掛ゟ西山上人信ゟ数々の曼荼羅を圖繪し
寺ゟ有ゟ第二とも西譽上人曼荼羅と称し當て所々ゟ附与せしめまひとありく則西山ゟある第一と称し當
蓮華となり三草計生ずるよあり人々奇異の思ひをなし来る是を拝せ
ふよ不浄の女人彼蓮華よ手を觸れまゟハ其華萎枯ふると今ゟ残る中品下生の
蓮華の損ふる形ありと記せり

善導大師影像 背善導大師自ゟ至まとなり後金軀ハ筑紫ゟ流れよりしゟハ善導寺ゟ安
置せ今猶存せり 御頸ハ此地ゟ
漂流せしゟハ當寺ゟ迁しまゐらせ

扇一柄 善恵上人ゟ宇都宮實信坊ゟ与へられし扇なり天福元年善恵上人歳五十
三春三月都を発く東國ゟ赴きたまひ其時紫内のくめ實信坊を伴ひて
下まゐらせしゟハ白川の關を越しまひしゟハ必ず忘るゝ事なしと
ありさればよ白川の關を過ると実信坊ハ上人ゟ告るゟをいぶかりて
見の心を詠しまひ実信坊ゟハ北畠禾
ゟ哈の扇ゟ書付ゟひ実信坊ゟわたしまゐらせしハ是ゟ白川の筆



光明寺



此詠解しがたきに似たれども古く云伝へたるよし侍るを記し

開山善慧上人　初禅脱と号く諱ハ證空俗姓ハ源氏天暦聖主の皇裔加州刺史親季の子なり　證空と云ハ父親季の法名證玄と治承元年丁酉十一月九日に生る久我内大臣通親公養て子とせり幼齢より菩提心よ住しける故に吉水上人　源空の事ありの許に投を十四歳薙髪して善恵と号せり性俊逸にして一を聞く千悟ル建久九年の春月輪殿下の請よりて源空上人選択集を著しめ給ふ時も善恵と偕に文義を考定せり或時殿下云く師の滅後此書よ不審あらハ誰よりてか是を決せん師云く浄土の奥旨又此書の要義悉く善恵よ附属ル我よ異なることなかるべしと殿下善恵を崇信しまします甚厚し上人鄙共よ伽藍を建立しめる一十二區又浄土の曼陀羅を圖しく所々よ収め佛經の印板を開き未来の学者よ益あらしむ終に寛治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院よ於て化寂を歳七十一

西山善峯寺よ居しく盛よ宗教を弘通あるし故よ世ゟ西山上人と称しまつるなり　浄宗西山派の大祖師の一世の行状ハ上人傳よ詳あり

當寺往古ハ大伽藍ゆゑ開東の高野山と称し衆人先亡并に逆修等の石塔婆を建参詣の人も多かりしとなり故ゆゑ今も古き石碑石佛の類ひ此所彼所ゟ存在せり

光明寺池　光明寺の南よ湊ゟ往古の矢口ゟ川筋ありし田畠耕作不浄ある時ハ崇りありそ其跡ハ今ハ元のごとく放ちありよし今ハ佛會執行の時ハ彼魚あまた水上よ浮ぶるとなり

新田大明神社　光明寺より五丁南の方　矢口邑よあり　別當ハ古義の真言宗ゆゑして真福寺と号ル高畑宝幢院よ属を祭る所の神ハ新田左兵衛佐義興朝臣の霊ありと十日を縁日とし拝殿のを経営を

本社
拝殿
大王
文ノ社

新田明神社
真福寺
方丈
本堂
庫裡
本馬
鐘楼

本社の地ハ古廟なり則其田
やゝそ蒼樹繁茂も（此地ハ昔の奥州海道ゆゝく往古ハ廟後の斛田の地こゝくく江ゆゝく玉川の流も此地よ儕く流れしことゝり題を矢口社と云ふ今ハ社の方へ向ふ）
沿と称も長凡三百間斗横四十間程ありとゝふ土俗のゝく是も昔の川敷
なりとゝり今ハ水流村（社前より至ての老樹ゝり）
鞍掛掾（社前左の方よ建ゝり文章ハ服元喬書ハ烏石葛辰なり古ハ後の方へ向ふと云ふ今ハ社の方へ向ふ）
古廟碑

矢口新田神君廟碑

昔元弘帝出居南山足利氏立光明帝于京於是南北分朝諸國各擾其黨戰爭數年而新田氏擧族勤王南朝宗人左中將源公義奥卒其族衰神君者中將公庶子名義興勇氣掩世延文中以兵衛助爲南帝密徇東國勢將復振先是足利氏使其子基氏居鎌倉令關東畠山國清爲副時共出次武州惠之畠山以幕中士竹澤事神君因使圖之乃陰共謀俾與竹澤有際逐之竹澤事神君曰臣無罪見疑於國清若得再事舊君願有所效神君納焉乃飾美女止神君不出竹澤不克景而神君亦不猜近之夢惡懼進之有寵既而請覿已家因圖害之美人有夢惡懼密請畠山使江戸氏二人助焉亦俾逐之二人因竹澤來神君納焉於是三人比事焉勸襲鎌倉且曰有朕難襲使分士卒先神君至矢口津從茅十三人肖神君竹澤預舟人謀竄舟而塞之使待于岸既而神君與其人衆焉中流舟人俾失墜船具於水沒而求之陰去其塞泳而逃水入舟將沈竹澤江戸夾岸伏甲爲乃怒呼曰吾爲厲報女自屠死焉後害著至津雷電晦冥神君介而見皆死屠其脇而沒十三人厲不已津民懼乃爲立廟追祀其神至今四百餘年人猶懼威靈不敢褻慢云今年寛保甲子守山矣源頼寛遣使立碑自書篆額乃又使元喬摭舊史叙其略勒石係以迎送辭其辭曰

霹靂激兮電揚光龍車鸞兮玄雲翔神之至兮欲亡常儼如在兮水中央被犀甲兮張彫弓既一怒兮奮鬼雄仇且殪兮懽未窮將以憺兮慈壽宮蒸有醴兮蘭蕙潔余祀兮神無懲永不替水澹々兮清以渕和兮天門霽願余降兮雲往又來兮可濟良辰延享三年春三月守山源頼寛篆平安服元喬撰

烏石葛辰書

新田左兵衛佐義興書簡一通（當社ゟ收む）

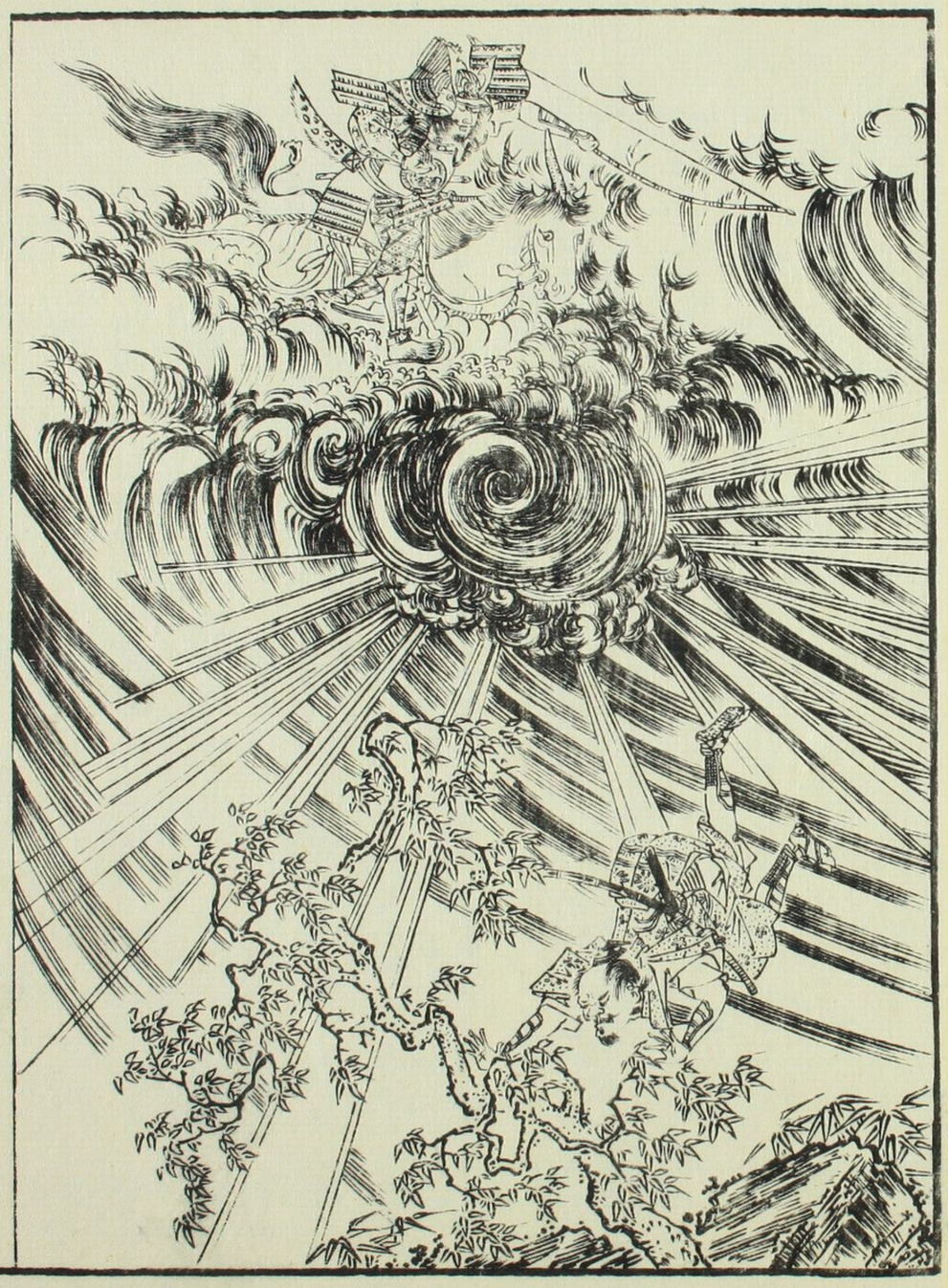
先度以山門書社仰出ゟ丁寧申通候事色異于他ニ候ニ我ゝ仍為此感悦候一文治アゝ晴候ハヽ九州ゟ後弥忠義

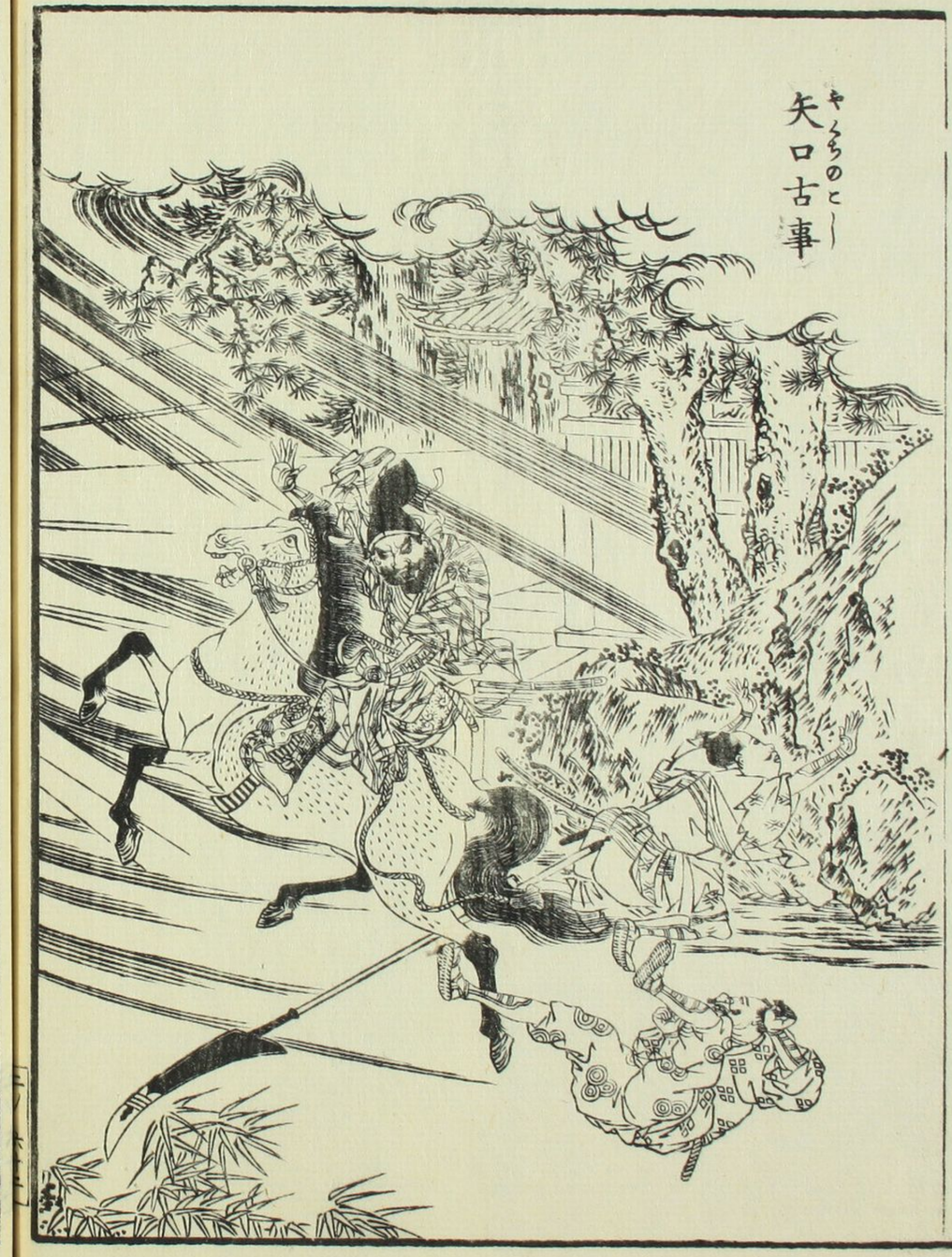
作ら候お伝ふ候ふ事多細ふ候ふ恵寺奈
労可令伝達給ふ候ふ状ふ
十月十一日　　義興判

波多野殿

其余兵器古陶器の類ひ寺宝ハこゝく是を略ス
太平記云　新田左兵衛佐義興ハ義貞の妾腹の子なり上野國ふ居ル
家ふ志ある輩ハ此義興を大将ふ取立三万余騎ありく共ふ鎌倉へ責上る頃新田
吉野へ参りこゝろざしハ先帝叡感ありて義貞の家を興さるべき器なりとて
名を徳寿丸と申せしを元服せさせ新田左兵衛佐義興と召れ
智謀衆ふ秀ゐれハ元平七年むさし野合戦ふ
當るべき者ハ古今独歩なり　父左中将戦死の後ハ越後國ふありしふ武蔵下野の國
中ゆく新田家ふ志を寄る輩ハ音信を通しゐれハ両國の間ふ
其勢漸く萌せり然ふ此ま鎌倉へ聞えられハ管領足利左馬頭基氏
畠山太夫入道道誓大ふ驚き義興ふ所在を尋ね度々勢を向ると
いへとも義興事ともせすして打破ま千変万化まゝく人の態ふあらハ

故ふ是をそゝあまし道誓潜ふ竹澤右京亮と謀ま竹澤を義興
ふ下らしめ夫より後種々の毒計を用ひ義興を討んとまれとも未時
至らを　竹澤右京亮ハ旧義興むさし野合戦の頃其ま属しく忠ありられとも
後鎌倉方とありしより旧好を忘れかゝる無道の翔をハなせしふり
竟ふ美女をそゝく心をそゝく無二の味方と思ハゝ近ふありしふハ
竹澤偽ま鎌倉を亡さん謀を運らし大ふ義興をもあしふハ義興
其意ふ随ひ延文三年十月十日の暁主従僅ふ十三人忍んてこゝゑゝ
發向ま既ふ矢口の渡ま舟ふ乗ま竹澤先ふ謀をまらく故ふ
渡守謀て櫓楫を取落しま是を採んとのひ偽く水中ふ入兼く鑿
置くり舩底なる二川の穴を塞し水を抜られハ河水注き入く其
舩沈むとまる時向の岸なる江戸遠江守ふ伏兵河辺ふ起ま興をひく
こゝふ於く義興初其謀を察し大ふ怒て自ら腰撥切てま失ゐふ井
弾正も績ひく自殺し其余世良田右馬助大島周防守ありひ田良
兵庫助同新左衛門尉等ハ引組て差違ひ又ハ互ふ首を撥落し





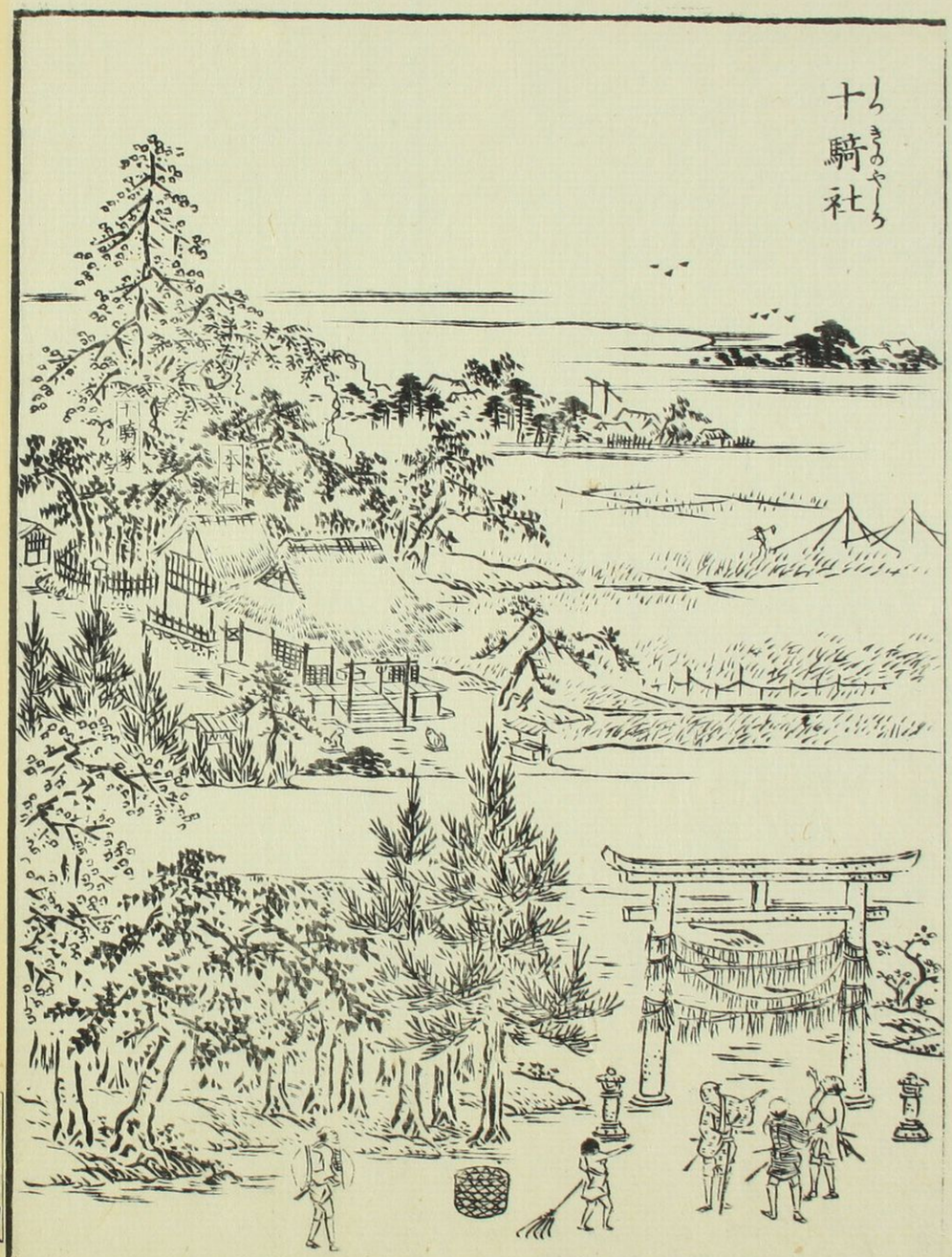
やくろのこと
矢口古事

てぞ死しける土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ水底を潜りく向ふの岸よ欠上り主従十三人（太平記の書よ討死の人数十三人とあれと義興を共よ討死せり其余四人の名を注せり）其後竹澤及ひ江戸の両士等ことくく九人の名を注せり）其後竹澤及ひ江戸の両士等ことくく其首級を尋出し入間河なる基氏の陣へ馳参し實験よ入しかは其後同十月廿三日遠江守ハ今度勝ちし恩賞の地へ下らむとし日暮よ及ひ矢口の渡よかゝる時雷頻よ鳴雹きれハ懼もく馬を走せとある辻堂よ入らんとす（此辻堂と云ハ鵜木光明寺観音堂のうちとのつたへ）折ふし黒雲一むら江戸ら頭の上よ落下りそ雷電月の邊よ鳴閃めきれハ餘ら人ハ怖しく後を此と顧ふる義興火鼠の鎧よ龍頭の五枚甲の緒を縮く白栗毛なる馬の額よ角ありて生たるふ乗鞭をそゝく打く遠江守を弓手の物よ引ゐ鐙の鼻ふ落下りそかゝりけるを乳の下へかけ切つと射通さゝと思ひく馬より倒よ落て悶絶しそを従者共奥よ乗せく家よ帰りける七日の間水よ溺れる真似をしそ死よける又翌の夜畠山入道の夢よ新田義興奥長二丈ある鬼とあり牛頭馬頭阿防羅刹共十餘人を前後よ隨へ火車を引く左馬頭の陣中へ入とそ見るゝ其日雷火よかゝりて入間河の在家三百餘軒堂舎佛閣數十箇所一時よ灰燼となりすと矢口の渡よ夜く光物出く往来の人を悩し一種くの祟ありて土民是を怖れあひて義興の霊を一社ふ奉祀し新田大明神と崇ると云云（以上太平記の要を摘む）

十騎社　同所道を隔て向ふよあり新田左兵衛佐義興の家臣十人の霊を祀る此所も拝殿のミありて本社ハ一堆の荒塚のミあり土民登与瀬明神と称も事實ハ先ッ詳なり

十騎とハ所謂
由良兵庫助　井弾正忠
土肥三郎左衛門　同新左衛門
（上ハ人の名太平記ハ然よ異本よ松田与市宗道飛七堺壹岐権守進藤孫六左衛門等の名あり猶ほ其餘の人名今考へ得ず）
日本武尊祠　傍よあり摂社とも相伝ふ此御神をみるよ鎮座なし

大島周防守　南瀬口六郎
世良田右馬助　市川五郎



奉るものハ尤久しとぞ　此地上古ハ奥州への街道やゝく日本武尊東夷征伐の時発ゆく矢合せしより旧跡なりとぞ　矢口の地名も此事によるとぞ

六郎の川を開て稲もの地ゟ矢向と云邑名あり

既も其時の矢の向ひくる地故ゟ矢口となり

古川薬師如来堂　古川村ゟあり新田明神ゟ東南の方二十丁ゟも

を開つ醫王山世尊院（或作東光院）安養寺と号ク新義の真言宗やゝく

高畑村の宝憧院ゟ属を上古ハ東光坊と号せしとなり本堂の額醫

王山の三大字ハ黄檗高泉の筆なり

本堂　本尊薬師如来　五尺五寸　左右弥陀釋迦二尊ハ各五尺三寸　脇檀十

二神将及ひ四天王の像も共ゟ行基菩薩の作なり　往古當寺ゟ存ス

瑞光を現を依く彼ゟを　ル所の銀杏樹ゟり

以く像村とせーと

銀杏樹　本堂の前左右ゟ二樹並び立ち諸人乳のつきもの祈るゟ験ありてそ此靈

樹の下ゟ求む祈願を書て奉ル　凡四五尺又ハ三尺ゟあり

杉本靈泉　本堂の前右の方の杉の下ゟあり其験あり眼疾を患ふる者此靈水を以く

洗ゟ

五智堂　十王愛染の像もあり本堂の右ゟ並ゟ

古川藥師（ふるかわやくし）

寺記云行基菩薩関東遊化の頃和銅三年庚戌此地ゟ至ゟ
今安置ー給ふ処の本尊薬師佛并脇士弥陀釋迦の両如来及ひ十
二神将四天王二王の像共ゟ自造立せられこゝゟ安置ありしゟ遥の後
天平五年癸酉春三月　聖武帝の后王子涉延生の頃乳味盡させ
給ふ故ゟ行基菩薩の奏ゟよりて當寺の藥師佛ゟ祈誓ありて
其驗を得給ひし頃銀杏樹二株を奉納なし給ひて又同年の
秋佛堂造立なし給ひ七堂伽藍の靈地となれりとぞ
婦人乳の少きもの至心ゟ祈請然ゟ遥の後此地の領主某諸宗責伏の宗
旨ありし時ハ如其ありとぞ
汎ゝて當寺の繁栄を深く妬ミ堂塔破却ー給ふハ銀杏樹の根
下ゟ捨て風雨ゟ浸さしむ其罪業ゟ如来の靈應著ーて今も
方ゟ勸進ーて一宇を営ミ本尊を移ー奉るを移ー奉りし
按ゟ武藏國風土記残篇ゟ荏原郡満田郷満田寺ゟ清宗法師藥師佛を安置
せりとありしハ當寺をいふありしも古川村大森蒲田等の辺其地ハ相應せしや梅樹多く其実を採て都下ゟ
記しゝあり今も
證くるゟ多しこれをとりあそ考れハ上世の満田ゟうん元梅の木ある郷又和中散もある

大綱山光明寺　高畑村ゟあり宝幢院と号ス新義の真言宗ゆゝく
本尊ハ大日如来恵心僧都の作なり當寺ハ保元年間の創立ゆて
脛山を行觀上人と号せり
大森　鈴の森ゟ南不入計村ゟ隣ゟり小田原北条家の所領役帳に
渋谷又三郎及ひ六郷慶　此人ゟ球磨　所領とある中ゟ六郷内大森とある八則
此地のゟなるも
太田持資平安記行　大森とそ
大森の西ゟ下うけの海ゟふもゝゝ立とぶりうる　持資
貴舩明神社　大森村海道より右ゟある此地の産土神ゆて別
當ハ真言宗大森寺と号ス来由詳ならス
蒲田梅　蒲田邑ゟあるも　蒲田ハ和名類聚抄ゟも武藏國荏原郡の中ゟ加へ
訓もとあり小田原北条家の分限帳ゟ蒲田助五郎六郷堤方及ひ稲毛在本月郷今井在ゟ分ゟの地を領ゟるもの
も此地の人とおぼしゝ又同書ゟ圓城寺所領の中ゟ六郷内鵜田とあるも此所のゟとなるへし

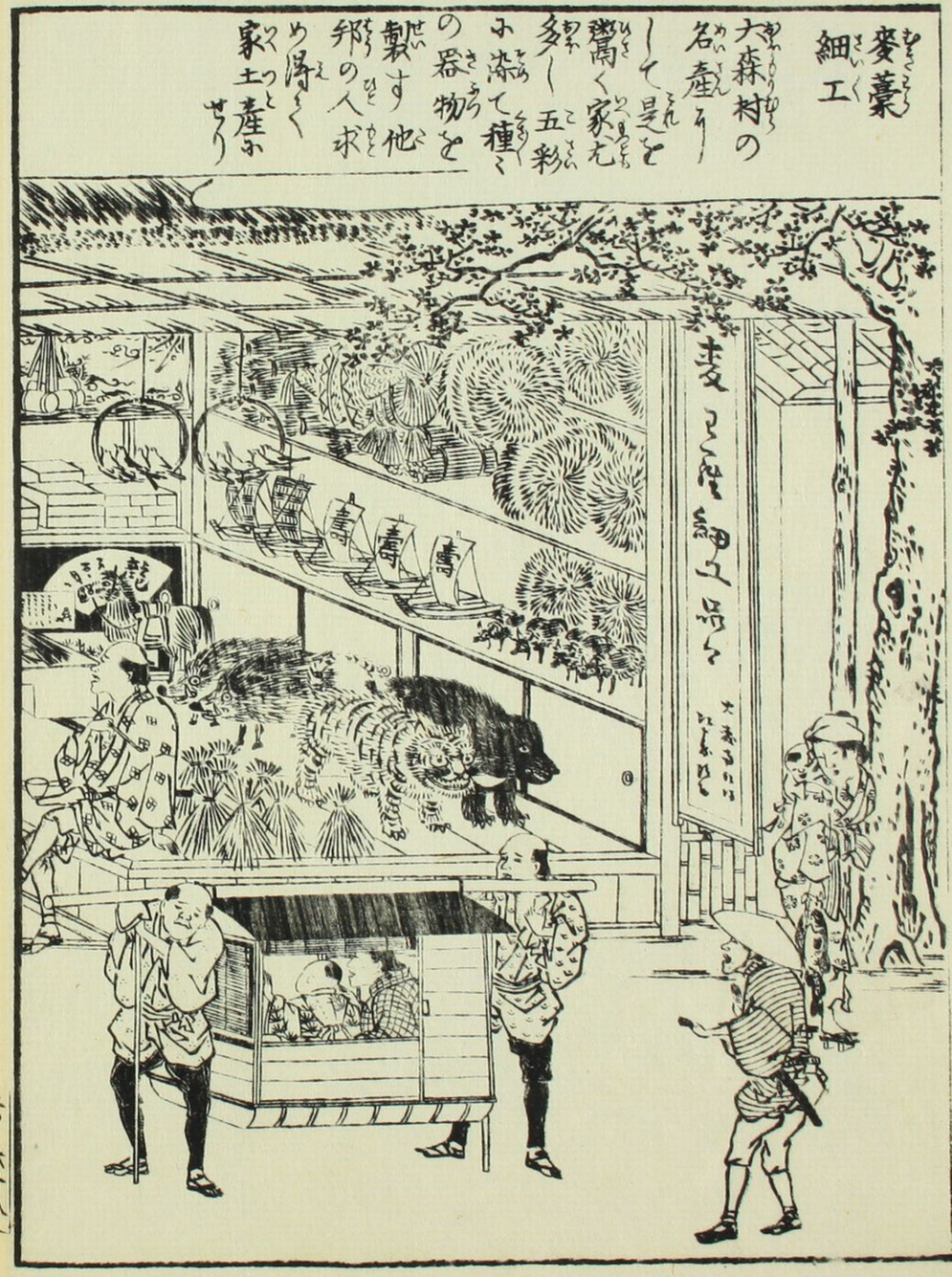
浅草海苔

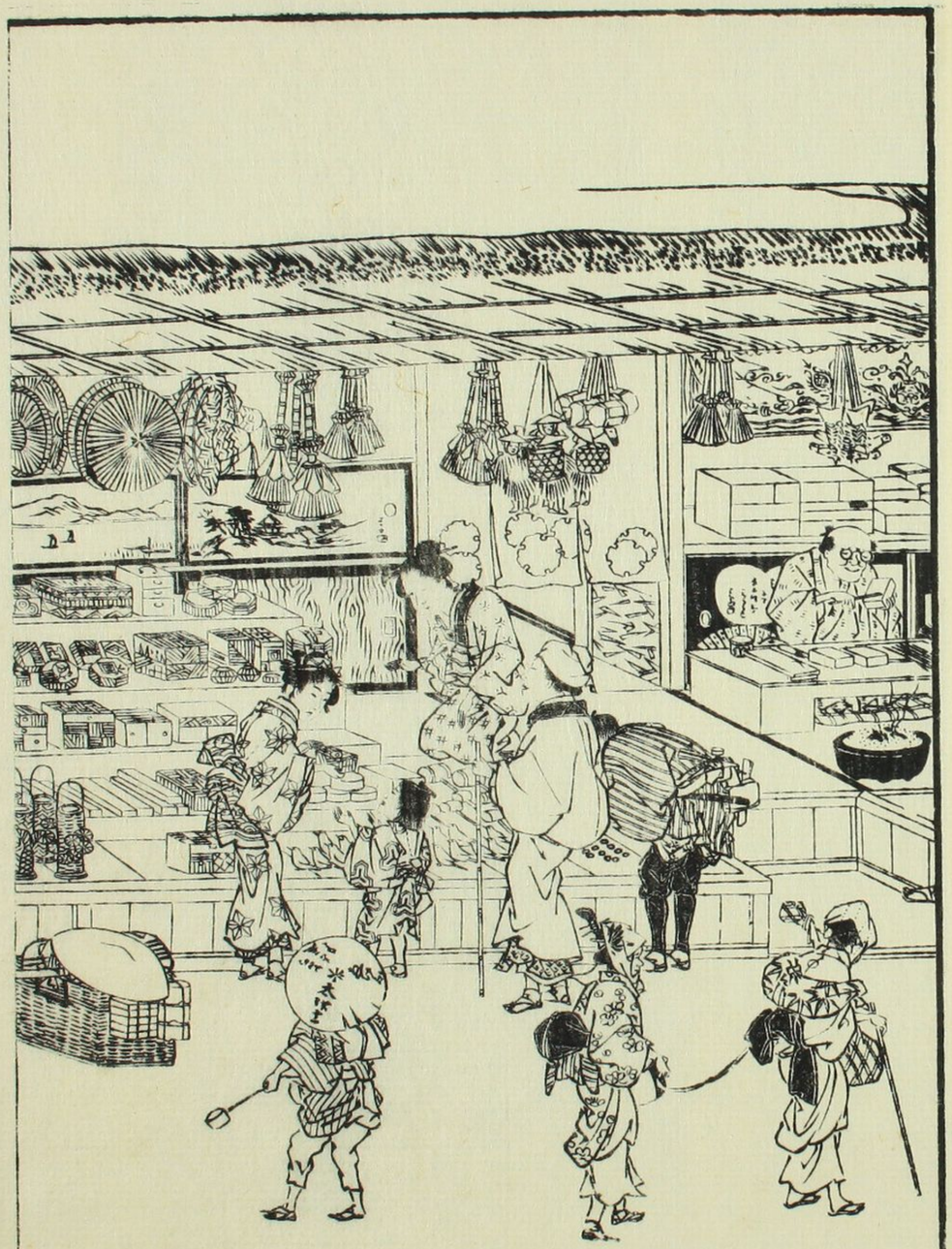
大森品川等の海
にのみ産せり是
浅草海苔と称せ
らるゝ往古かゝる
海にのみ産せしかゝ
其旧称を失ひ
しものゝ如く
呼来まり
秋の時正ゝと
雑衆茂
建春の時
正に止るを
定規とせ
寒中に採
るものを
絶品とし

一年の間
囲置とも
も色
合風味
変ることなし
高貴の
家中も
賞翫
をゆて
諸国共に
送りて
是を産
業とする
者夥し
く実に
江戸の名
産なり

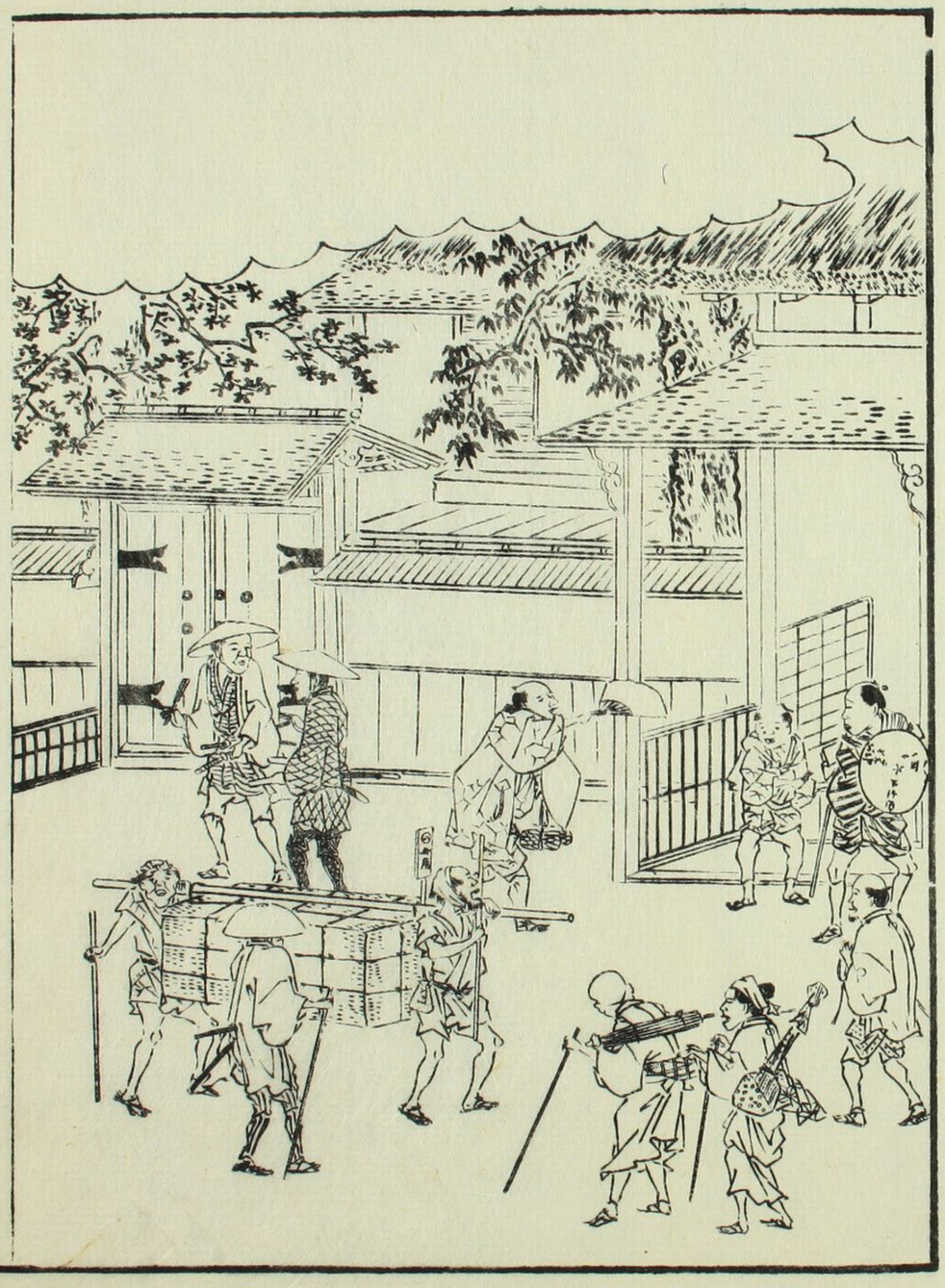
麥藁
細工

大森村の
名產ゆ
して是を
夥敷家元
多く五彩
染て種々
の器物を
製す他
邦の人求
め得ざる
家土產ゆ



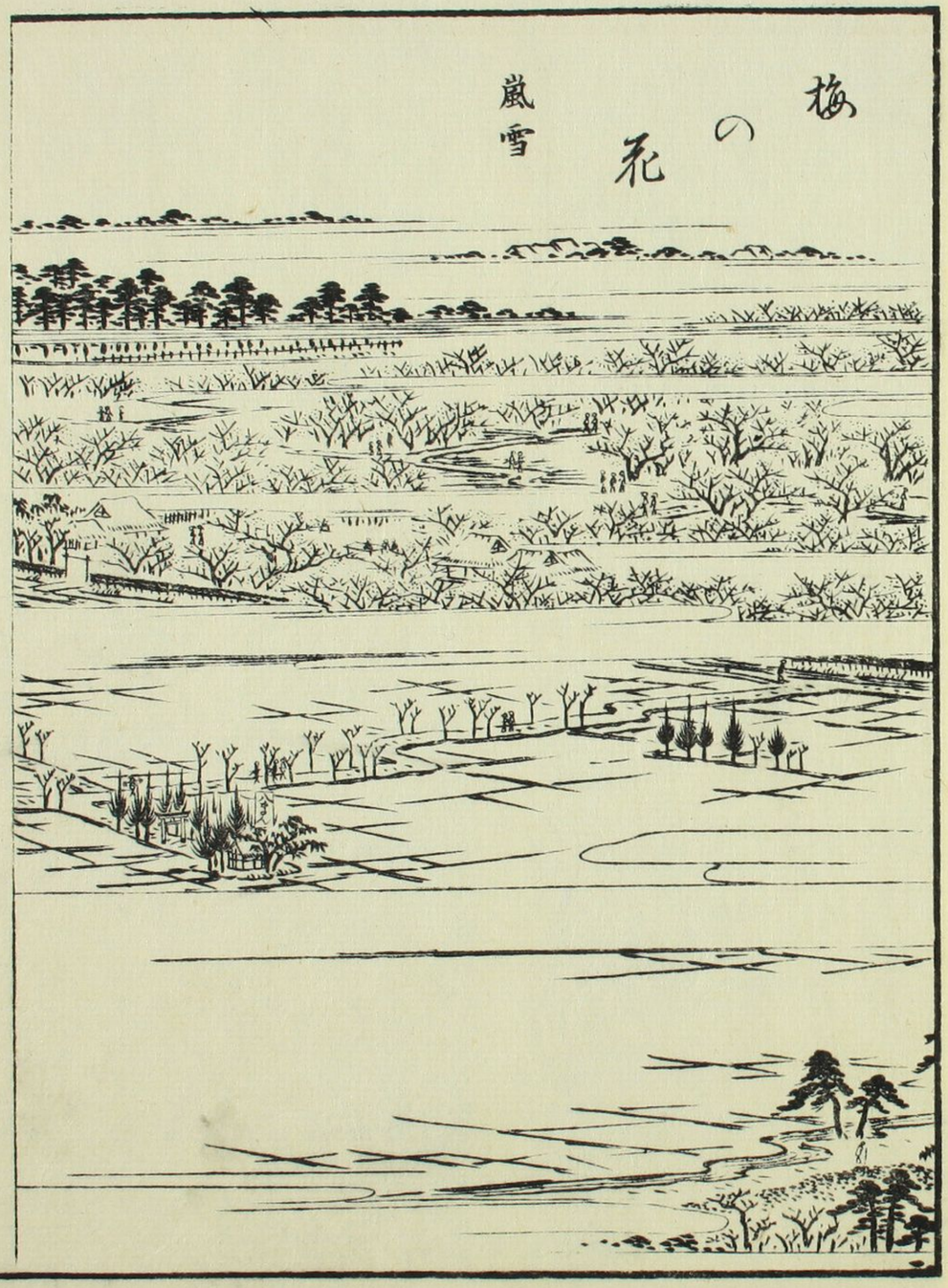


大森和中散



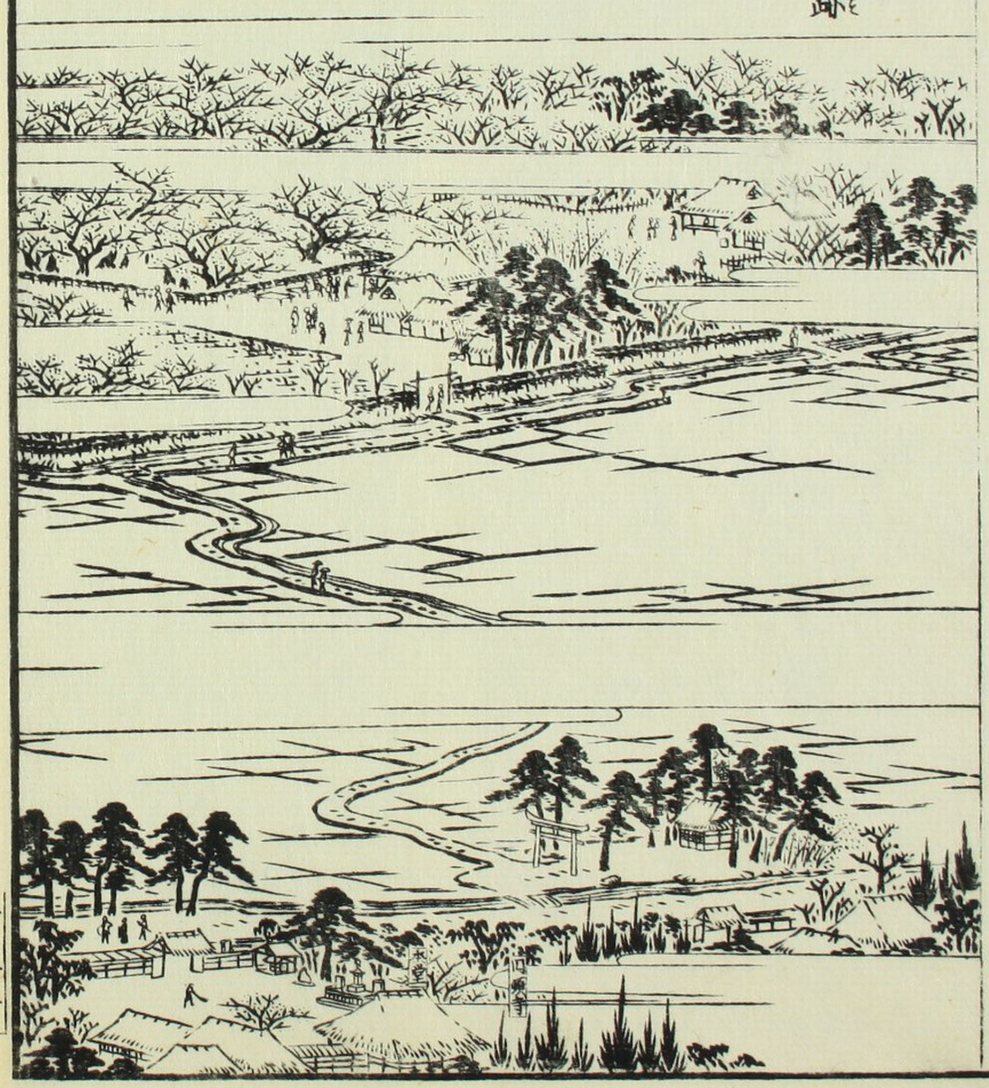
梅の花

嵐雪



梅干て見わ
ん

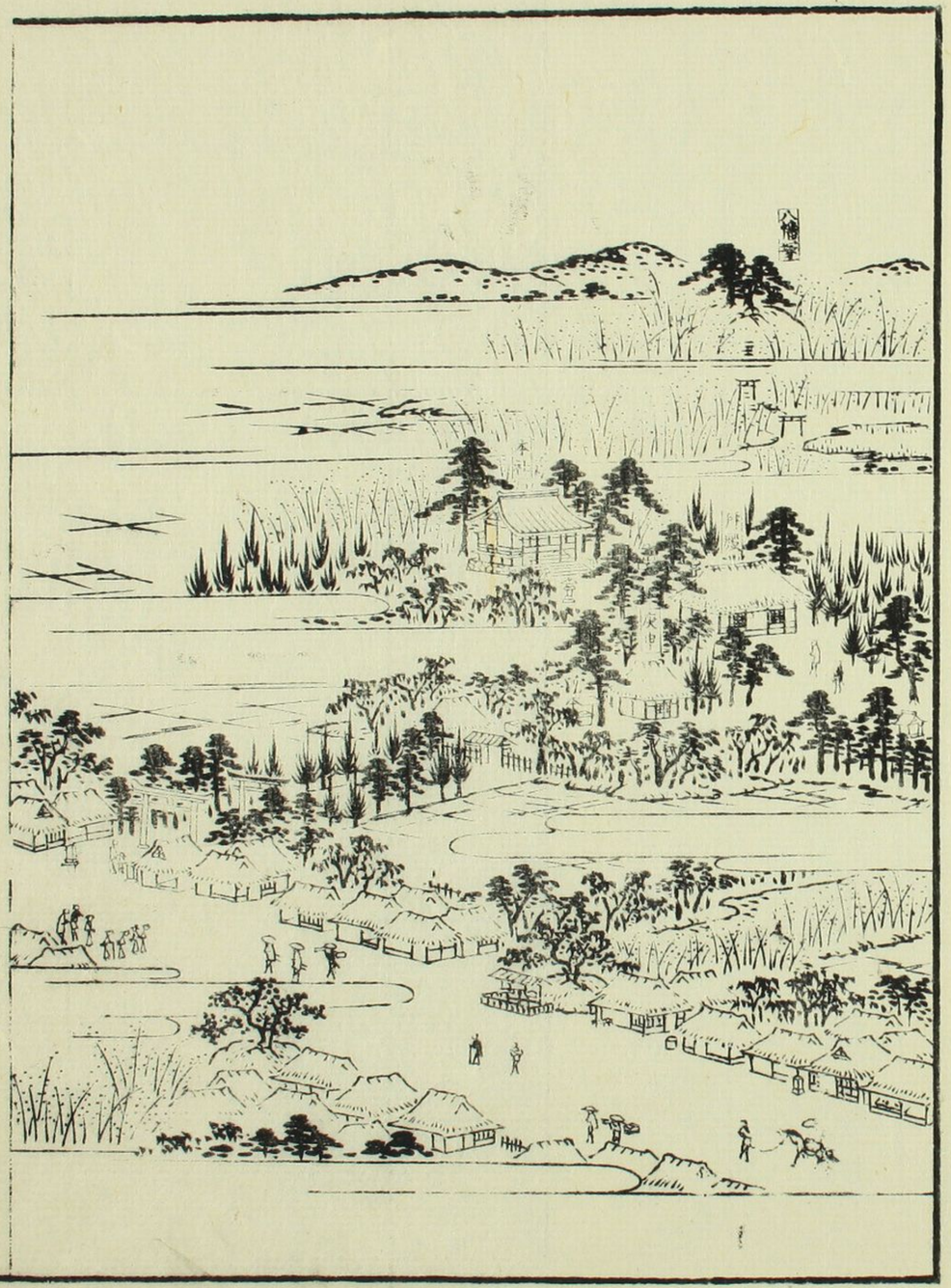
蒲田里梅園
行方運正宅跡



此地の民家ハ前庭後園共よく悉く梅樹を栽て五月の頃其實を採く都下よ鬻くされハ二月の花盛ゆゑ幽香を探ゑ遊ふ人火の
ごとし　三右衛門とゆふる農民の園中殊よ老樹ゆゑ花香尤勝れり
行方彈正忠明連宅地　六郷八幡塚の辺を云ふん此地よ卿園村と
いふ所あるも明連う花園の旧地ありし故よあう号くるとゆふり
性光山圓頂寺　蒲田村よあり日蓮宗池上本門寺よ屬を本ゑるハ
釋迦多寶等の木像を安置ゆゑ開山ハ九老僧日證上人　池上大坊の開基なり
中與ハ日藝上人なり　寛永二十年癸未二月朔日寂　當寺ハ小田原北条家の臣六郷の
領主小田原北条家の分限帳よ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を
行方彈正忠明連与次郎ハ彈正忠の氏族をゑるひそ始の名なる
行方彈正忠直清ゥ宅地の旧跡ゆゑく當寺開創の檀那なり
當寺過去帳よ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と
称ゑ父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月十八日直清小田原の陣よ於て討死をとゆふ　其墓碑ハ堂前左の方ふ
存せり寺前よ存ゑる所の溝堀ハ當時直清此地よありし頃の構の

外堀を其儘よ用ゐると云小田原記よ永禄九年武田信玄小田原ふ
人數少き隙を窺ひ思ひよらざる方より小田原へ押寄るとある条
下よ六郷よ行方彈正居うし間己ゥゆゑきの近所なる八幡を要
害よ構へ稲毛の田島　田島兵部左衛門之房とゆふ
を引卒し搆を燒落しゆく甲州勢を通さを信玄ハ品川の宇多河石見守　按よ横山式部少輔成之歟とゆふ
鈴木等を追散して六郷の搆落され八池上へかゝる池上寺を追捕し　池上寺ハ本門寺
をゆゑ此寺の僧を案内者として矢口の渡を舟よく渡を稲毛の　横田　駒林　駒林圖書定朝をゆふ　等
平間とゆふ所へ渡を稲毛の十六郷を追捕ゆゑとゆふり

蒲田八幡宮　同所道の傍よあを前よ記せし小田原記の文に行方
彈正其宅の辺なる八幡を要害よ構ふとあるハ當社のゆゑなるべし
按よ三代實録よ貞觀六年八月十四日戊辰部して武藏國
從五位下蒲田神を以ゆゑ官社よ列をとあるも當社のゆゑをゆふ
行方山妙安寺　海道の内新宿よあり日蓮宗ゆゑく本門寺よ屬を
本尊ハ三寶よして開山ハ日現聖人なを行方氏室圓光院妙安日行


八幡宮

八幡塚
八幡宮

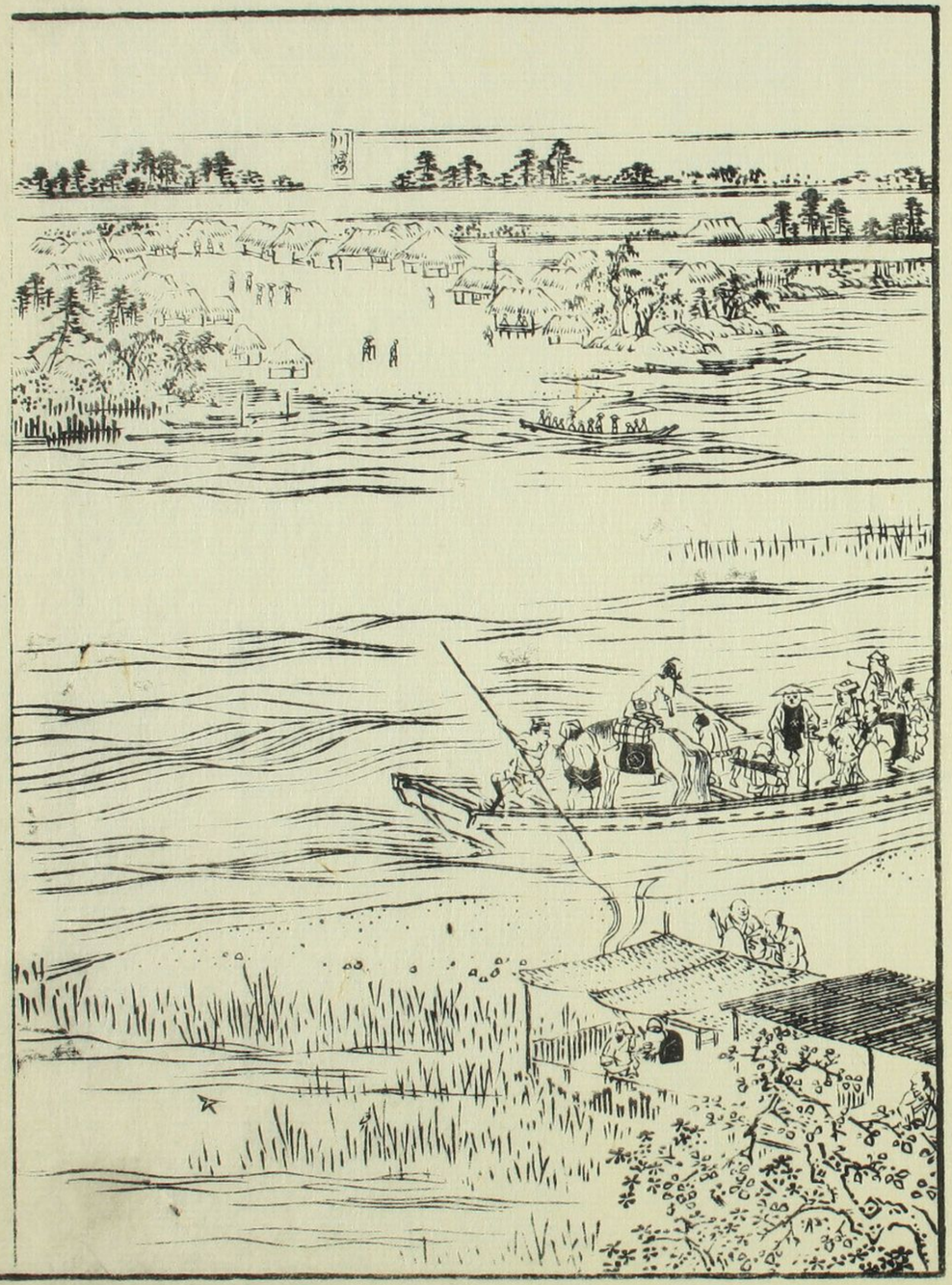
大切の菩提所と云 天正十七年丑
朗羽山長照寺 獵師町よあり日蓮宗なり當寺よ豊太閤秀吉公北
守佛なりと称しく北辰妙見大菩薩を安也
六郷八幡宮 六郷の惣鎮守ゆえ八幡塚村よあり別當八真言宗ふ
しく浄幡山宝珠院建長寺と号ス相伝ふ鎌倉右府将軍頼朝卿
安房國より大軍を率ひ鎌倉へ入ふ頃此所よ簇を建軍勢の
著到を記ひ旧跡ありとよ也
勧請しふとよ祭禮六月十五日ゆえ神輿羽田より大師河原へ
移ふなふ當社よ頼朝卿建立の時掘原奉行せしふを記せし
梁牌ありとよ也 按よ掘原ハ景時なり馬込村万福寺の条下よ挙る所の小
田原北条家の幕下掘原三河守或ハ掘原助五郎等の内なり欤
八幡塚 本社より右の方の蒼林の中よあり樹木繁茂せり
古家數 當社大ぐの石橋の通りを古の海道と称せり又竹林あり 簇立杉 社地よ
あり 按よ行方彈正明連ら家の跡なるふ欤
背頼朝卿

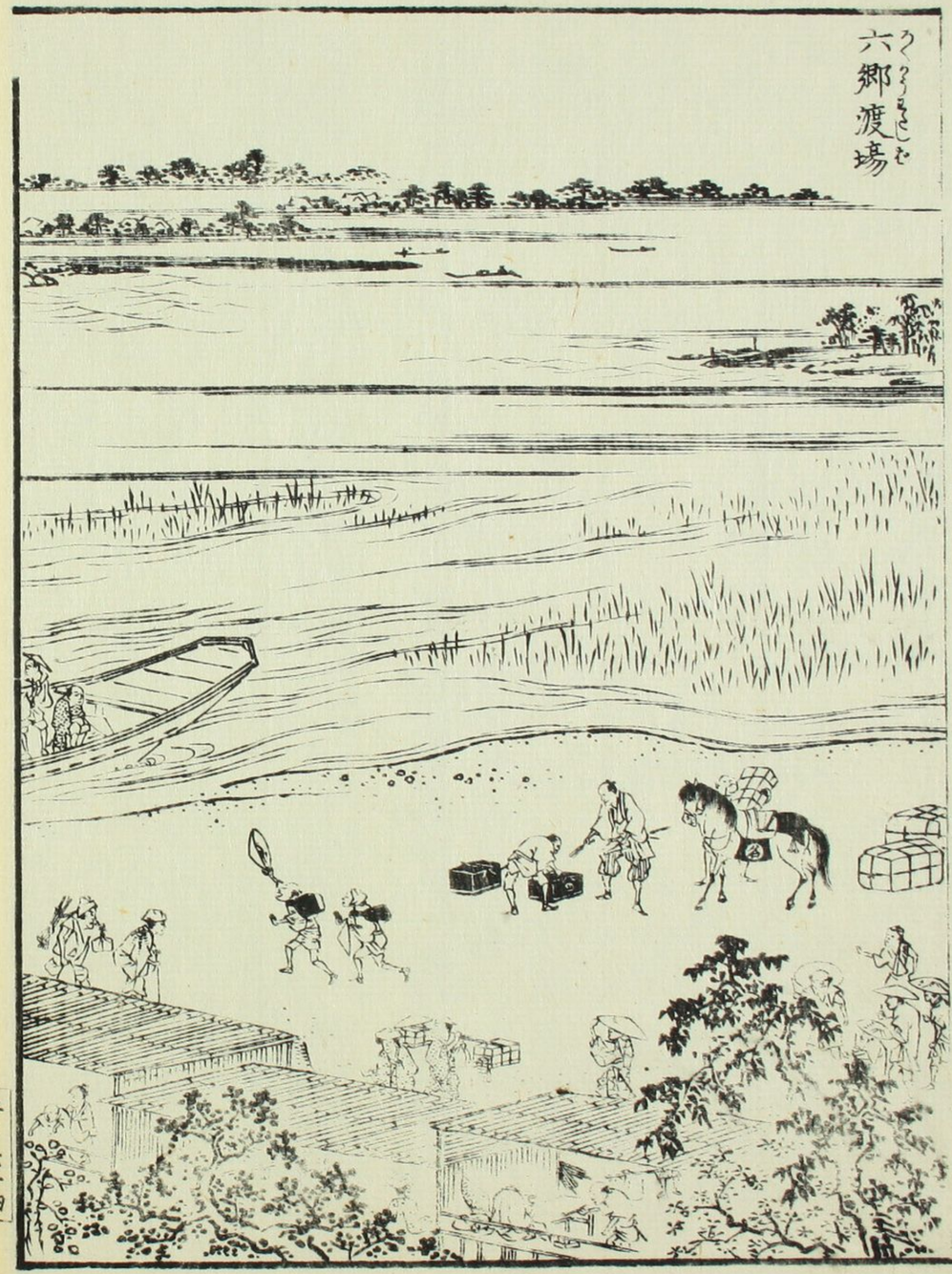
六郷渡 八幡塚の南よあり此川ハ多摩川の下流ゆえ八幡塚より
河崎の驛への渡しなり昔ハ橋を架せしら享保年間田中丘隅と
いへる人の工夫ゆより洪水の災を除んるよ橋を止めて舩渡よせしとあり
旦中丘隅ハ俗称休愚右衛門嘉古と称す冠帶老人と号ス能く水理よ達也相州酒匂川の
水を治めしも此人の工夫ゆえ今も其河原よ其事を記せし碑あり又民間省要この
書を著をしふ遠宗の寺境よその墳墓あり
十間とあり 東海道名所記よ此橋の長さ百二
東路の四大橋といへる江州瀬田参州矢矧同吉田及ハ此六郷の橋多由
和漢名數よ又江戸の三大橋とハ両國橋千住大橋ハ六郷橋ありとよ

癸未記行

注云俗訛畠山重忠嘗居于此雖不考于旧記然重忠者武州甲族而屢往来鎌倉則不可無其理故首句及此云 生

河崎東畔六郷里俗称東長攻城野戦報君恩撃龍附鳳勇功士往事悠々遺蹤蕨嶺嶋去江城五里許出者入者日頻繁闘國列侯宣異域來朝投化者万歳高会同處輿馬剣矛僕従経過皆是名走輿利奔可笑呼可汗尊女子士農工商幾経過後弄胡獅玄霜摠盡朝裝氏丁尾生約成憶許渾菊花禪徒自斯出顧視江城殆消魂印吟成開時自斯入政及江城望衡門三月遠征幸歸早撥今日歡非不可言



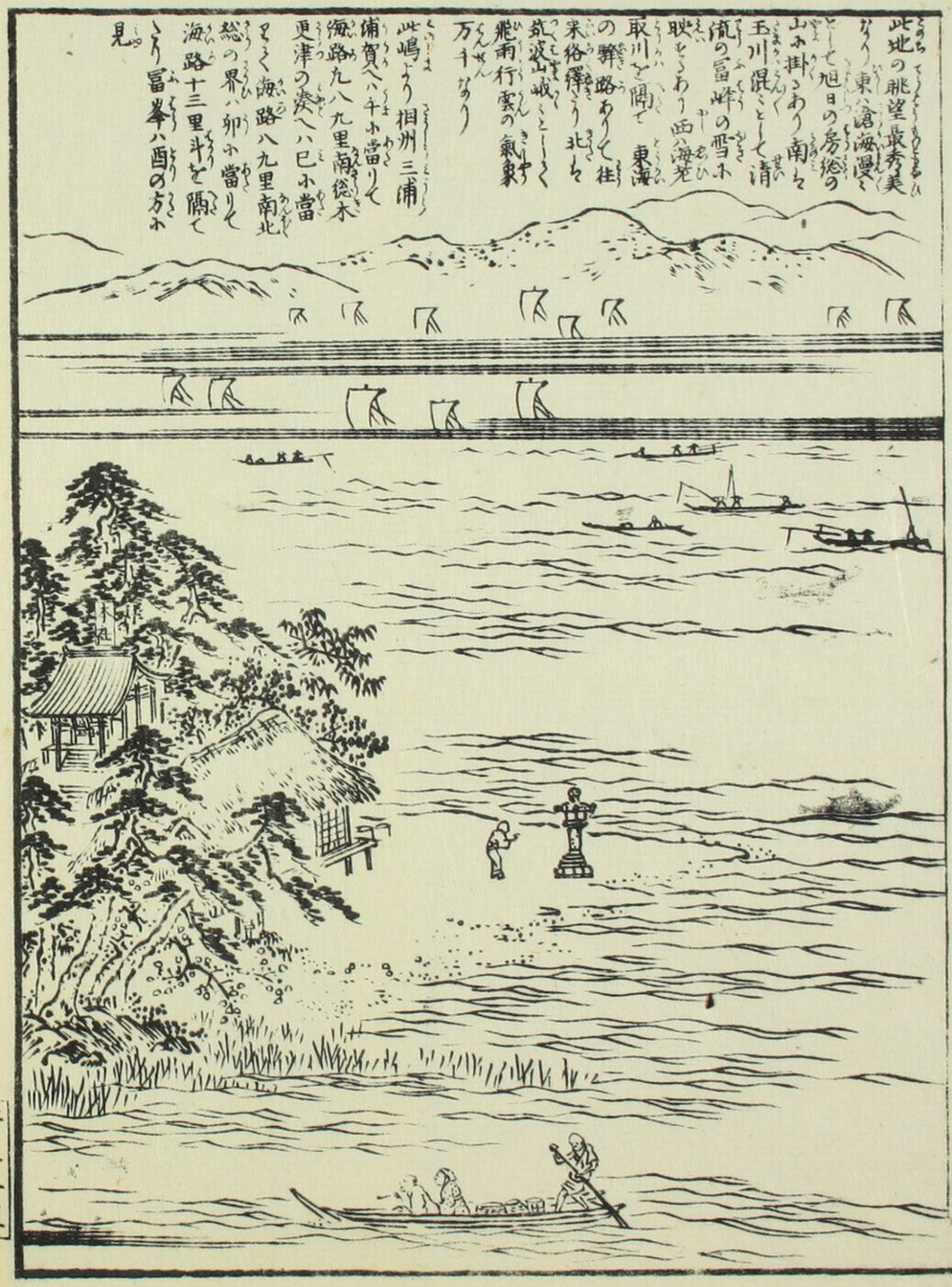


六郷渡場

羽田
辨財天社

此地の眺望最秀美なり東に滄海漫々として旭日の房総の山々掛かり南々玉川浜くとして清流の富峰の雪ホ映をうあり西ハ海老取川を隔て東海の野路あり北々米俗澤という北々筑波山峨々として飛雨行雲の氣象万千なり

此嶋より相州三浦浦賀へハ十ホ當りて海路九八九里南総木更津の湊へハ巳ホ當りて海路八九里南北総の界ハ卯ホ當りて海路十三里斗を隔てり富峯ハ酉の方ホ見



縁起異同

又當社よ如意寶珠一顆を安置せる
といふ相傳ふ武州日原山ハ弘法大師開創の地なり山中よ大日孙
靈水と称するあり水中一顆の宝珠を存せ然よ往古此宝珠玉
川の流よあらひ羽田の辺よ止る水中昼夜靈光を現ぜ依上人
ひそんて祠を下し是を得る後社を建て崇敬を當社是なりと
云云 略縁起ゆを康治二年の春當社の南の大河よ祠引して一顆の
宝珠をぬきり故よ玉川ゆ改才天女と称しるとも
社廢を経営するとのへども屢風波の災よあひ永く保ち
ハさりしろ別當海誉阿闍梨法華経全部の文字を一字一石ふ
書寫し此海底よ沈めて島を築き宝殿を建立をその感應や
あらん夫より已降青松鬱蒼として繁茂し庭上苔むし竟ふ
風波の難を免るるを得ざるなり

天波のものふして其實金銀銅鉄の類よあらざるを云ふ

要

鳴辨財天社 羽田村の南の洲崎よあり故よ羽田辨財天とも称せり
此羽田の浦と扇の濱と別當八真言宗やゝく金生山龍王蜜院と号ぜる
辨財天女の像ハ相州江島本宮巖窟辨財天と同躰やして弘法大師の
作なりとの〻へを此靈像背江戸有馬矣藤原純政の家よ傳へく尊
信あるよふ當社海誉法印の時靈夢よ感ずる所あるを以て宝永八年
辛卯四月此地よ迁しまるとなり

品川大竜寺開山香國禪師正德三年よ誌せ所の社記と有馬家の

按よ北条家の所領役帳よ六郷殿六郷大森分同小花和の地を領し六郷の内大森を渋谷又三郎領を又六郷内鎌田を圓城寺同提方ハ蒲田助五郎六郷内原分ハ嶋津弥七郎六郷雪谷同入不計花井分共よ大田新六郎六郷内新井の宿ハ梶原日向守同入不計藤何某同牛久新次郎同一ノ倉蒲田分同戸越村梶原分ハ太田新六郎記吾郎ハ弁ハ領せり樂寺分ハ郷内根岸梶原分新三郎領せり大師河原行方与次郎ハ郷内万遍院分六郷内蓮沼雄田林春斎先生かく寛永二十年癸未記行よ畠山重忠ハ武州甲族ハ鎌倉へ往来を其理ありと雖ゟ旧記を考へを然よ重忠も畠山庄司次郎とのひしより江戸名勝志よ渋谷金王丸の一家をゆて一家を渋谷庄司次郎重國といふ者ありと雖ゟ川崎の六郷へ移住せ一ノ倉ハ蒲田の内鎌倉へ往来の時靈夢よ感ずる所あるを以て宝永八年辛卯四月此地よ迁しまるとなり

至子横山町
成内諭一郎